秋田県文化財調査報告書第224集

# 秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

－待入III遺跡－

1992・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県文化財調査報告書第224集

# 秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

－待入III遺跡－

1992・3

秋田県教育委員会

中央平坦部・丘裾部を望む

掘立柱建物跡調査状況

# 序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これらの文化遺産は現代に生きる私たちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局秋田工事事務所により、秋田市上北手から昭和町豊川に到る秋田外環状道路建設事業が計画されました。路線は周知の遺跡である待入Ⅲ遺跡にもかかることが判明し、秋田県教育委員会では、工事に先立て発掘調査を実施いたしました。

その結果、中世の建物跡・井戸跡・火葬墓などが検出され、大きな成果を上げることができました。

本書はこの成果をまとめたものでありますが、県民各位の文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、建設省東北地方建設局秋田工事事務所、秋田市教育委員会、ならびに地域住民の皆様など、調査にあたり御指導、御協力下さった多くの方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成４年２月27日

秋田県教育委員会
教育長　橋本　顕信

# 例　言

1．本報告書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った秋田外環状道路建設事業に係る待入Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の編集は、秋田県埋蔵文化財センターが行った。

3．本報告書に掲載した２万５千分の１・５万分の１の地形図は、建設省国土地理院発行の地形図を複製したものである。

4．遺跡における層相の色調観察は、小山・竹原著『新版　標準土色帖』（1973）を使用した。

# 凡　例

1．本報告書の挿図ならびに図版は、次の要項に従って作成されている。

1）遺構の記述について

遺構実測図は、構成上不定縮尺である。

遺構実測図の中の矢印は、国家座標第Ｘ系座標北をしめす。

遺構確認面は、平行線のスクリーントーンで示した。

遺構埋土の土性区分については、厳密な基準にもとづく標記ではなく、砂・シルト・粘土の３区分で分け、対応する性質を付記した。また硬度についても、埋土における相対的な区分であり、ちみつ・ややちみつ・粗しょうの３区分のいずれかを付記した。

土坑・火葬墓・井戸跡については、（　）内が現場での注記番号であり、本書では新たな番号をつけて編集した。

2）遺物の記述について

本報告書に掲載した遺物は、発掘調査によって得た資料のすべてではない。

実測図は次の縮尺に統一してある。

［土製品］土器：1／3、陶磁器：1／2、その他の土製品(土錘等）：1／2

［石製品］石器（石鏃・石匙・石篦）：1／2、礫石器・砥石：1／2、

捜図番号の下には、グリッド名・層位を付記した。層は各地区の模式図番号に対応する。

写真図版の縮尺は、土器以外は実測図とほぼ同じである。

# 目　次

序　i
例言・凡例　ii
目次　iii
挿図目次　iv
図版目次　v・vi

第1章　はじめに……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査要項……1
第2章　遺跡の立地と環境……2
　第1節　遺跡周辺の地形……2
　第2節　周辺の遺跡……3
第3章　調査の概要……7
　第1節　遺跡の概観……7
　第2節　調査方法……7
　第3節　調査日誌……8
第4章　調査の記録……11
　第1節　調査区の地形と層位……11
　第2節　検出遺構と出土遺物……12
　第3節　遺構外の出土遺物……41
第5章　まとめ……69
　第1節　遺構の立地と年代……69
　第2節　遺跡の性格……70
　付　編……72

# 挿　図　目　次


第１図　遺跡周辺の地形分類……2
第２図　周辺の遺跡分布図……5
第３図　遺跡位置図……6
第４図　グリッド配置図……9
第５図　土層模式図……11
第６図　第1～3号火葬墓、第1～3号土坑……13
第７図　Ⅰ区遺構位置図……15・16
第８図　第１号井戸跡出土遺物……17
第９図　第１号井戸跡、第４・５号土坑……18
第10図　第２号～４号井戸跡、第６号土坑…21
第11図　第２・３号井戸跡出土遺物……22
第12図　第４号井戸跡、６号土坑出土遺物…23
第13図　Ⅱ区遺構位置図……25・26
第14図　掘立柱建物跡……27
第15図　第５号井戸跡、第７・８号土坑……29
第16図　第５号井戸跡出土遺物……30
第17図　第７・８号土坑出土遺物……31
第18図　Ⅲ区遺構位置図……33
第19図　第４～７号火葬墓・出土銅銭……38
第20図　第８～15号火葬墓・出土銅銭……39
第21図　第16～22号火葬墓……40
第22図　遺構外出土遺物―土師器・赤焼土器―……47
第23図　遺構外出土遺物―赤焼土器―……48
第24図　遺構外出土遺物―須恵器＜杯＞―……49
第25図　遺構外出土遺物―須恵器＜杯・蓋＞―……50
第26図　遺構外出土遺物―須恵器＜甕＞―……51
第27図　遺構外出土遺物―須恵器＜甕＞―…52
第28図　遺構外出土遺物―須恵器＜甕＞―…53
第29図　遺構外出土遺物―須恵器＜壺＞、灰釉陶器＜浄瓶＞―……54
第30図　遺構外出土遺物―須恵系中世陶器＜鉢・擂鉢＞―……55
第31図　遺構外出土遺物―須恵系中世陶器＜擂鉢＞―……56
第32図　遺構外出土遺物―須恵系中世陶器＜擂鉢＞、瓦質土製品―……57
第33図　遺構外出土遺物―須恵系中世陶器＜甕・壺＞―……58
第34図　遺構外出土遺物―須恵系中世陶器＜甕・小壺＞―……59
第35図　遺構外出土遺物―輸入磁器、施釉陶器―……60
第36図　遺構外出土遺物―染付け陶磁器―……61
第37図　遺構外出土遺物―土錘、陶錘―……62
第38図　遺構外出土遺物―ふいご羽口・塼―……63
第39図　遺構外出土遺物―石器―……65
第40図　遺構外出土遺物―石器―……66
第41図　遺構外出土遺物―砥石―……67
第42図　遺構外出土遺物―銭貨―……68
付編　柱間寸法……73
復元平面図・復元図……74

# 図 版 目 次


図版１　遺跡遠景
　　遺跡遠景
図版２　丘中腹から中央平坦部調査前の状況
　　丘裾北側および谷部調査前の状況
図版３　丘頂部調査状況
　　丘中腹部東側調査状況
図版４　丘頂部調査状況
　　丘裾部調査状況
図版５　丘中腹から谷部調査状況
　　丘中腹部北側調査状況
図版６　第１号火葬墓確認状況
　　第２号火葬墓確認状況
　　第３号火葬墓確認状況
図版７　第１号火葬墓断面
　　第２号火葬墓断面
　　第３号火葬墓断面
図版８　第１号土坑確認状況
　　第２号土坑断面
　　第３号土坑断面
図版９　第１号土坑完掘状況
　　第２号土坑完掘状況
　　第３号土坑完掘状況
図版10　第４号土坑断面
　　第４号土坑完掘状況
　　第５号土坑完掘状況
図版11　第１号井戸跡断面
　　第１号井戸跡底面
　　第１号井戸跡完掘状況
図版12　丘下東谷部調査風景
　　丘下谷部調査状況
図版13　丘下東谷部調査状況
　　丘下東谷部木材検出状況
図版14　丘下東谷部木材
　　丘下西谷部坑検出状況
　　丘下西谷部木材検出状況
図版15　丘下西谷部土層断面
　　丘下西谷部完掘状況
図版16　第２号井戸跡検出状況
　　第２号井戸跡断面
　　第２号井戸跡木製品出土状況
図版17　第２・３号井戸跡近景
　　第４号井戸跡断面
　　第７号土坑完掘状況
図版18　掘立柱建物跡確認状況
　　掘立柱建物跡調査風景
図版19　建物跡掘り方断面
　　建物跡東辺溝跡断面
　　東辺溝跡完堀状況
図版20　掘立柱建物跡完掘状況
　　掘立柱建物跡全景
図版21　平坦部南側調査風景
　　平坦部北側調査風景
図版22　第７号土坑断面
　　第８号土坑断面

第５号井戸跡断面
図版23　第７号土坑完掘状況
第８号土坑完掘状況
第５号井戸跡完掘状況
図版24　中腹斜面調査状況
中腹斜面調査状況
図版25　火葬墓群確認状況
火葬墓群確認状況
火葬墓群完掘状況
図版26　第４号火葬墓完掘状況
第８・９号火葬墓完掘状況
第８号火葬墓銅銭出土状況
図版27　第４・７号火葬墓完掘状況
第８・９号火葬墓断面
第９号火葬墓断面
図版28　第14号火葬墓断面
第15号火葬墓確認状況
第16号火葬墓断面
図版29　第17号火葬墓確認状況
第18号火葬墓断面
第19号火葬墓確認状況
図版30　第20号火葬墓確認状況
第21号火葬墓断面
第22号火葬墓断面
図版31　遺構内出土遺物―第１号火葬墓・第１号井戸跡―
図版32　遺構内出土遺物―第２・３号井戸跡―
図版33　遺構内出土遺物―第４号井戸跡、西谷部―
図版34　遺構内出土遺物―第５号井戸跡―
図版35　遺構内出土遺物―第８号土坑、第６・11号火葬墓―
図版36　遺構外出土遺物―赤焼土器―
図版37　遺構外出土遺物―赤焼土器―
図版38　遺構外出土遺物―須恵器＜杯＞―
図版39　遺構外出土遺物―須恵器＜杯・蓋＞―
図版40　遺構外出土遺物―須恵器＜甕・壺＞―
図版41　遺構外出土遺物―須恵器＜甕＞―
図版42　遺構外出土遺物―須恵器＜壺＞、灰釉陶器＜浄瓶＞―
図版43　遺構外出土遺物―須恵系陶器＜鉢・擂鉢・小壺＞―
図版44　遺構外出土遺物―須恵系陶器＜擂鉢＞―
図版45　遺構外出土遺物―須恵系陶器＜擂鉢＞―
図版46　遺構外出土遺物―須恵系陶器＜甕・壺＞―
図版47　遺構外出土遺物―須恵系陶器＜甕・壺＞、瓦質土製品―
図版48　遺構外出土遺物―輸入磁器、施釉陶器―
図版49　遺構外出土遺物―染付け陶磁器―
図版50　遺構外出土遺物―土錘、陶錘、塼、ふいご羽口、鉄塊―
図版51　遺構外出土遺物―石器―
図版52　遺構外出土遺物―石器、砥石―

# 第１章　はじめに

## 第１節　調査に至る経過

秋田外環状道路は、秋田市内の交通混雑の解消をはじめ、交通量の増加にともなう国道沿線の生活環境の改善等を目的として、建設省東北地方建設局秋田工事事務所から計画が提出されたものである。

昭和61年４月には、秋田市上北手古野から昭和町豊川龍毛にかけて26.2kmの路線が決定された。その路線決定にしたがって、秋田県教育委員会では、ルート上の遺跡分布調査および範囲確認調査を継続的に行い、６ケ所の遺跡を確認した。

本報告書にとりあげる待入Ⅲ遺跡は秋田市西北部で確認された遺跡で、神社の移転が終了した平成３年に発掘調査を実施したものである。

## 第２節　調査要項

| | |
|---|---|
| 遺跡名称 | 待入Ⅲ遺跡　※遺跡記号５ＭＩ－Ⅲ |
| 所在地 | 秋田県秋田市金足片田字待入505外 |
| 遺跡状況 | 畑地、山林 |
| 調査対象面積 | 5,800m$^2$ |
| 調査面積 | 5,800m$^2$ |
| 遺跡性格 | 縄文時代遺物散布地、古代遺物包含地、中世館跡・墓地<br>近世遺物散布地 |
| 遺跡時期 | 縄文時代、古代、中世、近世 |
| 調査目的 | 秋田外環状道路建設事業にかかる事前調査 |
| 調査期間 | 平成３年６月17日～９月19日 |
| 調査主体者 | 秋田県教育委員会 |
| 調査担当 | 庄内昭男　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主査）<br>小畑　巌　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事） |
| 調査総務担当 | 佐田　茂　（秋田県埋蔵文化財センター主査）<br>佐々木真　（秋田県埋蔵文化財センター主任） |
| 調査協力機関 | 建設省東北地方建設局秋田工事事務所<br>秋田市教育委員会 |

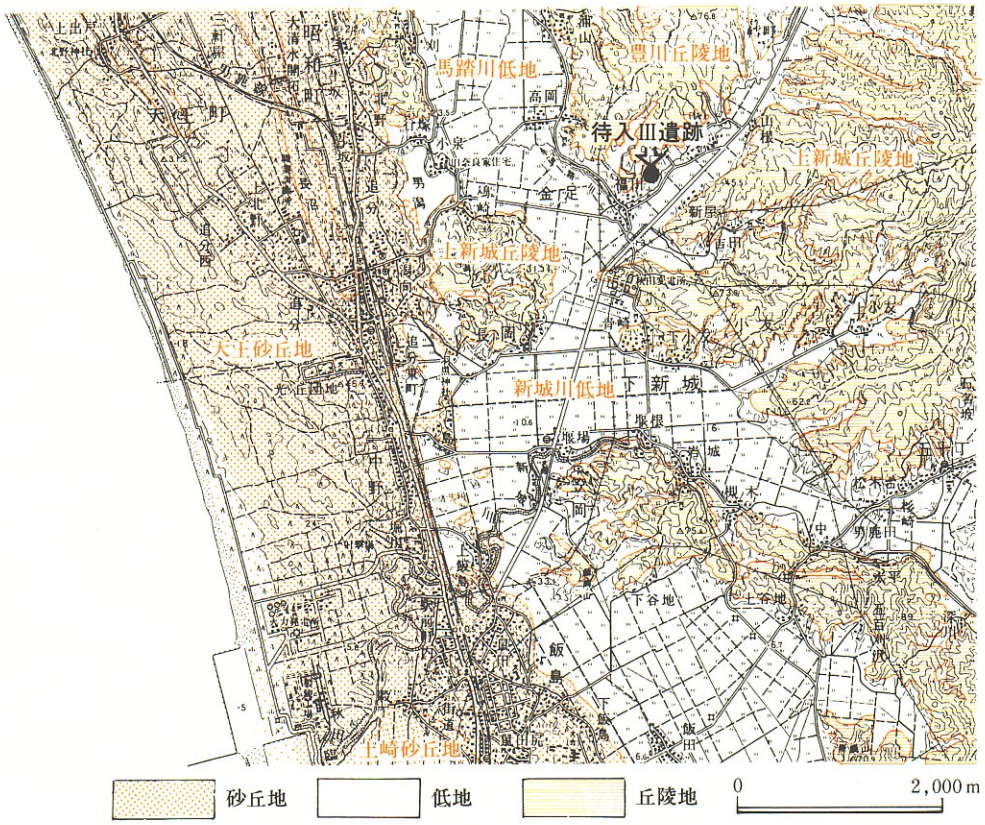
# 第２章　遺跡の立地と環境

## 第１節　遺跡周辺の地形

秋田市待入Ⅲ遺跡の位置は、北緯39°49′14″・東経140°5′30″にあたる。

遺跡の位置する日本海に沿った秋田県中央部の地形を東側からみると、標高200m以上の山地、標高50～100m前後の丘陵地、標高10m前後の低地、海岸に沿った砂丘地に分けられる。

秋田市金足片田待入地区は俎山を主峰とする山地から、その裾に広がる標高50～100mの豊川丘陵地の南端にあたる。丘陵地は小さな起状をもった地形で、山頂から山腹にかけて緩斜面が発達し、小支谷の密度が高い様相を示している。したがって、丘陵地の東面する傾斜地にある待入地区においても76.8mを頂点とする丘陵頂部から東に走る小支谷がいくつかあり、起状にとんだ地形となっている。また黒川方向から南西に向って流れる馬踏川が、この丘陵端部で北西方向に流れをかえる地点でもあり、馬踏川によって平野部と画されている。




第１図　遺跡周辺の地形分類

# 第２節　周辺の遺跡

ここでは、待入Ⅲ遺跡の歴史的環境を理解するために、秋田市北西部の新城川・馬踏川流域の遺跡について概観したい。

第２図は、待入Ⅲ遺跡と秋田市北西部の遺跡群を秋田県遺跡地図に基づいて作成したものである。文章中の遺跡名の後についた（　）は地図上の番号である。

## 縄文時代の遺跡

金足片田地区では片田（１）、浅田（２）が縄文土器の散布地として知られている。片田遺跡については金足東小学校に保管されている遺物から縄文時代後期に推定される。下新城青崎・小友地区では竹子山Ⅰ（３）、梵天長根（４）、青崎（５）、蚕沢（６）が知らされており、竹子山Ⅰでは石器、その他は縄文土器が採集されている。なお梵天長根遺跡は、1990年に秋田市教育委員会が主体となって緊急調査を行い、墓と推定される縄文時代後期の土壙17基・土器埋設遺構１基が検出された。上新城五十丁地区の羽田台Ⅰ（７）、長面Ⅲ（８）、谷地Ⅱ（９）、松木台Ⅱ（10）、杉ノ崎12号（11）では、いずれも縄文土器が採集されており、松木台Ⅱ遺跡については、縄文時代晩期の年代が推定される。

## 弥生時代の遺跡

図中にはいっていないが、待入Ⅲ遺跡の西方２kmの小泉潟周辺で弥生土器が採集されている。

## 古代の遺跡

金足高岡地区の蟹沢（12）、金ケ崎（13）、一本松（14）では須恵器が採集されている。片田地区では待入Ⅰ・Ⅱ（15･16）が今回調査が行われた待入Ⅲ遺跡と同じ丘陵上にある。北に馬込川Ⅰ・Ⅱ（17･18）、東に羽中（19）、松ノ下Ⅰ・Ⅱ（20･21）があり、須恵器・赤焼土器が採集されている。南にある竹子山Ⅱ（22）、蚕沢（６）では、縄文土器とともに須恵器・土師器が採集され、複合遺跡の可能性がある。

下新城小友・岩城地区では１km圏内に古代の遺跡が集中している。塩田沢（23）、羽田台Ⅱ（24）、末沢（25）、長面Ⅰ・Ⅴ（26･27）、家ノ前Ⅱ（28）、末沢Ⅰ・Ⅱ（30･31）、谷地Ⅰ（32）、堂前（34）、松木台Ⅱ（10）で須恵器・赤焼土器が採集されている。これらの遺跡群は末沢（29）、大沢Ⅰ（33）、谷地Ⅱ（９）で須恵器の窯跡群が確認されていることから、土器生産に関連する遺跡群である可能性が高い。

## 中世の遺跡

ほぼ４km圏内に７つの館跡が確認されている。詳細について不明なものがあるが、ここでは時代を推定できる発見遺物を中心にまとめた。待入Ⅲ遺跡の北には、こぐさ館（35）、片田館（36）があり、すぐ西には高岡館（37）がある。片田館では、麓の神社に南北朝時代のものと推定される板碑・五輪塔が確認されている。

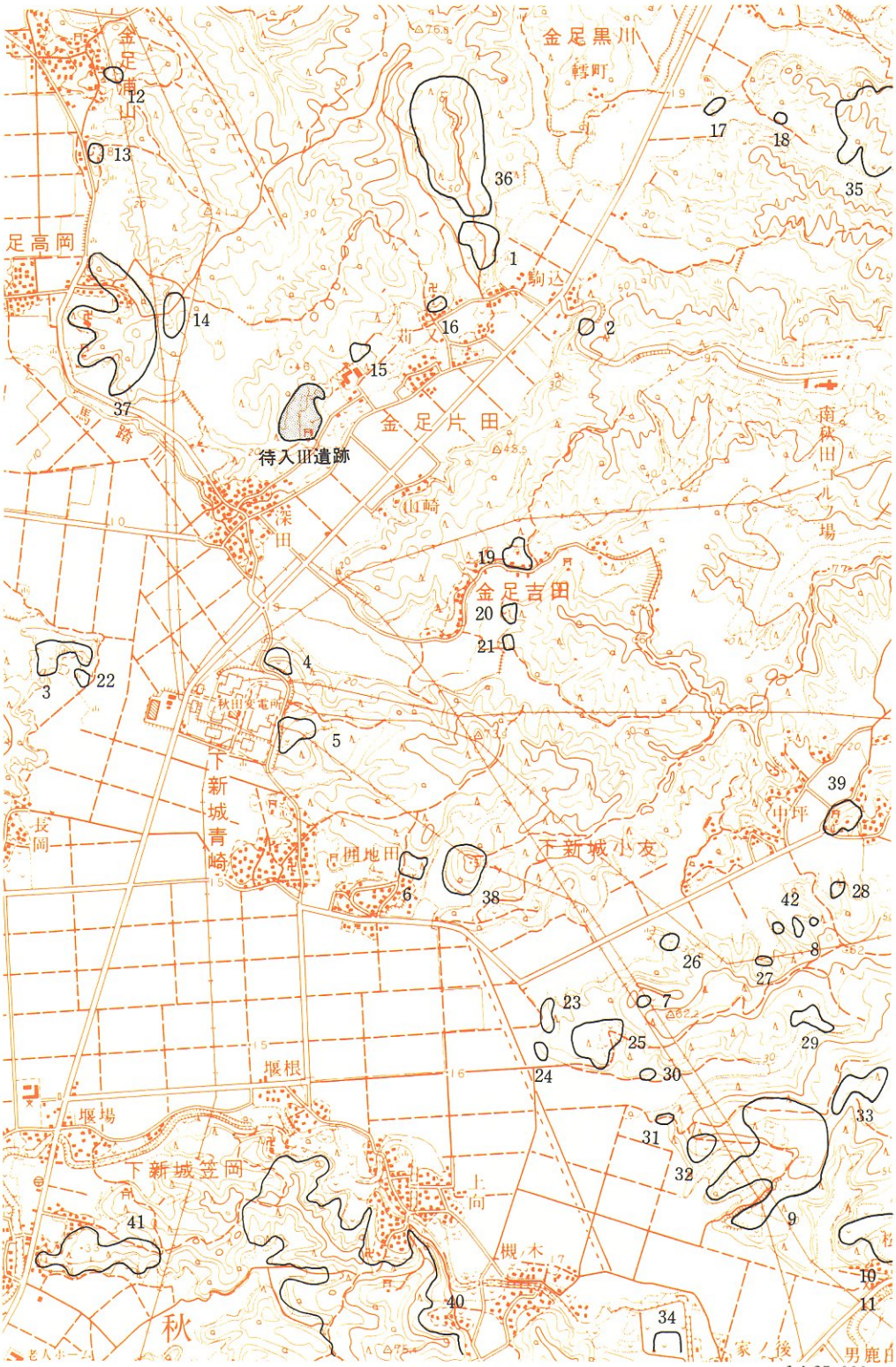
待入Ⅲ遺跡の南、下新城小友・岩城地区では箱館（38）、家ノ前館（39）、岩城館（40）、笹岡館（41）がある。箱館西方の下小友部落内で室町時代の板碑、鎌倉時代と推定される五輪塔が確認されている。岩城館は周辺の館跡としては最も規模が大きく、三つの郭面がみてとれる。かつて室町時代前期と推定される宝篋印塔が周辺から出土している。

※周辺地形に関する参考文献

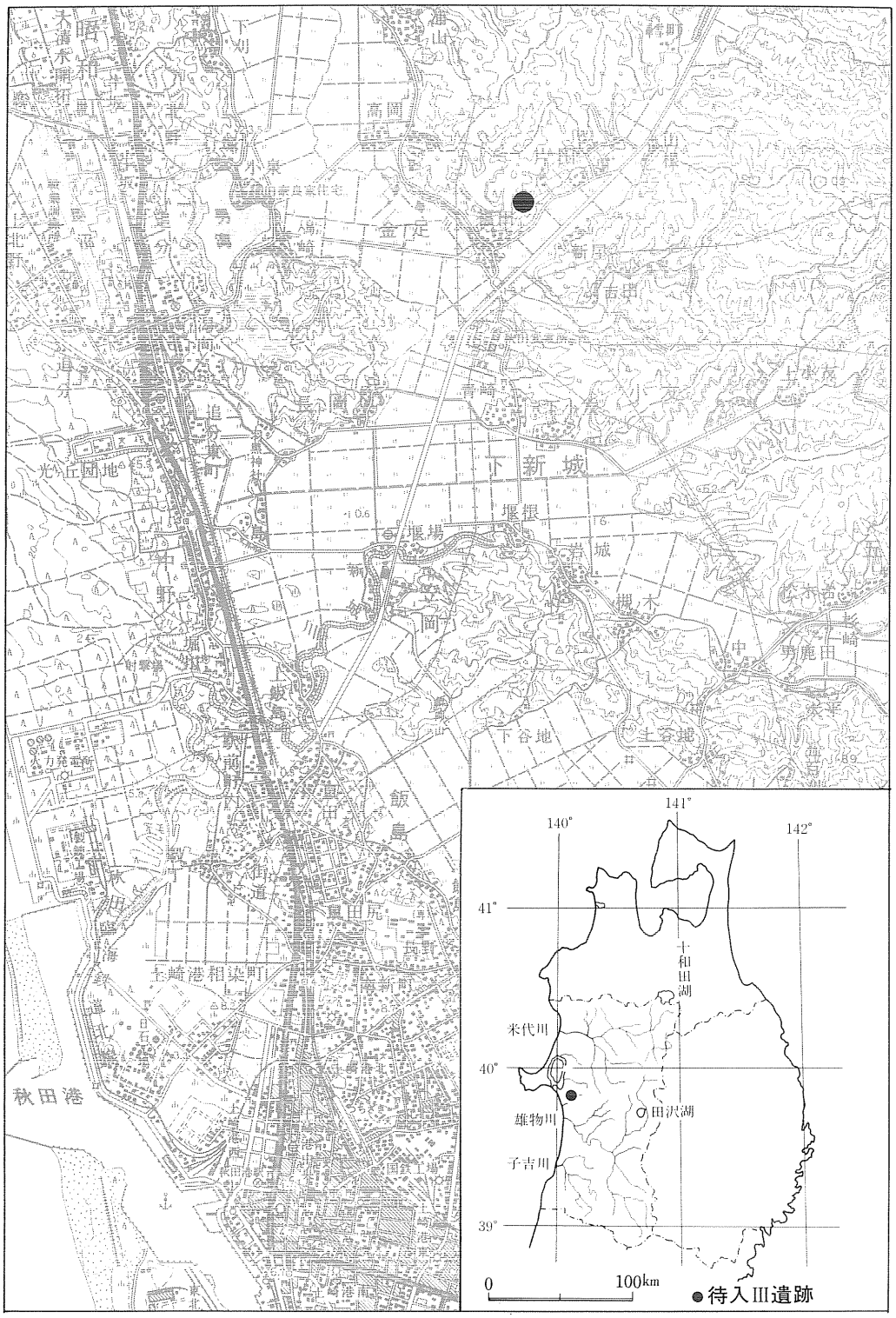
１．経済企画庁『土地分類基本調査―秋田―５万分の１』

※周辺遺跡に関する参考文献

１．秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成２年）
２．東北電力株式会社秋田支店・秋田市教育委員会『秋田市梵天長根遺跡―秋田変電所増設に伴う緊急発掘調査報告書―』1991（平成３年）
３．秋田県教育委員会『秋田県の中世城館―秋田県文化財調査報告書第86集―』1981（昭和56年）
４．磯村朝次郎「秋田県における中世宝篋印塔の型式と分布―特に八郎潟周辺の場合を中心として―」『秋田県立博物館研究報告第11号』1986（昭和61年）




第２図　周辺の遺跡分布図




1：50,000

第３図　遺跡位置図

# 第３章　調査の概要

## 第１節　遺跡の概観

待入Ⅲ遺跡は、北緯39°49′14″・東経140°5′30″に位置し、秋田市金足片田字待入505外に所在している。

秋田市の北西部にある遺跡までの交通手段を説明すると、最寄りの駅はＪＲ奥羽本線追分駅であるが、１つ手前の飯島駅より黒川行きのバスを利用し、金足東小学校前入口でおりるとよい。バス停から西に徒歩10分程であり、小学校の南側が遺跡となっている。

遺跡は丘陵地の東に面する中腹部に立地しており、裾部に福田部落へ通ずる市道が走っている。市道から20m程東に馬踏川が流れており、調査期間中に２度の道路冠水を経験した。

遺跡の調査前の状況は、小高い山を呈する南側に金比羅神社が建立されており、その周辺が山林となっていた。北側はゆるやかな傾斜地であり、畑地として使用されていた。戦前はほとんど山林であったといわれ、畑地として開懇されたのは戦後とのことであった。なお西から東に走る３条の谷が入っているが、その最下位面は水田として使用されており、馬踏川岸へ向けて広がっている。

## 第２節　調査方法

### １．調査区の設定

調査を計画的に進めるために調査対象区に一区画４×４ｍのグリッドを設定した。

遺跡内に所在する道路計画センター杭ＮＯ．253を原点として国家座標第Ｘ系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Ｙ軸とし、これに直行するラインを東西基線Ｘ軸とした。基準交点ＮＯ．253をＭＡ50とし、Ｙ軸に２桁の算用数字、Ｘ軸に２文字のアルアァベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。なお発掘調査では、範囲確認調査の結果をふまえて、南側旧金比羅神社周辺、中央平坦部、北側中腹斜面の大きく３地区に分けて遺構の広がりを確認していった。

### ２．発掘方法および記録作成

南側山頂部からはじめて北側へ調査を進めていった。地山の明黄褐色土層で遺構確認を行った。遺物は表土から地山まで掘り下げる間に出たものをとりあげた。

＜遺物の記録＞そこで遺物の記録作成・取り上げは次の方法で行った。南東隅の杭を基準としてグリッド内における位置を記録し、遺跡内における遺物番号を付して取り上げた。

＜実測図の作成＞精査した遺構は、調査区内に打設した方眼杭を基準として簡易な遣り方測量によって図面を記録した。遺構の平面図・断面図は、１/10・１/20の縮尺で作成した。

遺跡全体の土層図は、南側神社周辺では東西19ラインと26ライン、中央平坦部では東西37ライン、北側中腹斜面では東西63ラインを延長して作成した。土層図は１/20の縮尺で作成し、色調・土性・硬さ・混在粒子等の特徴を記載した。

＜写真＞現場の写真は６×4.5と3.5mm判のカメラを用い、広角・標準レンズを適宜使用した。現場撮影用のフィルムはモノクロ、およびカラーリバーサルの２種類を使用した。撮影コマ数は874である。遺物の写真撮影は35mm判のカメラを使用し、モノクロで行った。

### ３．遺物整理の方法

＜遺物の整理＞出土した遺物は55×34×15cmのコンテナが35箱である。遺物は素材の種類から大きく土製品と石製品・金属製品・木製品に分けられ、土製品は素焼きの焼き物である須恵器・赤焼土器が大部分であり、他に陶磁器がある。石製品は、石器と石器素材、砥石である。金属製品として銭貨がある。木製品には箸の他棒状・板状のものがある。

これらの遺物を洗浄し、土器・陶磁器は接合作業を行った。なお土製品と石製品には、グリッド名・層位・出土年月日を注記した。金属製品はプラスチックケース内に、木製品は水浸けの状態で保管している。

＜土器・石器の実測図作成＞４分の１以上遺存する土器・陶磁器を１/１で図化した。また主な土器破片と銭貨の拓影をとる。また石製品・木製品もすべて１/１で図化した。

## 第３節　調査日誌

６月17日　ベルトコンベアー他発掘器材のそなえつけ準備をする。

６月18日　旧神社周辺を中心として調査区内の伐木除去。調査前の写真撮影。

６月21日　旧神社の北西側ＭＤ20とＬＴ25グリッドから粗掘りをはじめた。丘頂から下の沢へ向けて表土を除去して行くつもりである。

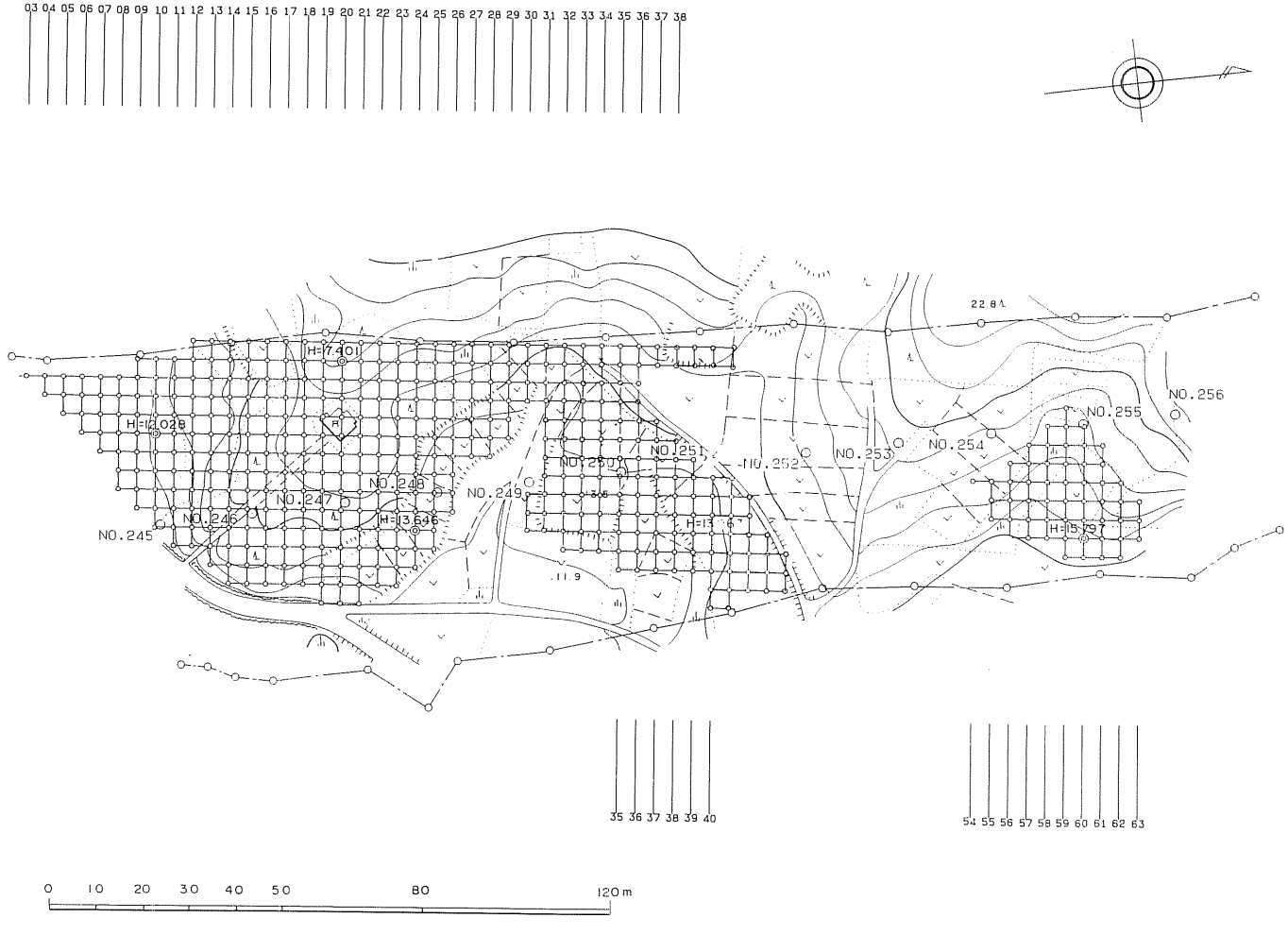
６月26日　ＭＢ25グリッド周辺が深くなり、遺物の量も多くなる。

７月４日　旧神社北西側の粗掘りが大部分終了し、旧神社参道の北と北東側へベルコンを移動、再び粗堀りをはじめた。ＬＳ30グリッド付近は谷地形のため深く、継続して堀り下げて行く。

７月９日　ＭＧ18・19グリッドで木炭がまとまった火葬墓が検出された。

７月12日　旧神社参道より北側斜面の表土除去が終了した。

７月15日　丘裾平坦部の表土除去を行う。西谷部は東側に拡張していった。


03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38
LP
LQ
LR
LS
LT
MA
MB
MC
MD
ME
MF
MG
MH
MI
MJ
H=7.401
H=12.028
NO.245
NO.246
NO.247
NO.248
NO.249
NO.250
NO.251
NO.252
NO.253
NO.254
NO.255
NO.256
H=13.646
H=15.
35 36 37 38 39 40
54 55 56 57 58 59 60 61 62 63
0 10 20 30 40 50 80 120m

第4図　グリッド配置図

７月19日　ＭＣ26・ＭＢ26グリッドを中心とする東谷部、ＭＡ30・31グリッドを中心とする西谷部の掘り下げを行う。丘頂で確認した溝状の落ち込みを掘り下げる。ほとんどが畑の開墾よるものであった。

７月24日　雨にそなえ、参道南側にベルトコンベアーを設置する。

７月25日　西谷部で泥炭層がみつかり、木材が出土。さらに縁辺で２基の井戸跡を確認した。

７月31日　13ラインから南へ参道南側の表土除去をはじめる。西谷部・東谷部は連日の雨のため掘り下げができなくなった。

８月７日　参道南側の表土除去を終え、地山面を精査していく。

８月10日　旧神社があった丘の部分について頂から裾にかけての精査が終了。これまで確認された土坑を掘り下げていく。

８月19日　35ライン北側平坦部の表土除去をはじめる。旧神社周辺の遺構を掘り下げる。

８月22日　旧神社周辺の地形測量をはじめる。

８月28日　雨と流水で水没していた西谷部・東谷部を掘り下げ木材を出していく。加工材はみあたらず、自然の流木・倒木が埋没したものと考えられた。平坦部では、ＬＱ35・36グリッドが谷間にあたり深くなる。

８月30日　33ラインより北の平坦部で方形の掘り方がみつかり建物跡を検出した。

９月３日　平坦部北側の谷縁辺上位で検出した土坑３基を掘り込んだ。そのうち１基が井戸跡と考えられ、中から加工材が出土した。

９月４日　由利工業高校の五十嵐教諭来跡、建物跡について御教示をいただく。

９月５日　調査区北側中腹斜面の粗掘りを行う。木炭がまとまった３基の火葬墓を確認する。

９月６日　建物跡の掘り下げが完了、写真撮影を行う。北側中腹斜面は北へ拡張する。

９月11日　火葬墓群のセクション図作成して、木炭等掘りあげる。

９月13日　平坦部は建物跡を中心に精査終了、全景写真撮影を行う。

９月19日　器材等のあとかたずけをすませ、調査を終了した。

※Ⅰ区旧神社のある丘頂部の土層
1　黒褐色(10ＹＲ3/2)シルト質＝耕作土＝
2　明黄褐色(10ＹＲ6/7)シルト粘土質＝地山＝

※Ⅰ区の東谷部の土層
1　にぶい黄褐色(10ＹＲ4/3)シルト粘土質＝耕作土＝
2　暗褐色(10ＹＲ3/3)シルト質
3　黒褐色(10ＹＲ2/3)シルト質　地山ブロック密に混在
4　黒褐色(10ＹＲ2/2)粘土質　下位に遺物包含
5　明黄褐色(10ＹＲ6/7)シルト粘土質＝地山＝

※Ⅱ区の平坦部の土層
1　にぶい明黄褐色(10ＹＲ4/4)シルト粘土質＝耕作土＝
2　明黄褐色(10ＹＲ6/7)シルト粘土質＝地山＝

※Ⅱ区谷部の土層
1　にぶい明黄褐色(10ＹＲ4/4)シルト粘土質＝耕作土＝
2　暗褐色(10ＹＲ3/3)シルト質
3　黒褐色(10ＹＲ2/3)粘土質
4　灰黄褐色(10ＹＲ4/2)粘土質＝地山＝

※Ⅰ区旧神社のある丘裾部の土層
1　黒褐色(10ＹＲ3/2)シルト質＝耕作土＝
2　暗褐色(10ＹＲ3/3)シルト質
3　黒褐色(10ＹＲ2/3)シルト質
4　黒色(10ＹＲ2/1)シルト粘土質
5　明黄褐色(10ＹＲ6/7)シルト粘土質＝地山＝

※Ⅰ区の西谷部（西側）の土層
1　暗褐色(10ＹＲ3/3)シルト質＝耕作土＝
2　黒褐色(10ＹＲ2/3)シルト質
3　黒褐色(10ＹＲ2/3)シルト質　下位に遺物包含
4　暗褐色(10ＹＲ3/4)シルト粘土質
5　にぶい黄褐色(10ＹＲ5/4)粘土質
6　明黄褐色(10ＹＲ6/7)シルト粘土質＝地山＝

※Ⅲ区の中腹斜面部の土層
1　黒褐色(10ＹＲ2/2)シルト質＝耕作土＝
2　明黄褐色(10ＹＲ6/7)シルト粘土質＝地山＝

※Ⅰ区の北東側平坦部の土層
1　褐色(10ＹＲ4/4)シルト質＝耕作土＝
2　灰白色(10ＹＲ8/2)粘土質＝地山＝

※Ⅰ区の西谷部（中央）の土層
1　にぶい黄褐色(10ＹＲ4/4)シルト質
2　灰褐色(7.5ＹＲ5/2)粘土質
3　黒色(10ＹＲ2/1)粘土質
4　泥灰層　木材入る
5　青灰色(５ＧＹ7/1)粘土質＝地山＝

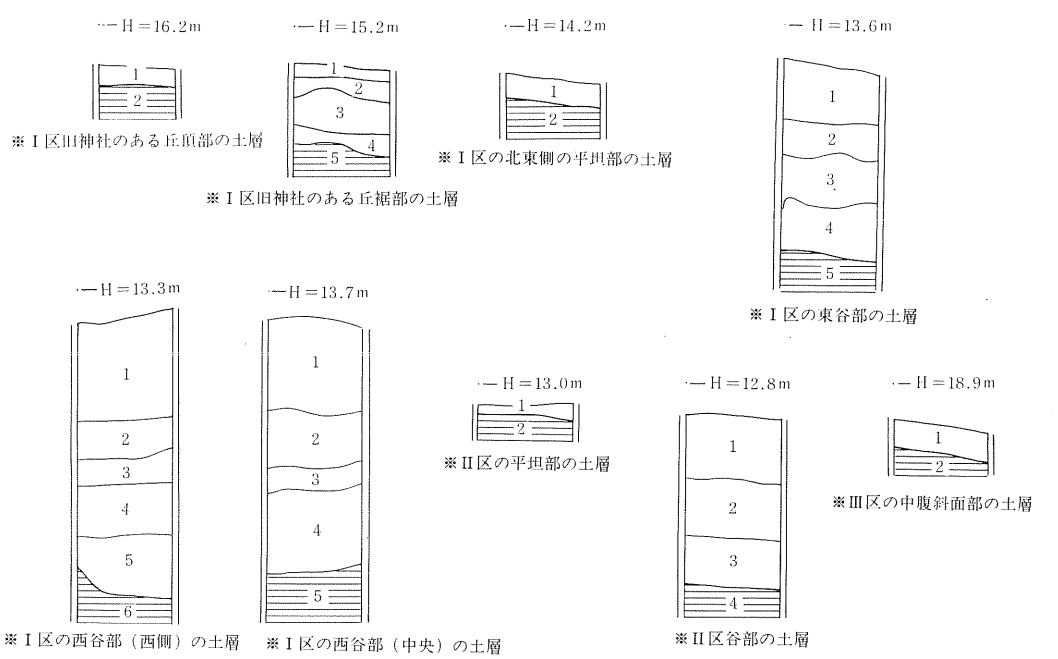
# 第４章　調査の記録

## 第１節　調査区の地形と層位

待入Ⅲ遺跡は北に長い馬背状の丘陵部の東側に立地している。丘陵部西側の最高部は標高33mを測る。北側の最高部は一段と高い標高45mであり、遺跡を画している。丘陵部は標高20mまでは急斜面で、それ以下は比較的なだらかな山腹斜面が発達している。その東面する長さ200mの斜面が遺跡の範囲であり、調査の対象となった。南側から北側にかけて微地形について説明を加えたい。なお調査を進める上で調査対象地を地形に合わせて、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区に仮設定したので説明もそれに順ずる。

Ⅰ区の旧金比羅神社が建っていた丘は、標高17m以下で東に幅30m程の張り出しをもち、小山状を呈している。その北側がⅡ区で標高14m以下の平坦面となっており、下の水田面との比高も２m前後である。平坦面の北と南に谷が入り込んでおり、北側がより深い。さらにその北は西から尾根状の高まりがのびており、遺跡の北を画する大きな高まりとの間に小さな尾根が入る。その尾根の傾斜がなだらかとなっている部分をⅢ区とした。標高18～15mの間にある。

各地区の層位は谷の部分を除いて上面が削平されている状態であり、プライマリーな状況での層位は把握できなかった。下図に表土と遺構確認面の状況について概略を模式図化した。




**第５図　土層模式図**

## 第２節　検出遺構と出土遺物

それぞれの地区で次のような遺構が検出された。

※Ⅰ区　火葬墓３基、井戸跡４基、土坑６基、溝跡１条

※Ⅱ区　掘立柱建物跡１棟、井戸跡１基、土坑２基、小穴群　　※Ⅲ区　火葬墓19基

これらの検出遺構等の記述にあたっては、遺跡の南側から順に、次のような構成で行った。

Ⅰ区［丘の上の遺構と出土遺物］［丘裾平坦部の遺構と出土遺物］［東谷部の状況］
［西谷部の遺構と出土遺物］

Ⅱ区［中央平坦部の遺構と出土遺物］　Ⅲ区［中腹斜面における火葬墓群］

なお遺構内の遺物については、それぞれの項目で説明を行ったが、遺構外のものについては、ここで出土状況を知らせるにとどめ、第３節で分類・考察を行った。

### ［丘の上の遺構と出土遺物］

いずれも黒褐色土の表土下にある地山明黄褐色土層面で確認した遺構であり、埋土中の出土遺物は少ない。遺物は、北西側の谷に向って落ちる斜面で赤焼土器・須恵器が広い範囲で出土した。また北東側の平場におちる段の部分で石器剝片が出土した。

丘頂から裾部にかけてほぼ１直線にならぶように３基の火葬墓を検出した。

#### 第１号火葬墓（ＫＳＢ01）

＜位置・確認状況＞丘裾部のＭＧ18グリッド北側で、木炭が混在した黒色土をみつけ確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈している。東西に長軸方向をもっており、長径48cm、短径40cmである。中央部が丸く窪んでおり、確認面から最深部まで12cmを測る。

＜埋土の状況＞丘側の上面を確認の際、掘り込んでしまったが、上位は暗褐色土、下位は木炭が入った黒色土であり、いずれもかなり硬くなっていた。

＜壁・底面の状況＞斜めに浅く掘る込まれており、中央に向って窪んでいる。

＜遺物・その他＞埋土上面より赤焼土器甕（第６図１）の胴部破片が出土した。

#### 第２号火葬墓（ＫＳＢ02）

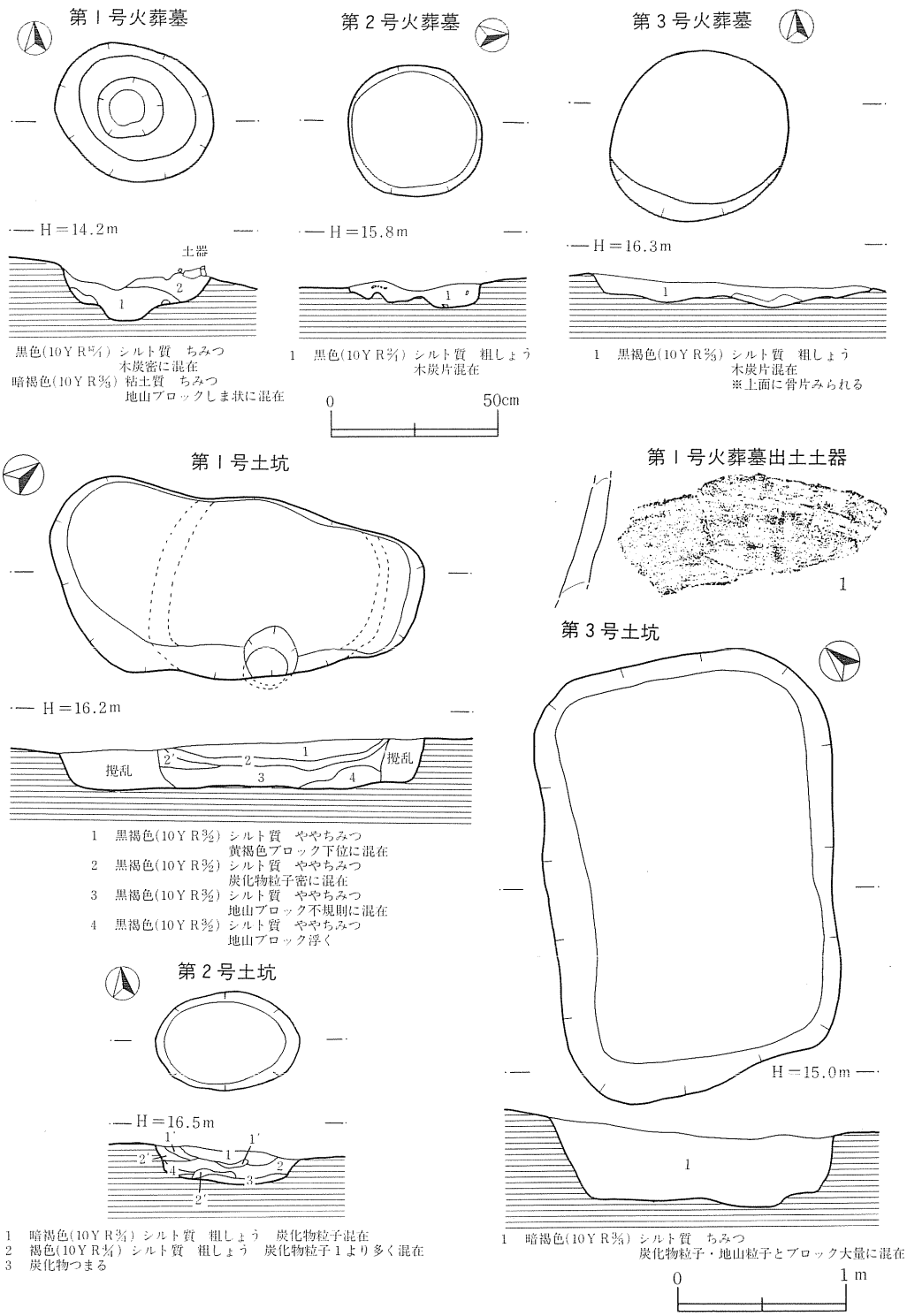
＜位置・確認状況＞中腹部のＭＥ18グリッド北側で、木炭が混在した黒色土をみつけ確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈している。直径40cmで、確認面から最深部まで８cmを測る。

＜埋土の状況＞木炭が混在した軟い黒色土が充填していた。

＜壁・床面の状況＞浅い掘り込みであり、根による撹乱のためか凹凸がある。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在していた。




**第６図　第１～３号火葬墓、第１～３号土坑**

### 第３号火葬墓（ＫＳＢ03）

＜位置・確認状況＞頂上に近いＭＤ19グリッド南西隅で、わずかに木炭が混在した落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈している。直径55cm、確認面からの深さは５cm前後である。

＜埋土の状況＞１cm前後のこまかい木炭が混在した黒褐色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞掘り込みがきわめて浅く判然としない。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在していた。

### 第1号土坑（ＳＫ02）

＜位置・確認状況＞ＭＤ18グリッド北側で、北東から南西に細長いプランを確認した。

＜平面形・規模＞木根により攪乱があり、北東側と南西側の壁の立ち上がりは断面で確認するにとどまった。平面形は不整長方形と推定され、北東－南西方向が推定138cm、それと直交する方向が110cm、確認面から最深部まで25cmを測る。

＜埋土の状況＞４層に分層され、４層以外は炭を含む点に特徴が認められる。地山ブロックも混在することから、自然堆積ではなく、人為的に埋め戻されたと推定される。

＜壁・底面の状況＞壁の掘り込みは垂直で、底面はほぼ平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第２号土坑（ＳＫ03）

＜位置・確認状況＞ＬＱ18グリッド北側の地山面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈し、東西に長軸方向がある。長径80cm、短径65cmであり、確認面から最深部まで19cmを測る。

＜埋土の状況＞暗褐色土、褐色土、炭化物層の３つに分けられる。

＜壁・底面の状況＞壁はやや斜めに掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。壁・底面ともに焼土化しており、最下位の炭化物層の存在と相俟って、火が焚かれたことが推定できる。

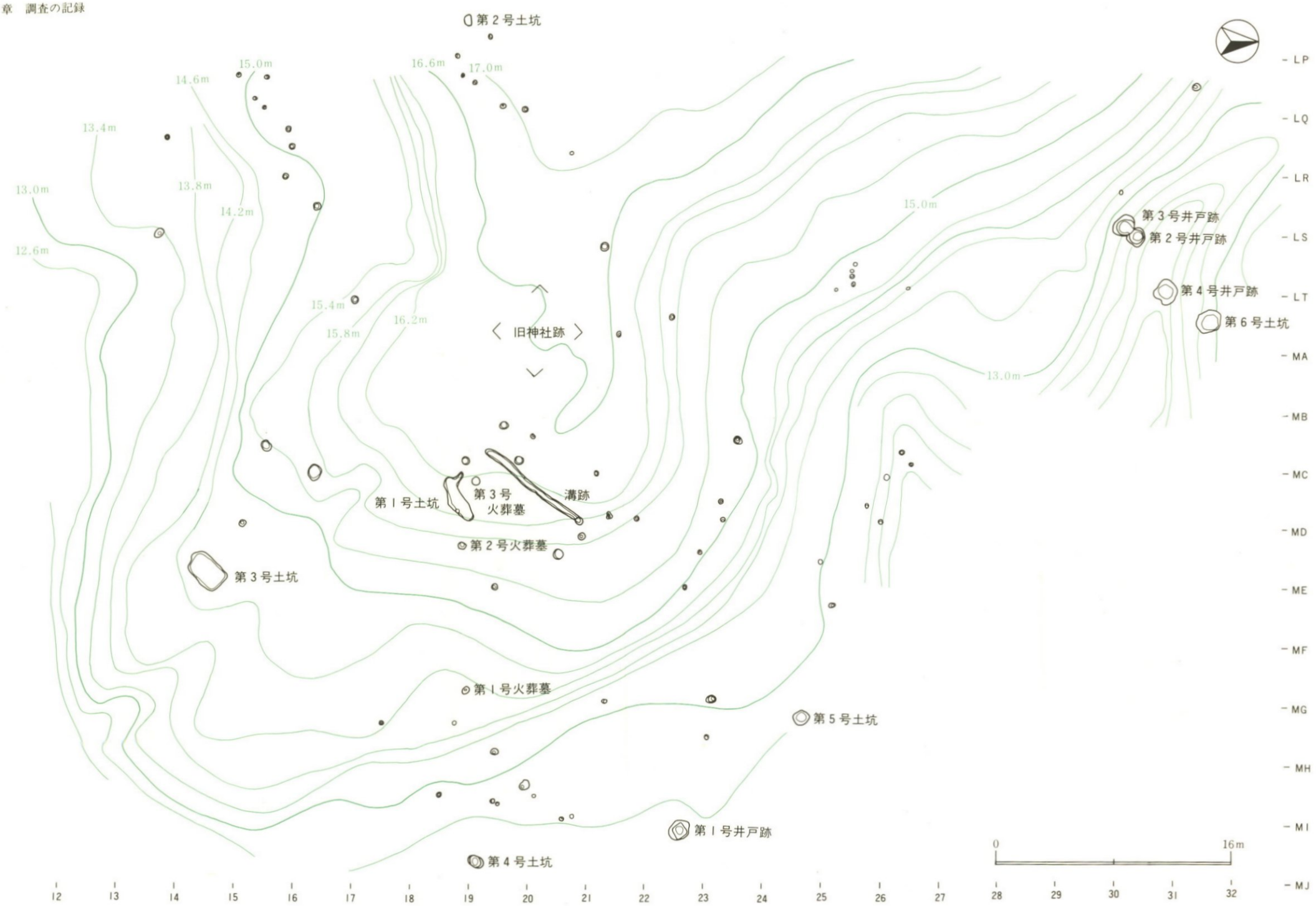
＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第３号土坑（ＳＫ04）

＜位置・確認状況＞ＭＥ14グリッドのほぼ中央で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞長方形を呈し長辺260cm、短辺173cm、確認面から最深部まで41cmを測る。

＜埋土の状況＞硬質の暗褐色土１層のみで地山粒子、同ブロックを大量に含むことから、人為的に埋め戻されたと推定される。


第２号土坑
15.0m
14.6m
16.6m
17.0m
13.4m
13.0m
13.8m
14.2m
12.6m
15.4m
15.8m
16.2m
15.0m
13.0m
旧神社跡
第３号井戸跡
第２号井戸跡
第４号井戸跡
第６号土坑
第１号土坑
第３号
火葬墓
溝跡
第２号火葬墓
第３号土坑
第１号火葬墓
第５号土坑
第１号井戸跡
第４号土坑
0
16m
LP
LQ
LR
LS
LT
MA
MB
MC
MD
ME
MF
MG
MH
MI
MJ
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

第７図　Ⅰ区遺構位置図

＜壁・底面の状況＞断面形は鍋底状を呈し、底面は部分的に凹凸が認められる。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 溝跡

＜位置・確認状況＞ＭＢ19グリッド北側で、北東方向にのびる黒褐色土の落ち込みを確認した。

＜規模＞幅40cm前後で、長さが８ｍある。確認面からの深さは10cm前後で浅い。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

## ［丘裾平坦部の遺構と出土遺物］

遺構確認面は黄灰色粘土層であり、斜面を削り出して平坦面を造成したものと考えられる。丘下で須恵系の中世陶器がまとまって出土した。

### 第１号井戸跡（ＳＫ06）

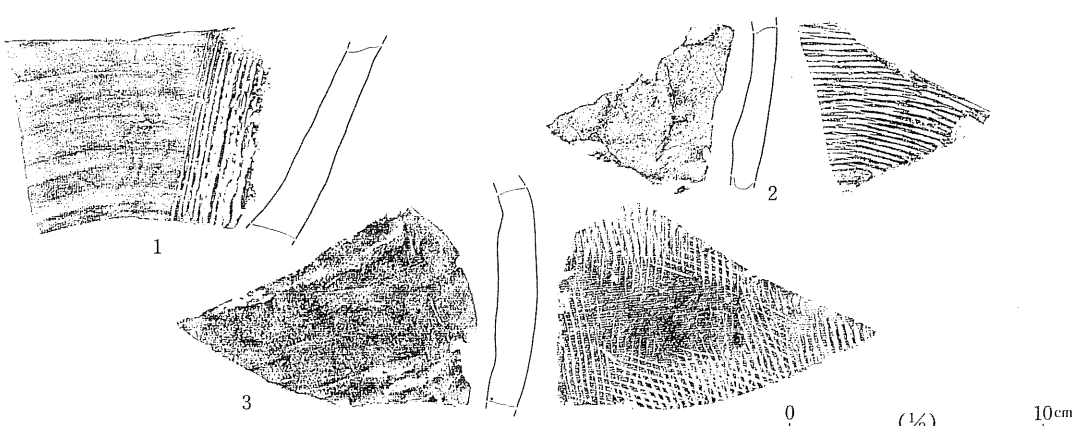
＜位置・確認状況＞ＭＩ22、ＭＪ22両グリッドにまたがる黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞地山面で確認されたプランはほぼ円形であるが、中位から方形プランを呈する。開口部の直径は130～140cmで、確認面から最深部まで151cmを測る。

＜埋土の状況＞大きく４層に分けられ、黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積している。いずれも粘土質で硬いが、なかでも１層が最も硬くしまっていた。

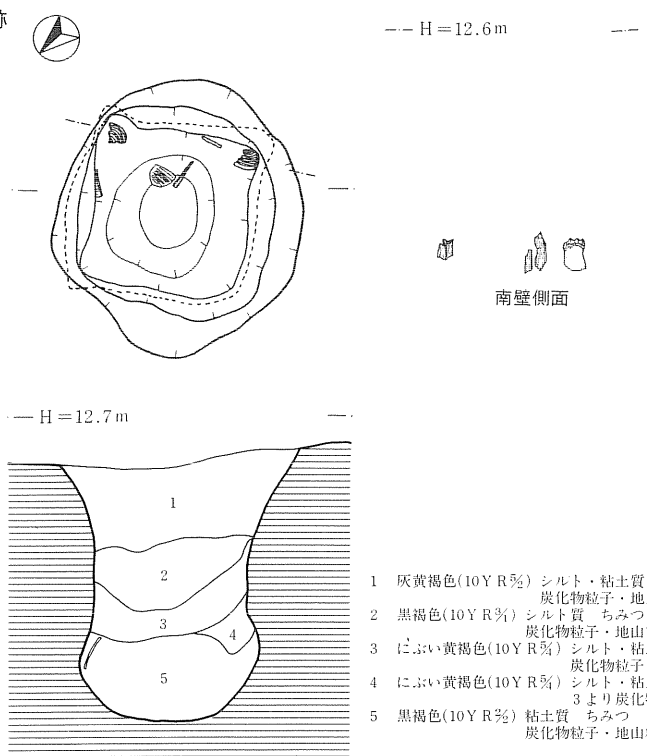
＜壁・底面の状況＞底面は丸く窪んでいる。断面をみると、中位から下が袋状を呈し、中位でゆるくすぼまったのち口が大きく外に開いている。

＜遺物・その他＞方形掘り方の南辺隅で丸太に近い柱材が立っている状況で検出された。遺存している部分は、長さ10～17cmで、12cm程の厚さがある。その柱材の間に長さ12～20cm、幅７～14cm、厚さ１cm前後の薄い板材もみつかった。丸太に近い部材が隅柱、薄い板材が側板になると思われる。埋土中から須恵系中世陶器の擂鉢（第９図１）甕胴部破片（２，３）が出土している。



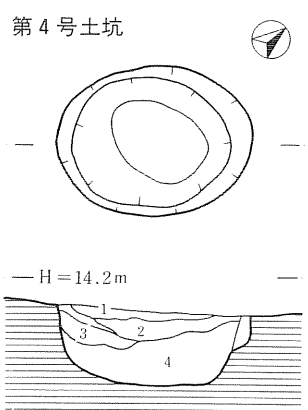

第８図　第１号井戸跡出土遺物

## 第１号井戸跡



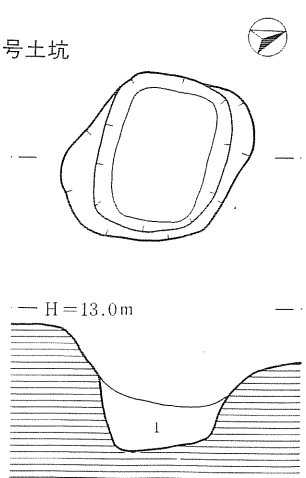

1　灰黄褐色(10ＹＲ5/2) シルト・粘土質　ちみつ
　　炭化物粒子・地山粒子多量に混在
2　黒褐色(10ＹＲ3/1) シルト質　ちみつ
　　炭化物粒子・地山ブロック混在
3　にぶい黄褐色(10ＹＲ5/4) シルト・粘土質　ちみつ
　　炭化物粒子・地山ブロック混在
4　にぶい黄褐色(10ＹＲ5/4) シルト・粘土質　ちみつ
　　３より炭化物粒子混在量少ない
5　黒褐色(10ＹＲ2/2) 粘土質　ちみつ
　　炭化物粒子・地山粒子混在

## 第４号土坑




1　灰黄褐色(10ＹＲ5/2) シルト・粘土質　ちみつ
　　炭化物粒子・地山粒子・地山小ブロック混在
2　黒褐色(10ＹＲ3/1) シルト質　ちみつ
　　焼土粒子・地山粒子・地山ブロック混在
3　灰黄褐色(10ＹＲ5/2) シルト・粘土質　ちみつ
　　１より炭化物粒子の混入少なく、地山粒子の
　　混入の割合多い
4　黒褐色(10ＹＲ3/1) シルト質　ちみつ
　　焼土粒子・地山粒子・大量の地山ブロック混在

## 第５号土坑




1　黒褐色(10ＹＲ2/2) シルト質　ちみつ　炭化物粒子・地山粘土粒子混在

0　1 m

第９図　第１号井戸跡、第４・５号土坑

### 第４号土坑（ＳＫ05）

＜位置・確認状況＞丘陵部東側の裾にあたるＭＪ19グリッド南側の地山面で確認した。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈している。長径102cm、短径79cmであり、確認面から最深部まで39cmを測る。

＜埋土の状況＞いずれも粘土質で硬く、掘り上げるのが非常に困難であった。上位は灰黄褐色土であり、中位は黒褐色土である。

＜壁・底面の状況＞断面は鍋底状を呈し、壁・底面ともなめらかであった。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第５号土坑（ＳＫ07）

＜位置・確認状況＞ＭＨ24グリッド北西隅、谷の南縁に位置している。確認の際、掘りすぎのため埋土の半分以上が取り除かれてしまった。

＜平面形・規模＞確認面でのプランは不整方形であるが、これは壁の崩落により変形したものであり、本来は長方形を呈していたものと考えられる。規模は、長辺90cm、短辺70cm程であり、確認面から最深部まで62cmを測る。

＜埋土の状況＞下位の埋土は黒褐色土である。

＜壁・底面の状況＞断面形は鍋底状を呈し、底面は北から南へ傾斜している。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

## ［東谷部の状況］

ＭＢ25・26・27、ＭＣ25グリッド周辺が半円状の窪地となり、下の谷間へとつながっている。にぶい黄褐色土の下に50cm前後の厚さで堆積する黒褐色土があり、その下位から須恵器・赤焼土器が多量に出土した。さらに50cm程の厚さの黒色粘土層を掘り下げると、泥炭層に達した。30m$^2$の範囲で泥炭層中の木材を精査したが、すべてが皮のついた埋れ木であった。

## ［西谷部の遺構と出土遺物］

30～33グリッド列の西側に走る谷の縁辺に確認された遺構であり、確認面は青灰色粘土層である。遺物は黒褐色土の下層から、黒色粘土にかけて多量に出土した。大部分が須恵器および赤焼土器であり、中世の陶磁器は少ない。

谷の縁辺にある３基の井戸跡については、第２号井戸跡（ＳＥ02）が上位に石を集合された施設をもっていること、ＳＥ01、ＳＥ03が第２号井戸跡（ＳＥ02）と立地・形状が類似していることから井戸跡とした。

### 第２号井戸跡（ＳＥ02）

＜位置・確認状況＞谷部を掘り下げて行く過程で礫の集合と板材の存在が確認されていたため、その部分を残す形で掘り下げて行き、円形の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈している。開口部の直径124cm、板材のあった位置から最深部まで68cmを測る。

＜埋土の状況＞きめのこまかい黒色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞板材の位置が井戸の東壁にあたると考えられ、第３号井戸跡と接する側はやや斜めに掘り込まれており、底面は凹凸がある。

＜遺物・その他＞埋土中より第11図２～11に示した木製品が出土している。２～５は箸、６・７は串である。８・９はうすい板状のもの、10は杭、11は厚い板である。

### 第３号井戸跡（ＳＥ01）

＜位置・確認状況＞ＬＳ30グリッドの南側、谷部南縁にある。谷間がいくぶん湾曲する場所で、第２号井戸跡の上位で確認した。

＜平面形・規模＞ほぼ円形を呈している。開口部の直径は152cmで、確認面から最深部まで104cmを測る。

＜埋土の状況＞上面でプランをみつけられなかったため底面付近にきめのこまかい黒色土があるのを確認しただけである。黒色土中に青白色粘土が混在し、澱みがあったと考えられる。

＜壁・底面の状況＞谷がやや落ち込んだところに構築されており、壁は斜めに掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。

＜遺物・その他＞第11図１の折れた箸が１点出土した。

### 第４号井戸跡（ＳＥ03）

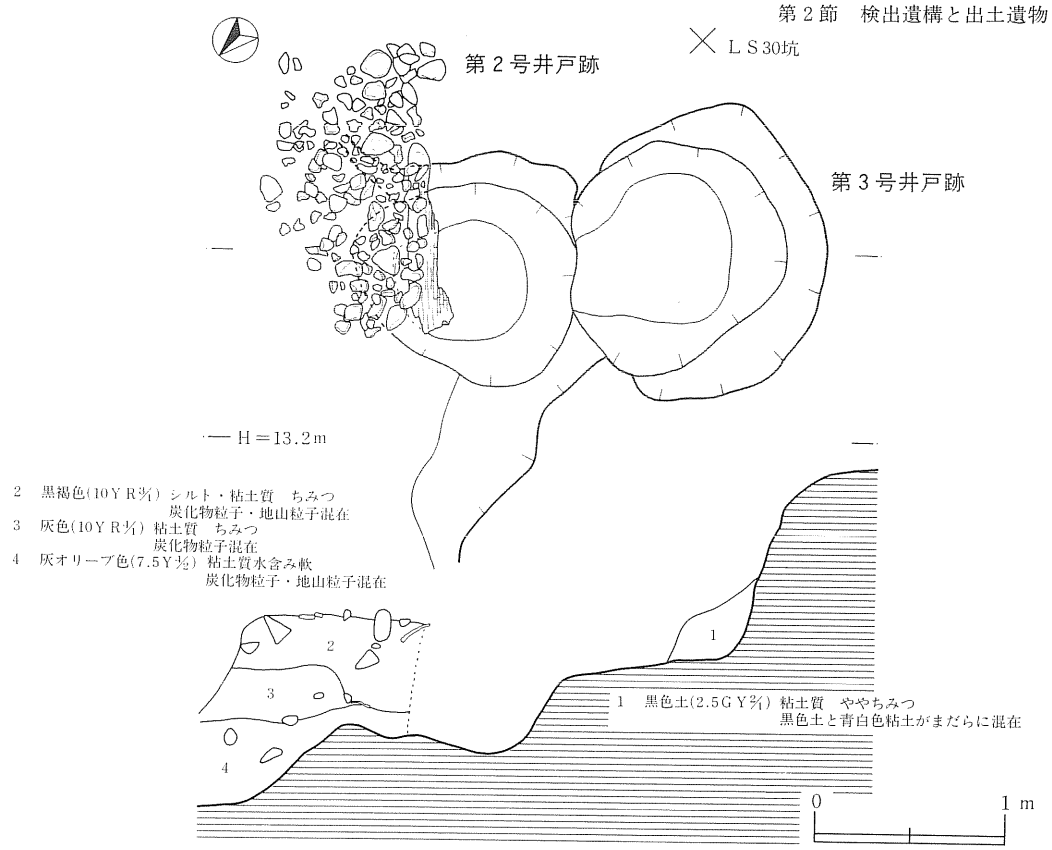
＜位置・確認状況＞ＬＳ31グリッドの杭下で、谷の壁面を精査中に、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

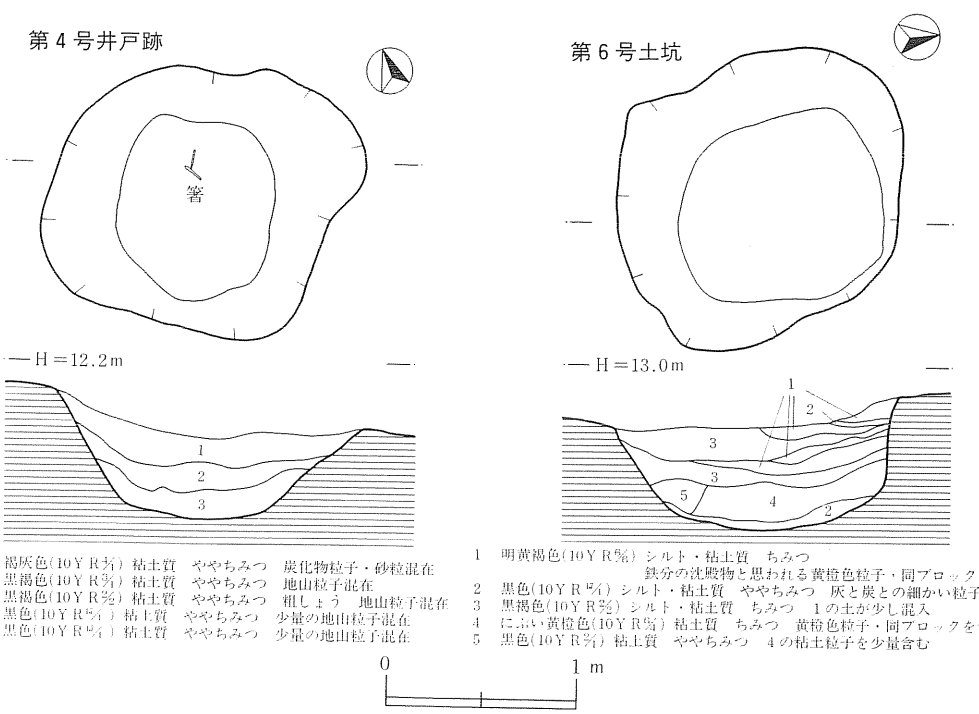
＜平面形・規模＞円形を呈しており、開口部の直径が140cm前後である。谷縁の確認面から最深部まで64cmを測り、表土からは112cmである。

＜埋土の状況＞上面は黒褐色土が覆い、その下は軟質できめのこまかい黒色土が堆積していた。

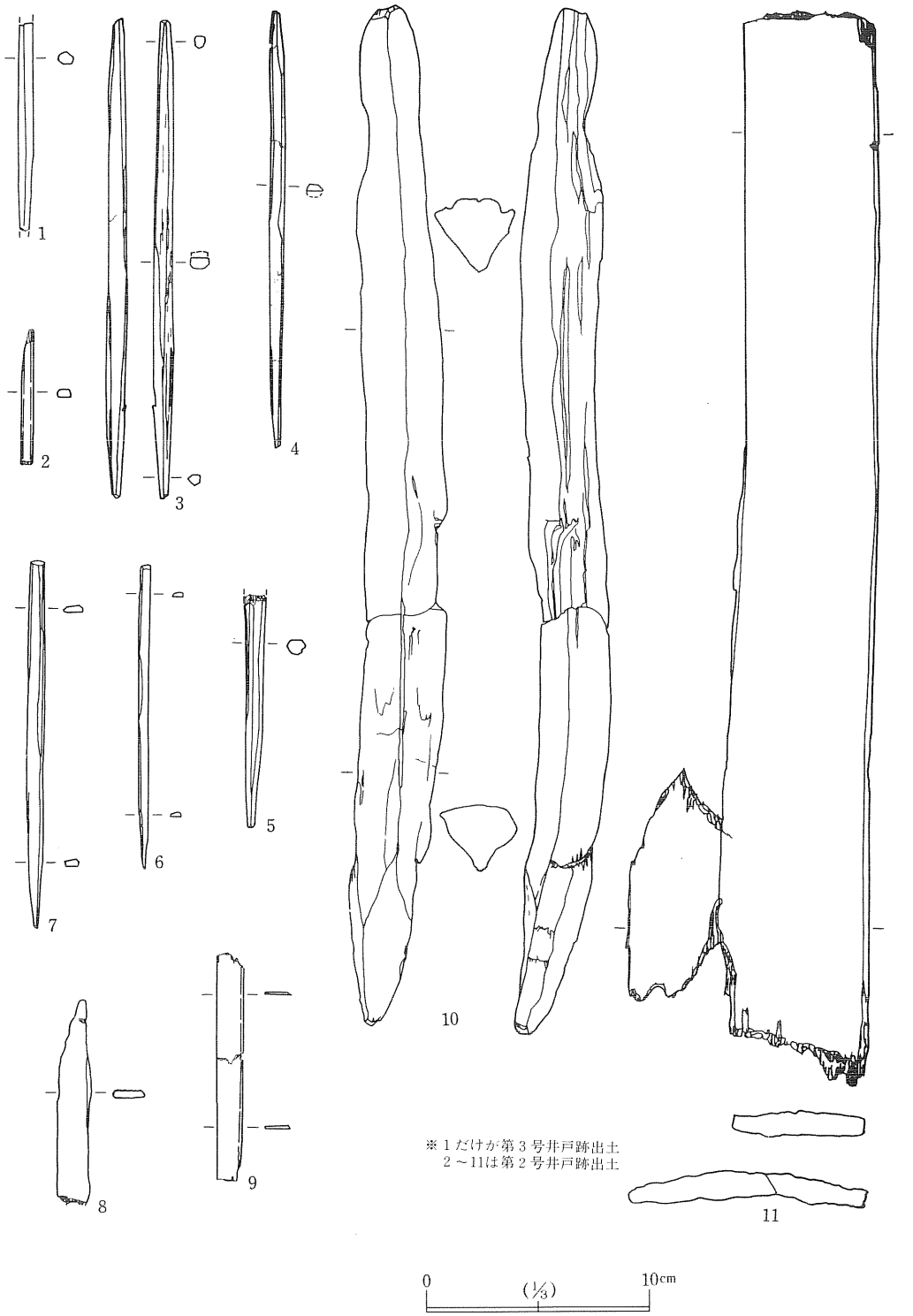
＜壁・底面の状況＞谷縁より斜めに掘り込まれており、底面も丸みをもつ。

＜遺物・その他＞埋土中および底面近くより、第12図１・２の箸と３のうすい板が出土した。なお底面より赤焼土器杯の底部破片が１点出土した。




第10図　第２～４号井戸跡、第６号土坑




第11図　第２・３号井戸跡出土遺物

## 第６号土坑（ＳＫ01）

＜位置・確認状況＞西谷部を調査中に、ＭＡ31グリッド北側の地山面で確認した。

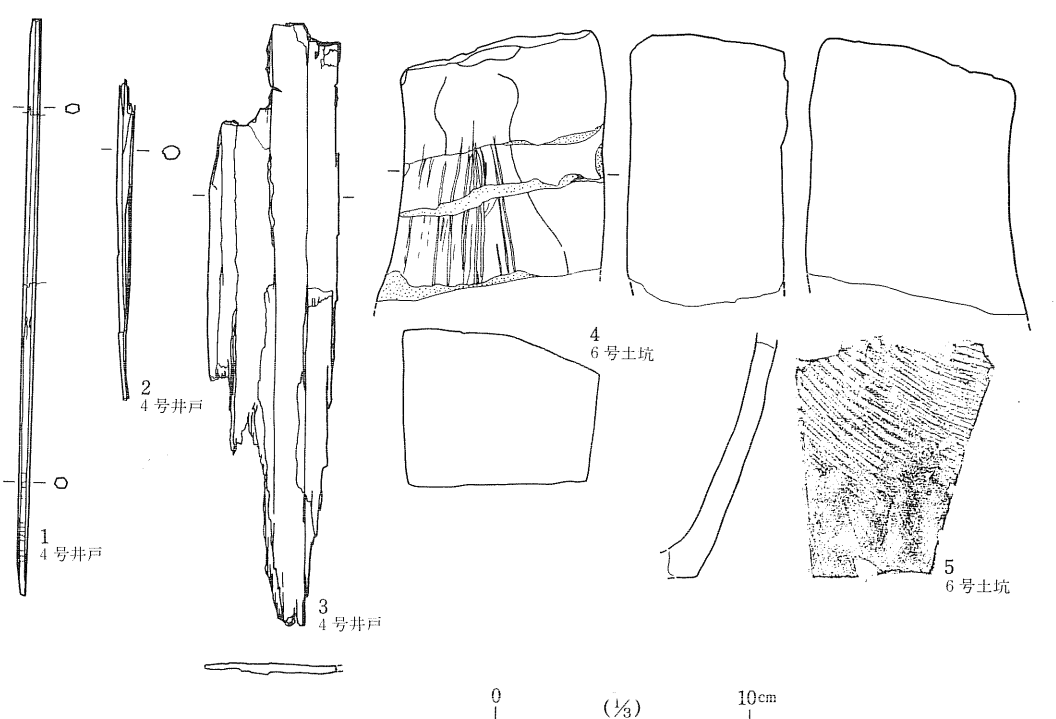
＜平面形・規模＞不整方形を呈している。東西141cm、南北155cmで、確認面から最深部まで56cmを測る。

＜埋土の状況＞上位から中位にかけて地山粒子・同ブロックからなる明黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積し、最下位にうすく黒色土が認められる。最下位を除き各層とも硬質である。

＜壁・底面の状況＞壁・底面とも堅致である。断面形は鍋底状を呈し、底面は平坦である。

＜遺物・その他＞埋土中から第12図５の須恵器甕の底部破片と４の砥石が出土した。砥石は４面の磨面があり、広い一面にはシャープに刻まれた線条の刻みがある。

第２号井戸跡と第４号井戸跡の中間で、泥炭層に突き刺さった状態で２本の杭と、他の木製品がみつかっており、図版33に示した。




第12図　第４号井戸跡、６号土坑出土遺物

## ［中央平坦部の遺構と出土遺物］

西谷部をはさんですぐ北側に、東に向けて長く張り出す標高14m前後の平坦面があり、西側のつけ根の部分で建物跡を検出した。その平坦面の北側に浅い谷が入り込んでおり、谷の落ち際で井戸跡・土坑を検出した。さらに北側にはせまい平坦面があり、小ピット群を検出した。

Ｉ区西谷部への落ち際で須恵系中世陶器・須恵器・赤焼土器が出土し、北側にある谷の落ち際でも須恵器・赤焼土器が多く出土した。

### 掘立柱建物跡（ＳＢ01）

＜位置・確認状況＞ＭＡ32グリッド周辺は表土が20cm前後と浅く、地山の明黄褐色土層を精査中に褐色土が充填した方形の掘り方をみつけ確認した。建物跡が立つ部分は、長方形の平場となっており、西側のつけ根の一段高い部分にきっちりはまり込んだように立地している。

＜規模＞掘り方はほぼ方形を呈し、北側の掘り方が大きく一辺が55～60cm、南側のものは小さく一辺35～40cmである。北辺の掘り方中心間の距離は10m、南辺は15m、南北間は12mである。掘り方の東西間における距離は1.2mと一定している。掘り方列は北側より１・２列めが10コ、３・４列めが12コ、５列めが12コ、６～８列めが16コであり、北から南へ拡大している。ただし、南北間における中心距離は、北側から１～５列間は1.8mであるが５～８列間は、1.6～1.7mとせまくなる。また掘り方どうしのならびについては、南北の中心が１～６列までとおるが、７・８列は片寄りとくに７列は６列と８列の中間に入ってくる。

＜遺物・その他＞掘り方中位で須恵器の小破片が一点出土したが、後世に混入したものである。

### 第７号土坑（ＳＫ08）

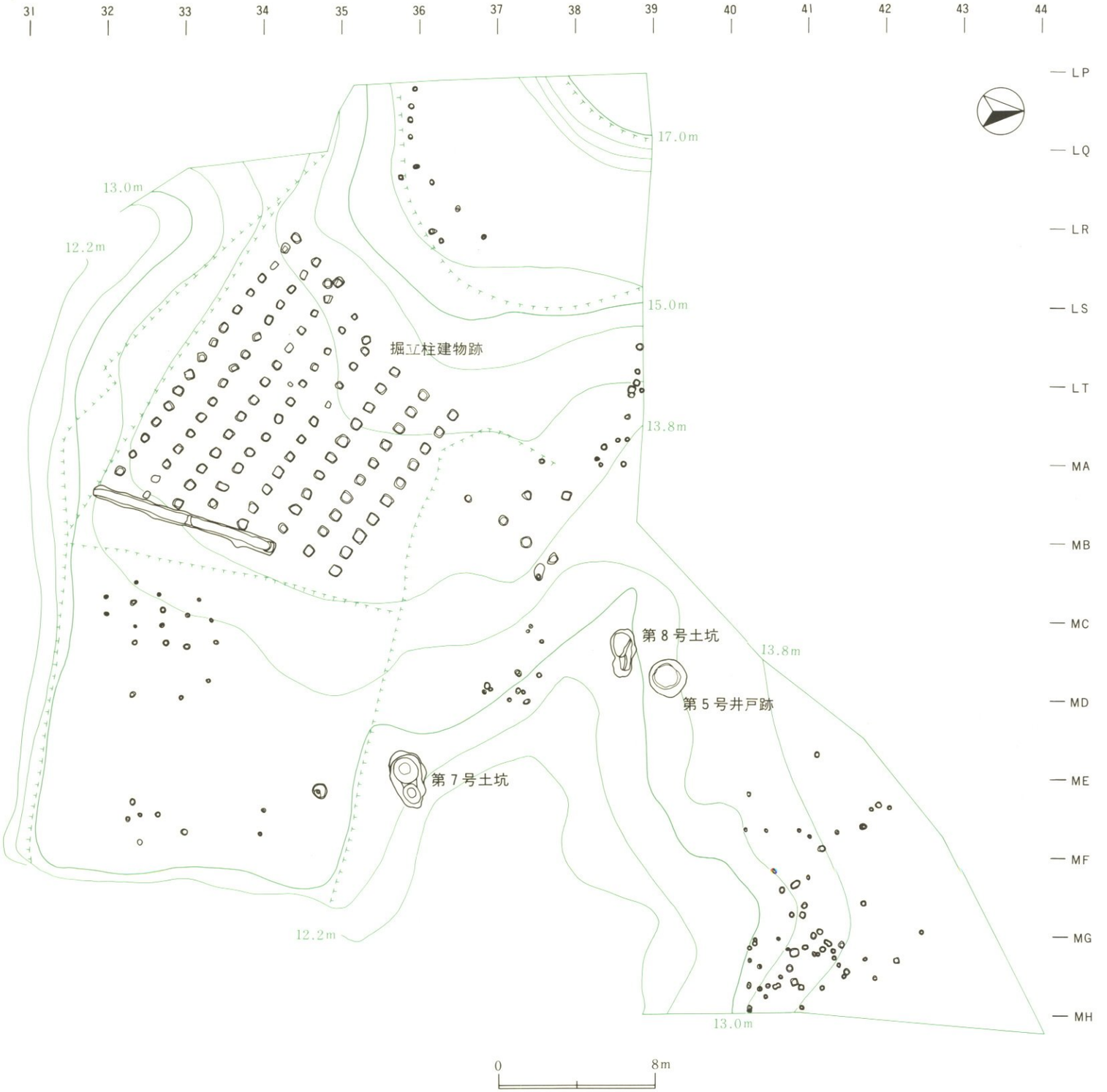
＜位置・確認状況＞ＭＥ35グリッドの北東隅、谷の落ち際にあり、青白色粘土層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。上面を精査した段階で２基の土坑の重なりがみとめられ、東側の小さい方（ａと呼称）が西側の大きい方（ｂと呼称）に切られていた。

＜平面形・規模＞ａ・ｂともに平面は不整円形を呈しており、ａは直径142cm、ｂは直径184cmであり、確認面からａは50cm、ｂは74cmを測る。

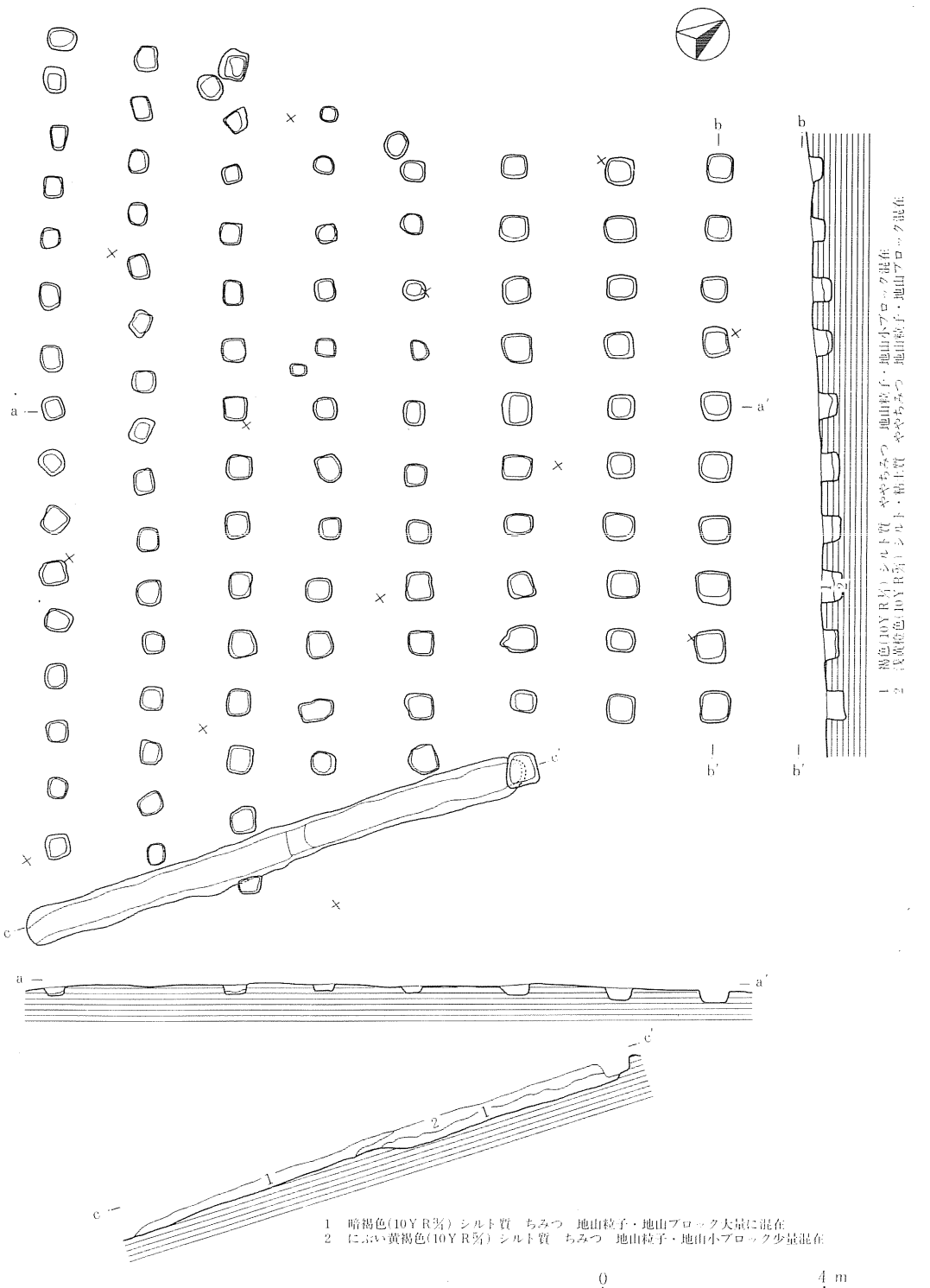
＜埋土の状況＞ａ・ｂともに灰黄褐色土がレンズ状の堆積をしており、青白色粘土が間にはいっている。

＜壁・底面の状況＞ａは深く丸く掘り込まれている。ｂは擂鉢状を呈しており、西寄りが深くなる。

＜遺物・その他＞ｂの埋土中位で、第17図１の須恵器甕口縁部破片、２の須恵器壺胴部破片と３の中国産の白磁皿破片が出土した。




**第13図　II区遺構位置図**


a
a′
b
b′
c
c′
1　褐色(10YR 3/4) シルト質　ややちみつ　地山粒子・地山ブロック混在
2　浅黄橙色(10YR 5/4) シルト・粘土質　ややちみつ　地山粒子・地山ブロック混在
1　暗褐色(10YR 3/4) シルト質　ちみつ　地山粒子・地山ブロック大量に混在
2　にぶい黄褐色(10YR 5/4) シルト質　ちみつ　地山粒子・地山小ブロック少量混在
0
4 m

第14図　掘立柱建物跡

### 第８号土坑（ＳＫ09）

＜位置・確認状況＞ＭＤ38グリッドの東側、西から東に下る縁辺にある。地山の浅黄色粘土層で灰褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形が２つ合わさったような形をしており、長軸方向を東西にもっている。長さ242cm、幅120cm、確認面から最深部まで110cmを測る。

＜埋土の状況＞シルト・粘土質の灰黄褐色をベースとする土が上位を覆い、灰白色の粘土をはさんで下は、小礫および砂利である。

＜壁・底面の状況＞西壁はほぼ垂直に、東壁はゆるやかに落ち込む。小礫・砂利をのぞいた底面は灰白色粘土であり、西側には丸い、東側には溝状の落ち込みがある。

＜遺物・その他＞埋土中より第17図４の須恵器甕胴部破片、５の四面に磨面をもつ砥石、６の棒状の木製品が出土した。

### 第５号井戸跡（ＳＫ10）

＜位置・確認状況＞ＭＤ38グリッドの北東側、地山の浅黄色粘土層で灰褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞開口部は直径196cmの円形を呈し、底面がせまく直径110cm前後である。確認面から最深部まで138cmを測る。

＜埋土の状況＞上位に灰黄褐色土、中位に黒褐色土がレンズ状の堆積をしており、下位に青灰色粘土と緑黒色土が混在する。下位は水をふくみドロドロの状態であった。

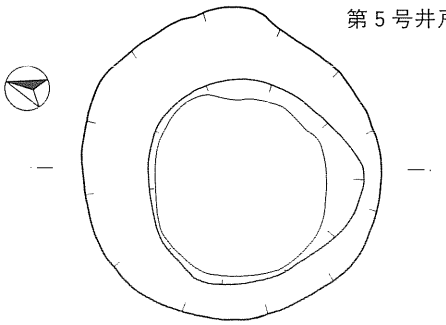
＜壁・底面の状況＞開口部より40cm程斜めに落ちる。それより下の壁はほぼ垂直で底面に達する。底面も平坦で、壁との境もはっきりしている。

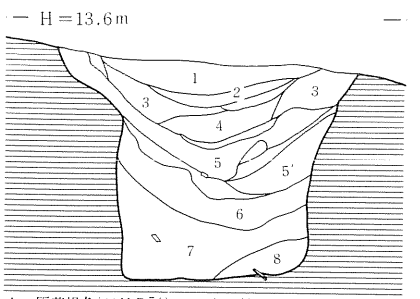
＜遺物・その他＞中位に20cm前後の石が数点みつかっており、縁辺に使用していたものが落ちてきたと思われる。また下位より、第16図に示した木製品・砥石が出土した。１は曲げ物の縁と思われるもので、幅４cm、厚さ１cmで表面がなめらかである。２～５は板、６・７は細い棒である。８は砥石で一面が磨面となっている。

### 小穴群

＜位置・確認状況＞ＭＦ40・ＭＧ40グリッドの平坦部で、明黄褐色土層面を精査して、直径20cm前後の小さい穴を20個確認した。浅い柱穴状の掘り込みであったが、配列に規則性は認められなかった。

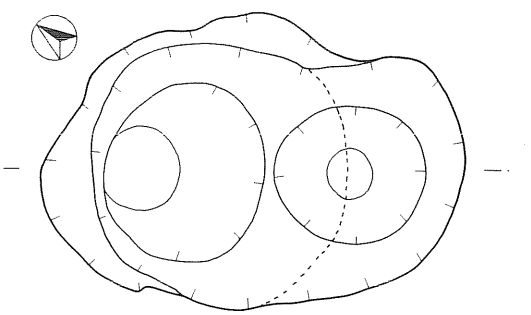
## 第５号井戸跡

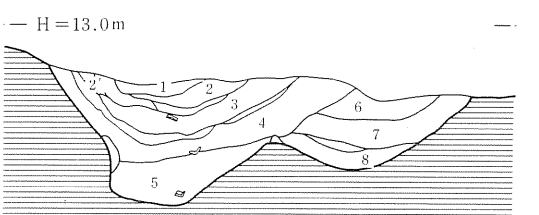





1　灰黄褐色(10ＹＲ5/2)　シルト・粘土質　ちみつ
　　5㎝前後の地山ブロック混在
2　灰黄褐色(10ＹＲ4/2)　粘土質　ちみつ
　　レンズ状の流れみられる
3　灰黄褐色(10ＹＲ4/2)　粘土質　ややちみつ
　　2に１㎝前後の地山粒子混在
4　黒褐色(10ＹＲ3/2)　粘土質　ややちみつ　グライ化
5　黒褐色(10ＹＲ3/2)　粘土質　ややちみつ
　　地山粒子密に混在
5'　黒褐色(10ＹＲ3/1)　粘土質　ややちみつ　グライ化
6　緑黒色(7.5ＧＹ3/1)　粘土質　ややちみつ
　　緑灰色粘土粒子密に混在
7　暗緑灰色(7.5ＧＹ4/1)　粘土質　かなり水含み軟
　　緑灰色粘土ブロック混在
8　緑黒色(7.5ＧＹ3/1)　粘土質　かなり水含み軟
　　植物根入るがほぼ均一

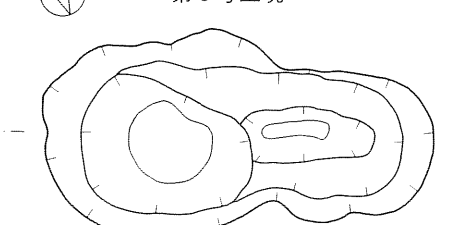
## 第７号土坑

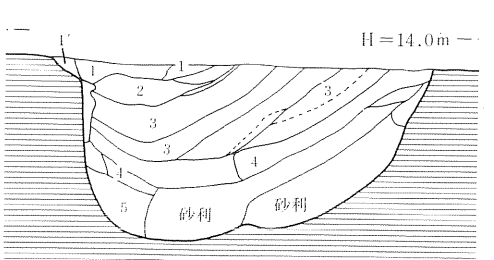





1　にぶい黄褐色(10ＹＲ5/3)　シルト・粘土質　ちみつ　炭化物粒子密に混在
2　灰黄褐色(10ＹＲ4/2)　シルト・粘土質　ちみつ　グライ化
3　灰黄褐色(10ＹＲ4/2)　シルト質　ややちみつ　炭化物粒子わずかに混在
4　褐灰色(10ＹＲ4/1)　粘土質　ややちみつ
5　黒褐色(10ＹＲ3/1)　粘土質　ややちみつ　地山ブロック混在
6　灰黄褐色(10ＹＲ4/2)　シルト・粘土質　ちみつ　5㎝前後の地山粒子混在
7　黒褐色(10ＹＲ3/2)　粘土質　ちみつ　3㎝前後の丸い地山ブロック混在
8　黒褐色(10ＹＲ3/2)　粘土質　ややちみつ　地山粒子わずかに混在

## 第８号土坑

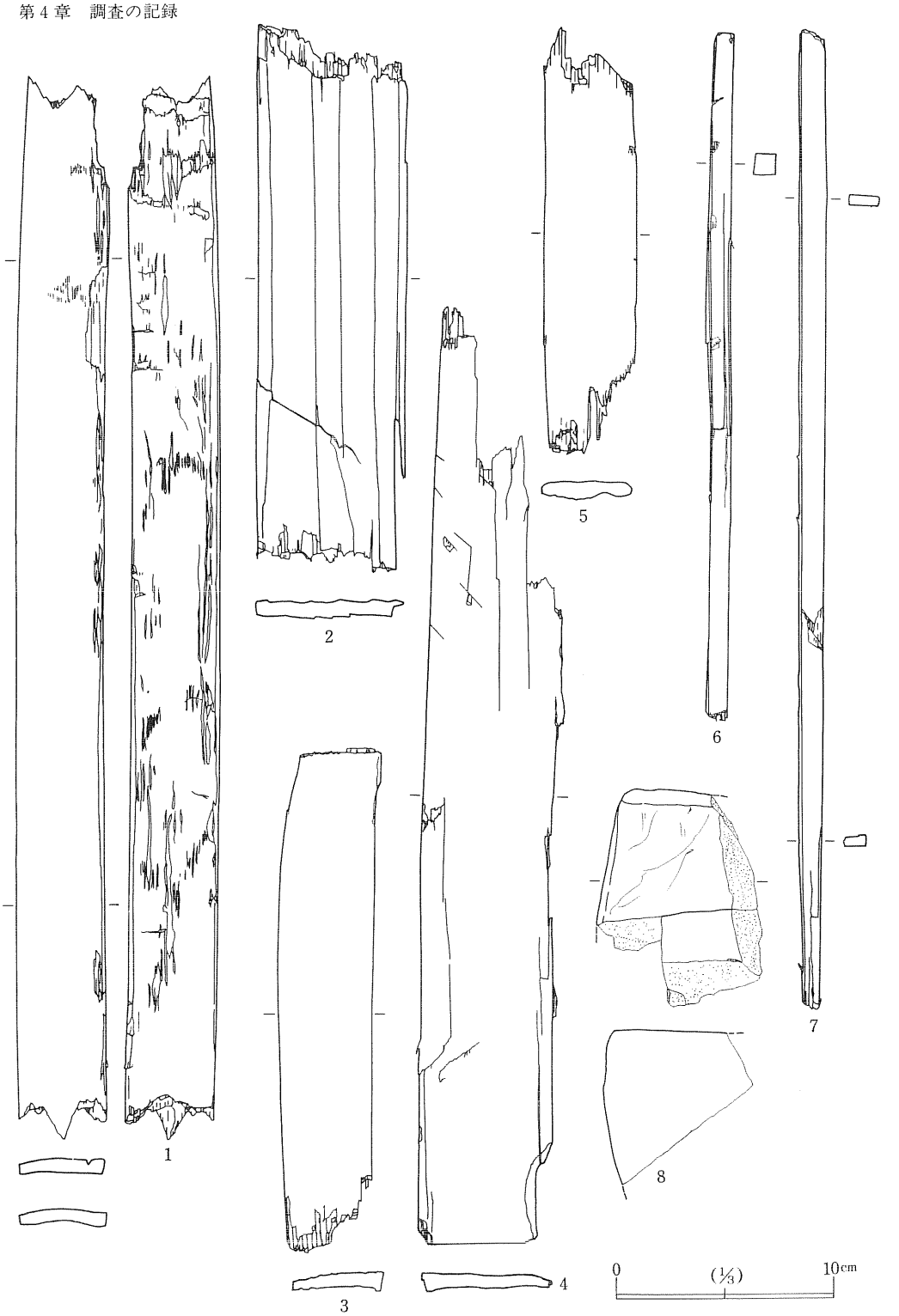




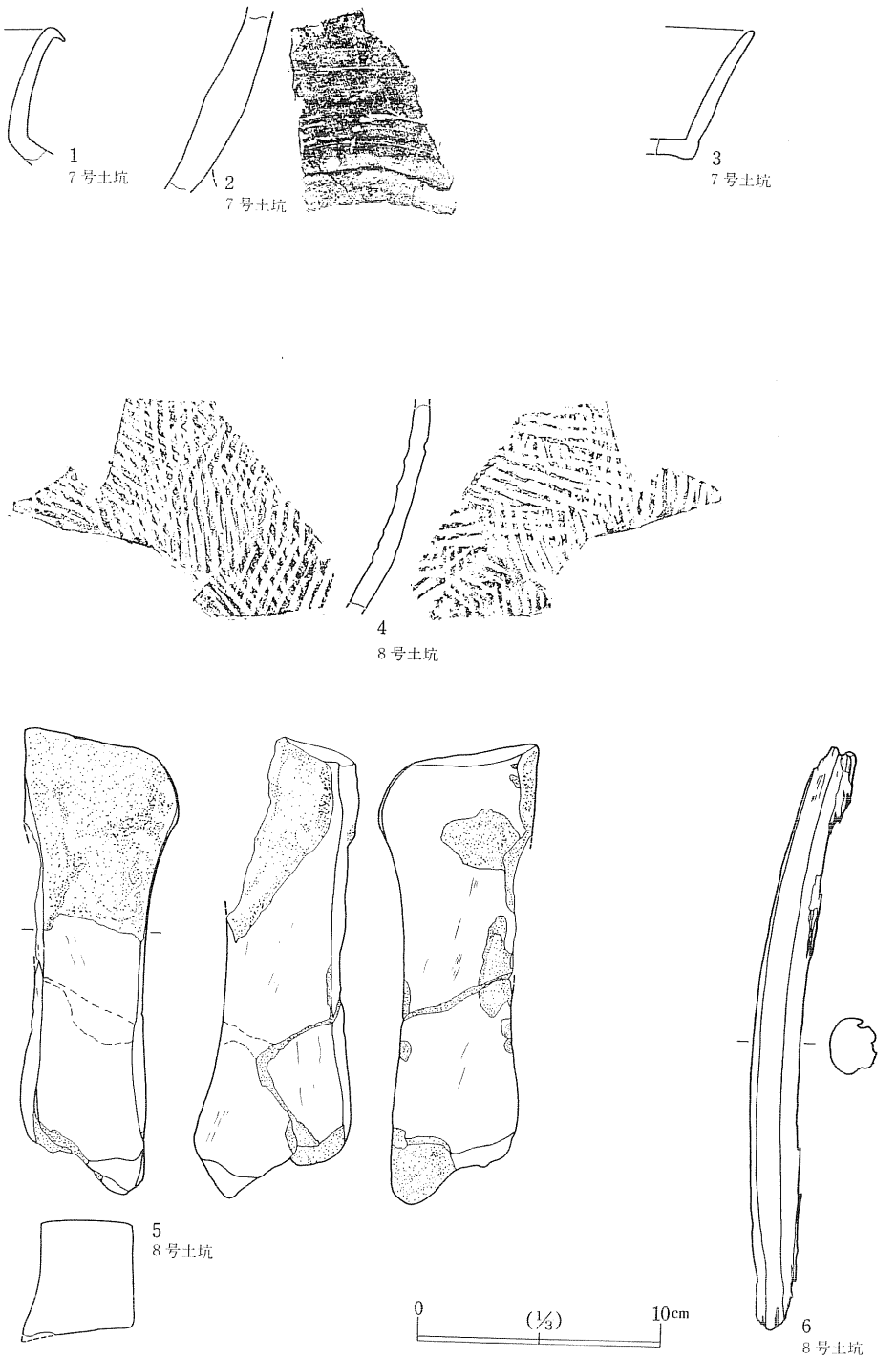

1　灰黄褐色(10ＹＲ4/2)　シルト・粘土質　ちみつ
2　褐灰色(10ＹＲ4/1)　粘土質　ややちみつ　地山粘土ブロック混在
3　褐灰色(10ＹＲ4/1)　粘土質　ややちみつ　砂粒の流れあり
4　黒褐色(10ＹＲ3/1)　粘土質　ややちみつ　緑灰色地山粘土ブロック混在
5　オリーブ黒色(５ＧＹ3/1)　粘土質　水含み軟

0　1 m

第15図　第５号井戸跡、第７・８号土坑




第16図　第５号井戸跡出土遺物




第17図　第７・８号土坑出土遺物

## ［中腹斜面における火葬墓群］

東向き斜面の中腹部にまとまっており、標高18～15mの範囲にある。いずれも表土が浅く、すぐ下の地山の明黄褐色土層で確認した。大部分は削平されているものと考えられる。周辺からの出土遺物はきわめて少ない。

### 第４号火葬墓（ＳＸ０１）

＜位置・確認状況＞ＭＥ60グリッドの南東側で、木炭が充填した穴として確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、東西に長軸方向をもっている。長径66cm、短径54cmであり、確認面から最深部まで12cmを測る。

＜埋土の状況＞木炭が大量に入った褐色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞地山を浅く皿状に掘り込んでおり、底面中央までゆるやかに落ち込む。

＜遺物・その他＞埋土中に木炭とともに骨片がわずかに含まれていた。

### 第５号火葬墓（ＳＸ03）

＜位置・確認状況＞ＭＦ60杭周辺で、広範囲に木炭が入る黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞東側が削平されている。北東にコーナーをもつことから長方形の掘り込みとも考えられる。東西に長軸方向をもっている。長さ370cm、最大幅140cmであり、確認面から最深部まで16cmを測る。

＜埋土の状況＞薄いが３層に分かれる。上位で南西側と北東側に分かれて直径50cm前後の木炭のまとまりがあり、中位は炭が入った褐色ないし黒褐色土で５cm前後の厚さがある。下位は地山ブロックが混在した黄褐色土である。

＜壁・底面の状況＞掘り込みが浅く底面は平坦である。長軸ラインの中央に直径20cmの小さな落ち込みがある。

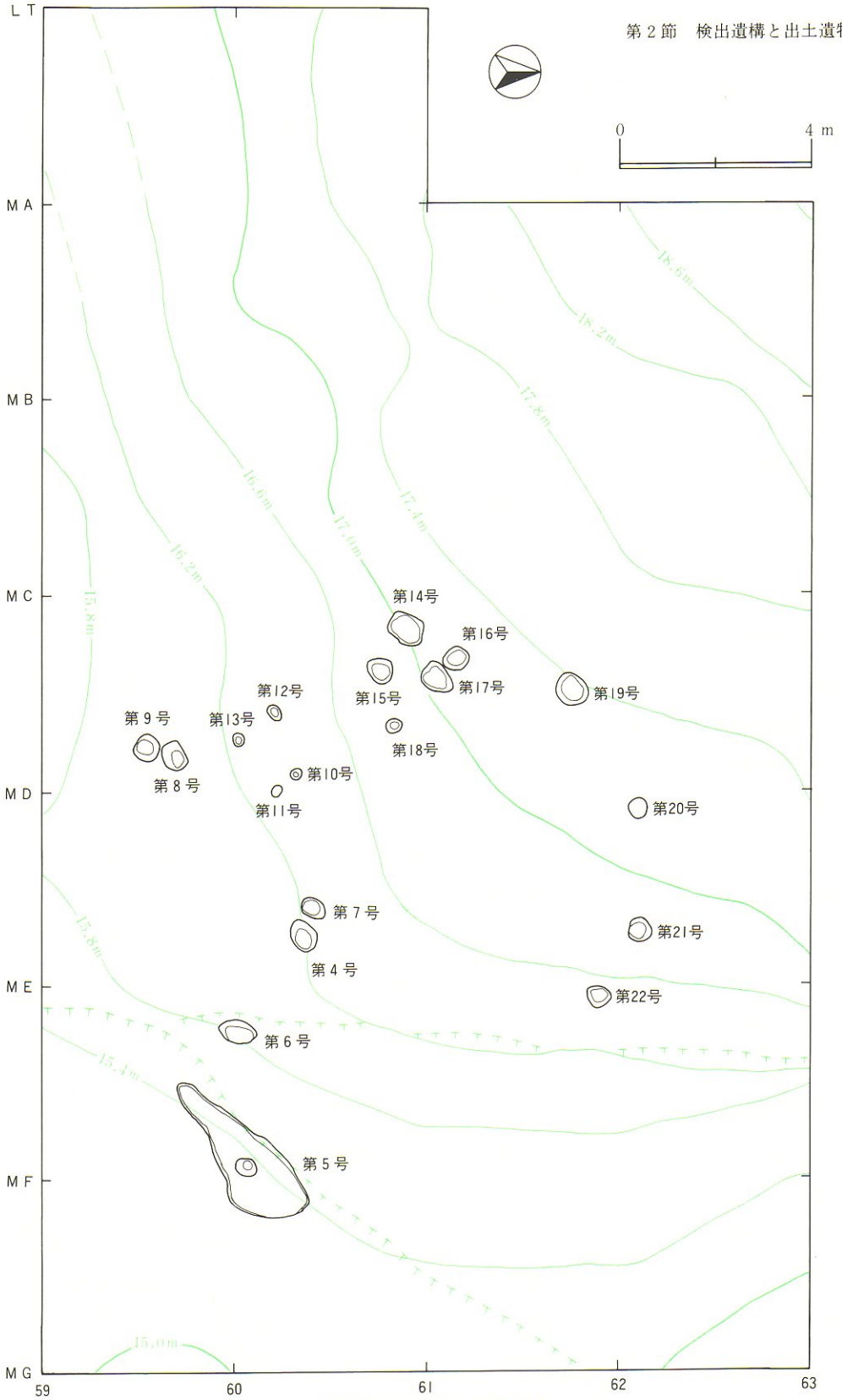
＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第６号火葬墓（ＳＸ０４）

＜位置・確認状況＞ＭＦ60グリッドの南側で、東側が削平され、木炭・焼土を含む土が地山の明黄褐色土層より盛り上がった状態で確認された。

＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径78cm、短径48cmであり、確認面から最深部まで12cmを測る。

＜埋土の状況＞東西で分かれる。東側は黄褐色ないし褐色土で、西側には黒褐色土が覆う。東側では木炭および焼土がまばらに混在し、西側には木炭がわずかに混在している。底面中央にうすく木炭が混在する黒色土が入る。




第18図　Ⅲ区遺構位置図

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれており、底面中央がわずかに落ち込んでいる。
＜遺物・その他＞埋土中に骨片が混在しており、底面よりやや浮いた状態で「政和通宝」１点と他の銅銭（文字不明）１点が重なって出土した。

### 第７号火葬墓（ＳＸ05）

＜位置・確認状況＞ＭＥ60グリッドの北東側で、第４号火葬墓のすぐ西隣に位置している。わずかに炭を含む褐色土の落ち込みとして確認した。
＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径50cm、短径38cmであり、確認面から最深部まで10cmを測る。
＜埋土の状況＞浅く褐色土が覆っている。
＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。底面中央がゆるく落ち込む。
＜遺物・その他＞埋土中に骨片が多く混在していた。

### 第８号火葬墓（ＳＸ06）

＜位置・確認状況＞ＭＤ59グリッドの東側で、第９号火葬墓のすぐ北隣りに位置している。暗褐色土の落ち込みとして確認した。
＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、東西に長軸方向をもっている。長径63cm、短径54cmであり、確認面から最深部まで10cmを測る。
＜埋土の状況＞上は東西に分けられる。東側には軟質の暗褐色土が、西側はやや硬質の黒褐色土が覆う。下は底面より盛り上がった状態で焼土・木炭粒子が混在した暗褐色・黒褐色土がある。
＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれおり、底面中央がわずかに落ち込んでいる。
＜遺物・その他＞東寄りの底面よりやや浮いた状態で銅銭（文字不明）が出土した。骨片は量が多く、底面西側にまとまっていた。

### 第９号火葬墓（ＳＸ07）

＜位置・確認状況＞ＭＤ59グリッドの南側、第８号火葬墓のすぐ南隣りに位置している。木炭が充塡した落ち込みとして確認した。
＜平面形・規模＞楕円形を呈している。長径60cmであり、確認面から最深部まで12cmを測る。
＜埋土の状況＞上位は、木炭が細く砕けたものを含む黒色土が覆い、その南西側に焼土ブロックが混在していた。下位は黒褐色土であり、木炭片・焼土粒子が混在していた。
＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれおり、底面は平坦である。
＜遺物・その他＞木炭とともに、上位と下位の埋土に骨片が混在していた。

### 第10号火葬墓（ＳＸ08）

＜位置・確認状況＞ＭＤ60グリッドの南東側にまとまる小穴状の火葬墓群の一つである。わずかに木炭が混在した落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞直径20cmの円形を呈している。確認面から最深部まで13cmを測る。

＜埋土の状況＞黒色土が充塡していた。

＜壁・底面の状況＞すり鉢状に落ち込み西側がやや深い。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第11号火葬墓（ＳＸ09）

＜位置・確認状況＞ＭＤ60グリッドの南東側で、木炭のまとまりとして確認した。

＜平面形・規模＞直径20cmの円形を呈している。確認面からの深さは２cm程であった。

＜埋土の状況＞細かく砕けた木炭がまとまっていた。

＜壁・底面の状況＞削平されているが、皿状の浅い掘り込みと思われる。

＜遺物・その他＞底面で銅銭（文字不明）が出土した。

### 第12号火葬墓（ＳＸ10）

＜位置・確認状況＞ＭＤ60グリッドの南東側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞直径30cmの円形を呈している。確認面から最深部まで７cmを測る。

＜埋土の状況＞上位にうすく木炭片が混在した黒褐色土が覆い、下位は褐色土と黄褐色土が混じり合っており、木炭片がわずかに入る。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかに骨片が混在していた。

### 第13号火葬墓（ＳＸ11）

＜位置・確認状況＞ＭＤ60グリッドの南東側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞直径26cmの円形を呈している。確認面から最深部まで14cmを測る。

＜埋土の状況＞軟質の黒褐色土が覆い、下位に明黄褐色土ブロックが混在していた。

＜壁・底面の状況＞地山を浅く掘りくぼめている。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在していた。

### 第14号火葬墓（ＫＳＢ11）

＜位置・確認状況＞ＭＤ60グリッドの北西側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径71cm、短径60cmで確認面より最深部まで12cmを測る。

＜埋土の状況＞比較的軟質の黒褐色土、暗褐色土が覆い、南側に木炭片がまとまっていた。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第15号火葬墓（ＫＳＢ12）

＜位置・確認状況＞ＭＤ60グリッドの北西側で、黒色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞ほぼ円形を呈している。直径51cmで、確認面から最深部まで６cmを測る。

＜埋土の状況＞東西で分かれ、東側は木炭が混在した黒色土、西側は暗褐色土が充塡していた。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在している。

### 第16号火葬墓（ＫＳＢ13）

＜位置・確認状況＞ＭＤ61グリッドの南側で、黒色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞直径42cmの円形を呈している。確認面から最深部まで26cmを測る。

＜埋土の状況＞東側では木炭が混在する軟質の黒色土が、西側には焼土ブロックが混在する黒褐色土が覆う。

＜壁・底面の状況＞地山が丸みをもって深く掘り込まれている。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在していた。

### 第17号火葬墓（ＫＳＢ14）

＜位置・確認状況＞ＭＤ61グリッドの南側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、東西に長軸方向をもっている。長径66cm、短径50cmであり、確認面から最深部まで８cmを測る。

＜埋土の状況＞軟質の黒色土が覆い、南側の底面に木炭が混在している。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第18号火葬墓（ＫＳＢ15）

＜位置・確認状況＞ＭＤ61グリッドの北側で、木炭が混在する黒褐色土の落ち込みを確認した。

＜平面形・規模＞直径58cmの円形を呈している。確認面から最深部まで7.5cmを測る。

＜埋土の状況＞木炭片が密に混在する黒褐色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞南側の壁がゆるやかに落ち、底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第19号火葬墓（ＫＳＢ17）

＜位置・確認状況＞ＭＤ61グリッドの北側で、木炭片が多く混在する黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径68cm、短径58cmであり、確認面から最深部まで20cmを測る。

＜埋土の状況＞木炭片が多く混在する黒色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞地山が皿状に掘り込まれている。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が入っていた。

### 第20号火葬墓（ＫＳＢ18）

＜位置・確認状況＞ＭＣ62グリッドの南西隅で、地山に木炭が付着した状態で確認した。

＜平面形・規模＞直径40cmのほぼ円形を呈している。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第21号火葬墓（ＫＳＢ19）

＜位置・確認状況＞ＭＥ62グリッドの南西側で、木炭が混在した黒色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞直径42cmの円形を呈している。確認面から最深部まで７cmを測る。

＜埋土の状況＞５mm前後の木炭片が充填していた。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。

＜遺物・その他＞埋土中に骨片が混在していた。

### 第22号火葬墓（ＫＳＢ20）

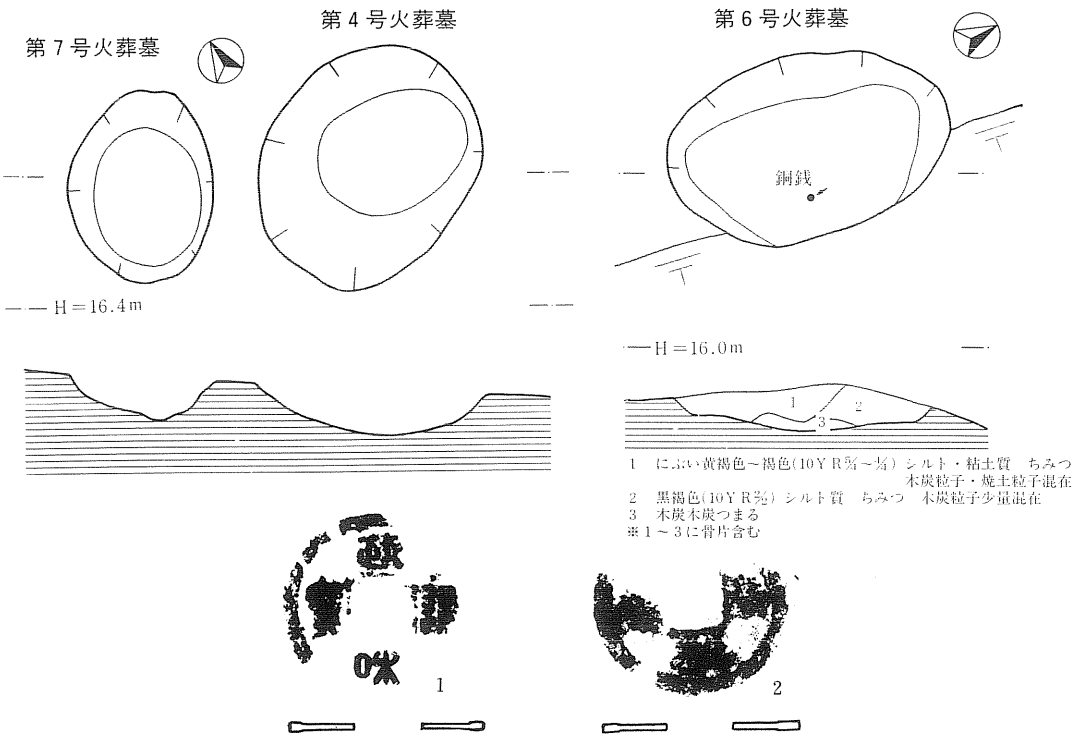
＜位置・確認状況＞ＭＦ61グリッドの北西隅で、黒色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞不整円形を呈し、最大径44cmである。確認面から最深部まで７cmを測る。

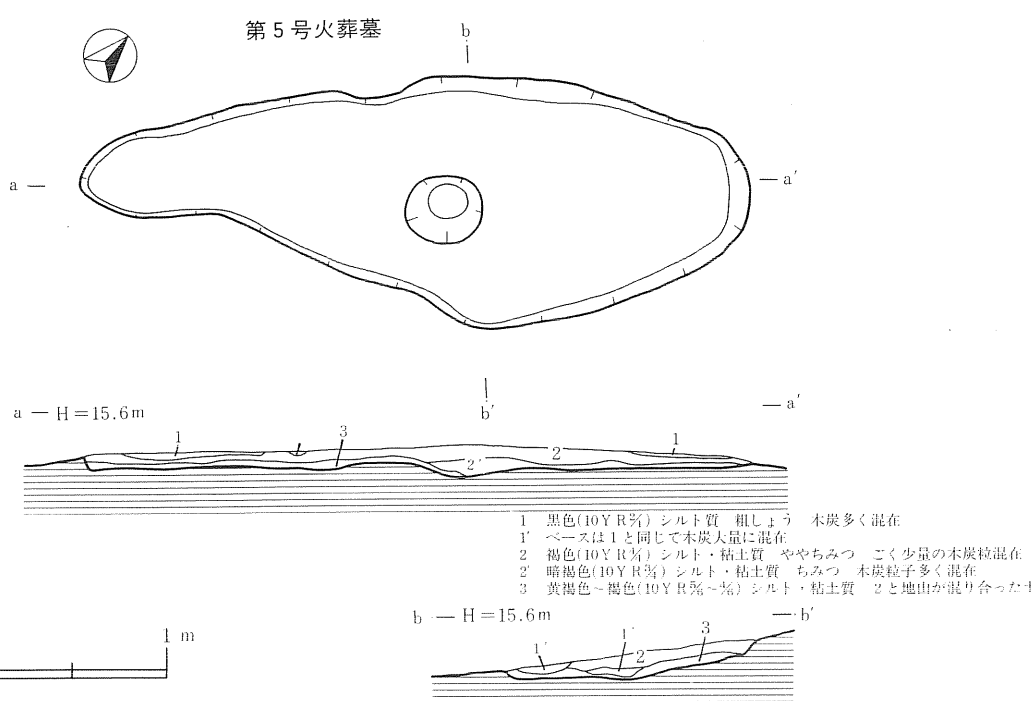
＜埋土の状況＞木炭粒子と焼土粒子が混在する黒色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞西側がやや深く垂直に掘り込まれており、東側は平坦である。

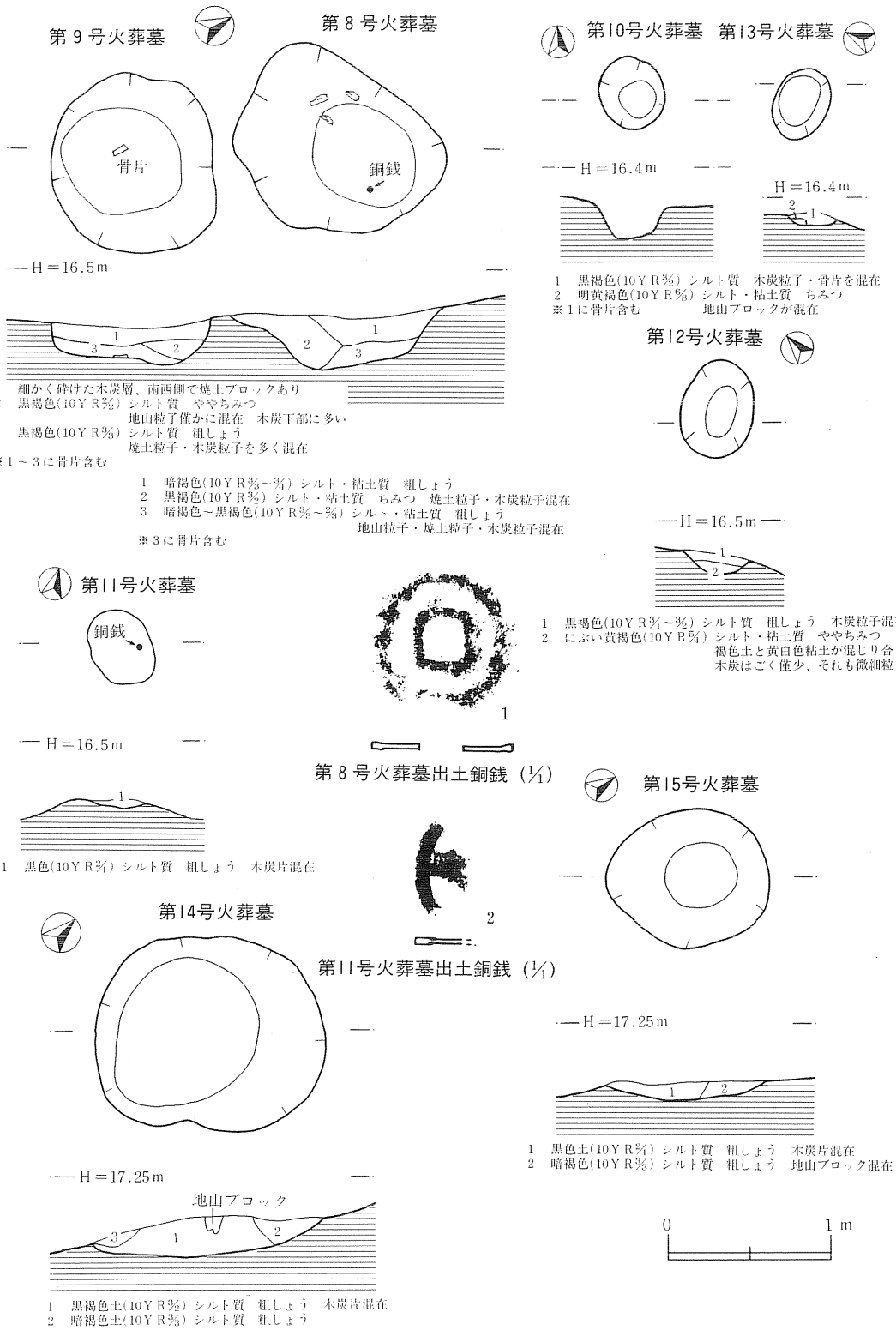
＜遺物・その他＞出土遺物はない。



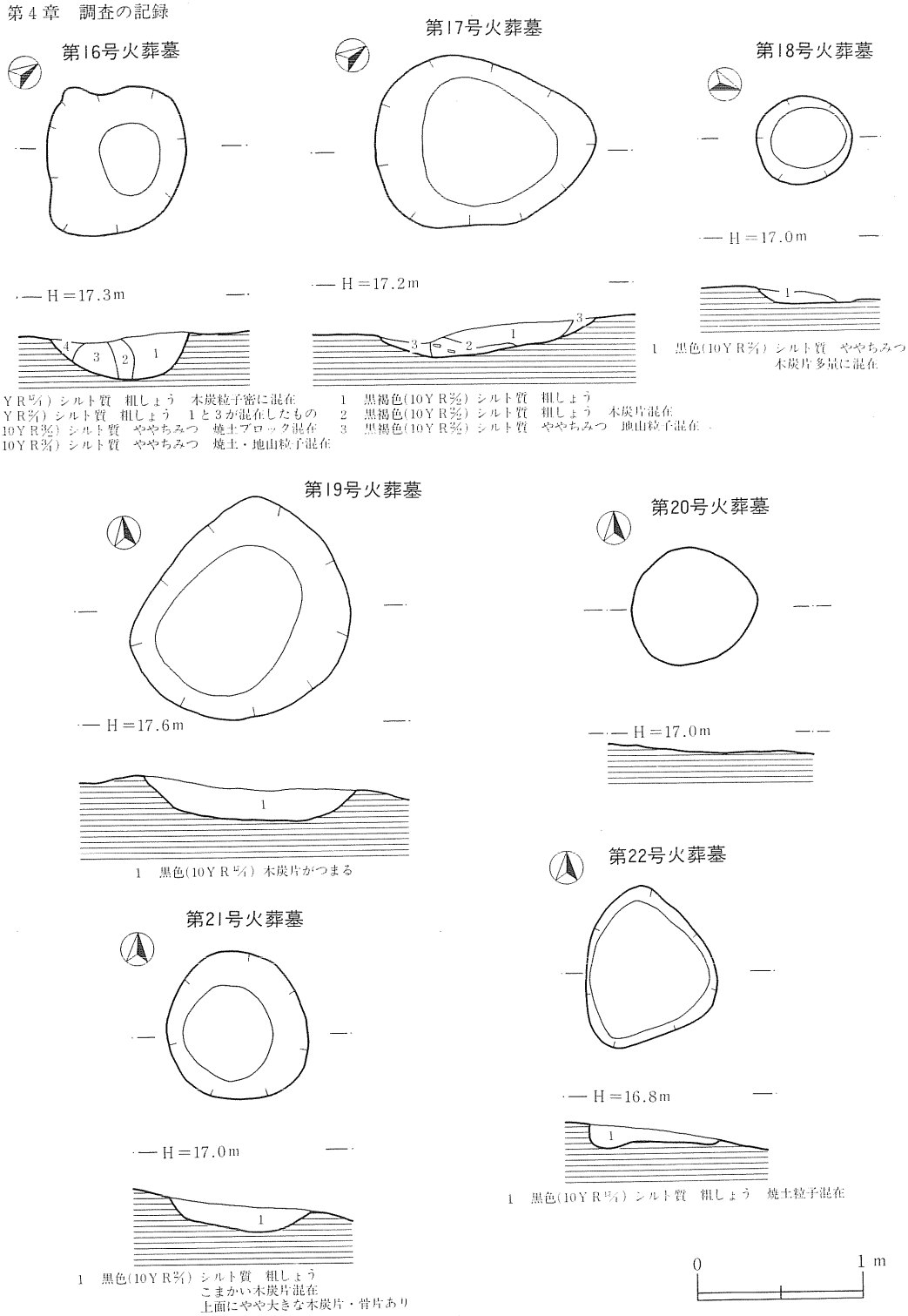

第６号火葬墓出土銅銭（1/1）




第19図　第４～７号火葬墓・出土銅銭




第20図　第８～15号火葬墓・出土銅銭




第21図　第16～22号火葬墓

## 第３節　遺構外の出土遺物

前節では、遺構に伴う遺物についてだけ、紹介してきたが、ここではⅠ～Ⅲ区の遺構外の遺物を集約した。材質によって大分類し、さらに種類毎に器形・製作技法について観察を行い、年代的な考察を付した。

出土遺物を材質および種類で分類すると以下のとおりである。

［土製品］　Ａ：土器－ａ：土師器（内黒土器）、ｂ：赤焼土器、ｃ：須恵器

Ｂ：陶磁器－ａ：灰釉陶器、ｂ：須恵系陶器、ｃ：輸入磁器、ｄ：施釉陶器

ｅ：染付け陶磁器

Ｃ：その他土製品－ａ：土錘、ｂ：陶錘、ｃ：塼、ｄ：ふいごの羽口

ｅ：瓦質土製品

［石製品］　石器、砥石

［金属製品］銭貨、鉄塊

### ［土製品］

### Ａ：土器について

土器は焼成の違いによって、酸化焔焼成のａ：土師器、ｂ：赤焼土器、還元焔焼成のｃ：須恵器に分けた。それぞれで成形技法・調整技法について観察を行い、分類した。

ａ：土師器

ロクロで成形されており、内面をミガキ調整後、黒色処理しているものである。杯・甕の種類がある。

＜Ⅰ：杯＞―第22図１～３―

赤焼土器杯と比べて大型のものが１点、小型のものが１点ある。底部外面はナデられて平滑である。他に高台付杯の底部があり、底部周辺をつまみ高台を引きだしており、底部には回転糸切り痕が残っている。

＜Ⅱ：甕＞―第22図４―

小形の広口甕である。底部より丸みをもって立ち上がり、胴部上位でくびれ、口縁部が短く外反している。短く立ち上がる口唇部が特徴的である。底部の切り離しは、回転糸切りであり、胴部下半から底辺部にかけてケズリ調整が施されている。内面のミガキの方向は、胴部上半から底部にかけて縦位に走っている。

ｂ：赤焼土器

ロクロで成形されており、内面が黒色処理されていないものである。杯の他に甕がある。

＜Ⅰ：杯＞―第22図５～10、第23図１～５―

形態のちがいで三つに分けられる。

１．器高が低く底部が大きい。体部から口縁部までが短く、丸みをもって立ち上がる。

２．器高が高く底部が大きい。体部から口縁部にかけてややふくらみをもって立ち上がる。

３．器高が低く底部が小さい。体部から口縁部にかけてわずかに丸みをもって外傾している。

＜Ⅱ：甕＞―第23図６～24―

実測図に復元できるものがなく、口縁部・胴部・底部の各部位をピックアップして調整技法を書き込んだ。ただし大型・小型のものを分けていない。

ｃ：須恵器

器種は杯・蓋・甕・壺がある。

＜Ⅰ：杯＞―第24図１～９、第25図１～８―

ロクロで成形されており、底部の切り離し手法と形の違いによって分類した。

１．底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもので、器高が低く底部の大きいものである。体部から口縁部までが短く、丸みをもって立ち上がる。

２．底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもので、器高が低く底部が大きいものである。体部から口縁部までが短く、直線的に立ち上がる。

３．底部の切り離しが回転糸切りによるもので、器高が高く底部が小さい。体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾している。

４．底部の切り離しが回転糸切りによるもので、器高が低く底部が小さい。体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾している。

＜Ⅱ：蓋＞―第25図９～11―

３点出土しており、そのうちの１点がつまみ部を含めて３分の１程遺存している。つまみ部は低く、中央が凹んでいる。体部はつまみ部周辺が平坦でわずかな丸みをもって端部まで下る。端部はほぼ垂直に折り込まれ、その断面は三角形を呈している。内面との境は判然としている。

他の１点は、端部のつくりはほぼ同じであるが、肩が急に下がる形状を呈している。

＜Ⅲ：甕＞―第26図１～８、第27図１～６、第28図１～６―

口縁部から胴部上半にかかる大型のものが１点復元できた。胴部の肩が張り、つよく外反する口縁部との境も明瞭である。口唇がハチマキ状の張り出しになっている。その他の甕は破片であり、口縁部・胴部・底部の各部位をピックアップした。ただし大型、中型のものが混在している。各部位について特徴を上げる。

＊口縁部では、口唇部のつくりに違いがみられる。口唇が鋭角に立つものと鈍角の斜めになる

ものがある。

＊胴部は外面に叩き目、内面にあて具痕がみられるが、叩き目は平行な板目ないし布目であり、あて具痕は同心円になるものと平行になるものがあり、胴部の位置でかわっているようである。底部は大型のものは丸底を呈すると思われるが、中型のものについては平底ないし高台のつくものの二種類がある。

＜Ⅳ：壺＞―第29図１～８―

長頸壺になると思われるものが３点あり、大中小がある。胴部は丸みをもっているが、上半で肩が張っている。胴部と口縁部は別々につくり、後に接合を行っている。いずれも底部に高台が付いている。

## Ｂ：陶磁器について

ａ：灰釉陶器

＜浄瓶＞―第29図９―

１点だけである。口縁部・高台が欠損しており、胴部が残っている。その胴部の肩に受け口がつく。長頸壺と同様に口縁部と胴部のつくりが別々で接合した痕跡が胴部にみえる。底部の切り離しは静止糸切りと思われ、高台に沿った内側をナデている。

ｂ：須恵系陶器

＜Ⅰ：鉢、擂鉢＞―第30図１～９、第31図１～11、第32図１～６―

口縁部・体部・底部のそれぞれの破片が多い。擂鉢は一般的に内面の卸し目の数が、時代が新しくなるほど多くなるといわれ、卸し目の状態に注目して分類を行った。

１．擂鉢よりかなり薄手の鉢がある。外面は平滑であるが、内面はロクロ成形の凹凸を残している。底部の切り離しは静止糸切りで、底辺部が外に張り出している。体部は丸みをもって外傾している。

２．卸し目どうしの間隔がかなり開いており、体部中位から下に引かれているものである。また卸し目の器面に対するあたりが弱い。口唇部をみると、外面が斜めに面取りされており内側が高くなっている。

３．卸し目どうしの間隔がやや狭まっており、体部上位から下に卸し目が引かれている。卸し目の器面に対するあたりが強く、溝が深くなっている。口唇部をみると、内側が２cm前後の幅で面取りされており、外側が高くなっている。

４．卸し目どうしが重なるように引かれたもので、体部が１点だけある。口唇部と口縁部外面に櫛目波状文が入ったものがあり、ここに含めた。

底部はほとんどが、２・３類に対応すると思われるものであり、使用頻度がたかいことを示しているのか平滑になっている。とくに体部の厚味に対して底部が薄くなっている。

＜Ⅱ：大甕・壺＞―第33図１～６、第34図１～６―

一定の斜め方向に平行叩き目が施され、内側には円形に凹むあて具痕が残る。

＜Ⅲ：小壺＞―第34図７・８―

底部が２点出土している。底部の器壁が厚く、内側にロクロの凹凸を残している。底部の切り離しは静止糸切りである。

ｄ：輸入磁器

＜Ⅰ：碗＞―第35図１～７―

いずれも中国から輸入された青磁の小破片である。外側に幅の広い片切彫の鎬蓮弁文をもつものと、内側に画花文をもつものがある。

ｅ：施釉陶器

＜Ⅰ：平碗＞―第35図８・９―

口縁部の内外面に円く鉄釉がついているもので、体部・底部は素地のままである。体部が直線的に外傾し、口縁部が短く外反している。生産地は瀬戸・美濃に推定される。

＜Ⅱ：碗＞―第35図13・14―

内側は一様に外面は高台近くまで鉄釉がかかる。体部より丸みをもって立ち上がる。高台を張り付け、後に内側を深く削っている。生産地は関西地域に推定される。

＜Ⅲ：小皿＞―第35図10―

口縁部の内外面に円く灰釉がついている。体部・底部は素地のままである。生産地は瀬戸・美濃に推定される。

＜Ⅳ：瓶＞―第35図12―

破片で全体の器形は不明であるが、瓶子の肩の部分と思われる。外に鉄釉がかかる。生産地は瀬戸・美濃に推定される。

＜Ⅴ：擂鉢＞―第35図15～18―

内面に卸し目が密に施されており、底部には高台をもつ。内外面に鉄釉がうすくかかる。生産地は肥前に推定される。

＜Ⅵ：蓋＞―第35図19―

土師質の素地の表面に黒い釉がかかっている。生産地は関西と推定される。

ｆ：染付け陶磁器

＜Ⅰ：碗＞―第36図１～５―

小ぶりな磁器碗が３点出土しており、外側の染付は花柄と思われる。内側口唇と底面に線が引かれる。４・５も陶器碗の破片であると思われる。

＜Ⅱ：猪口＞―第36図６～８―

破片が３点でたてに矢羽状・格子状の線文様が描かれている。

＜Ⅲ：皿＞―第36図11～13―

内側の口縁部に文様を描いたものが３点ある。

＜Ⅳ：壺＞―第36図10―

破片であり。形状ははっきりしない。

＜Ⅴ：戸車＞―第36図14・15―

小さなものが、直径3.6cm、孔径0.8cmを測り、大きなものが直径4.5cm、孔径1.4cmと推定している。生産地は肥前と推定される。

註）輸入磁器・施釉陶磁器の生産地は、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の鑑定結果にもとずく。

## Ｃ：その他の土製品

ａ：土錘 ―第37図１～８―

中央の孔の大きさが1.5～1.7cmとほぼ一定であるが。長さ、および形状がそれぞれちがっている。また完全な形で残る２点の重さを比較したが、89gと107gで重さがちがう。

ｂ：陶錘 ―第37図９―

１点だけ硬さのことなるものがあり、焼きしまりのようすから陶錘とした。土錘にくらべてかなり大きい。

ｃ：塼 ―第37図４―

１点だけ出土している。端に孔が開く。

ｄ：ふいごの羽口 ―第37図１～３―

破片が３点出土している。

ｅ：瓦質土製品 ―第32図７―

大型の鉢の体部破片が１点出土している。表面は灰白色を呈し、内面はなめらかである。

## ※土器・陶磁器・土製品の年代について

いまだに秋田県では、古代の土器について編年が確立されていない現状にあるが、ここではこれまでの調査成果をふまえて相対的な年代の考察を行いたい。古墳時代以来うけつがれてきた須恵器・土師器にたいして、県内の赤焼土器の出現時期については、９世紀中頃と考えられ

註1)、待入Ⅲ遺跡にみられる回転糸切りで底部が切り離された調整のない杯と、ロクロ成形された口唇部が立ち上がる甕については、９世紀後半に年代が推定される。ｂⅠ２・３類とした赤焼土器杯とｃⅠ３類とした須恵器杯は形態・技法の面で共通する特徴をもっており、ほぼ同時期のものと考えられる。ただしｃⅠ１・２類とした回転ヘラ切りの須恵器杯については９世紀代中頃と推定している。また土師器についても、調査区西谷部での共伴が確認されていることからやはり９世紀後半に推定される。

灰釉陶器の浄瓶は、秋田県ではじめて発見されたものである。猿投窯を中心とする編年に対応させると註2)、胴部の肩が張り、受け口部がかなり簡略化されている特徴から11世紀前半の年代が考えられる。

須恵系中世陶器の年代は、珠洲焼きの編年表に照らし合わせて年代を推定した註3)。鉢・擂鉢の１類は珠洲焼き片口鉢のⅠ期（1150～1200年）に、２類はⅡ・Ⅲ期（1200～1300年）に、３類はⅣ・Ⅴ期（1300～1450年）に、４類はⅥ期(1450～1500年）に対応すると考えられる。小壺はⅠ期に対応すると考えられる。

輸入磁器について、画花文のある青磁は12～13世紀、鎬蓮弁文のものは13～14世紀に推定される註4)。

施釉陶器のうち鉄釉・灰釉が口縁部に円くかかる平碗・皿は、瀬戸・美濃の大窯生産のものと対比させると14～15世紀代に年代が推定される註5)。 染付け陶磁器と施釉陶器のⅡ類碗は、17世紀後半から19世紀に年代が推定される註6)。

土錘は古代から中世、陶錘は中世に推定される。

註１）　赤焼土器の年代については、払田柵跡外郭南門北側のSK60土坑から出た嘉祥２年の紀年のある木簡とともに出土した土師器の特徴から推定したものである。
　内黒土師器とともに、回転糸切り後に体部から口縁部にかけてヘラ削り調整が施された土師器とした杯、ロクロ調整のある土師器甕口縁部破片、回転糸切り底の土師器長胴甕破片があり、いずれも酸化焔焼成の土器であり、内黒処理されていないことから、ここで分類した赤焼土器の範疇にはいるものと考えられる。ただし体部調整が行われていることから、待入Ⅲ遺跡の赤焼土器杯より古い年代に位置づけられる。

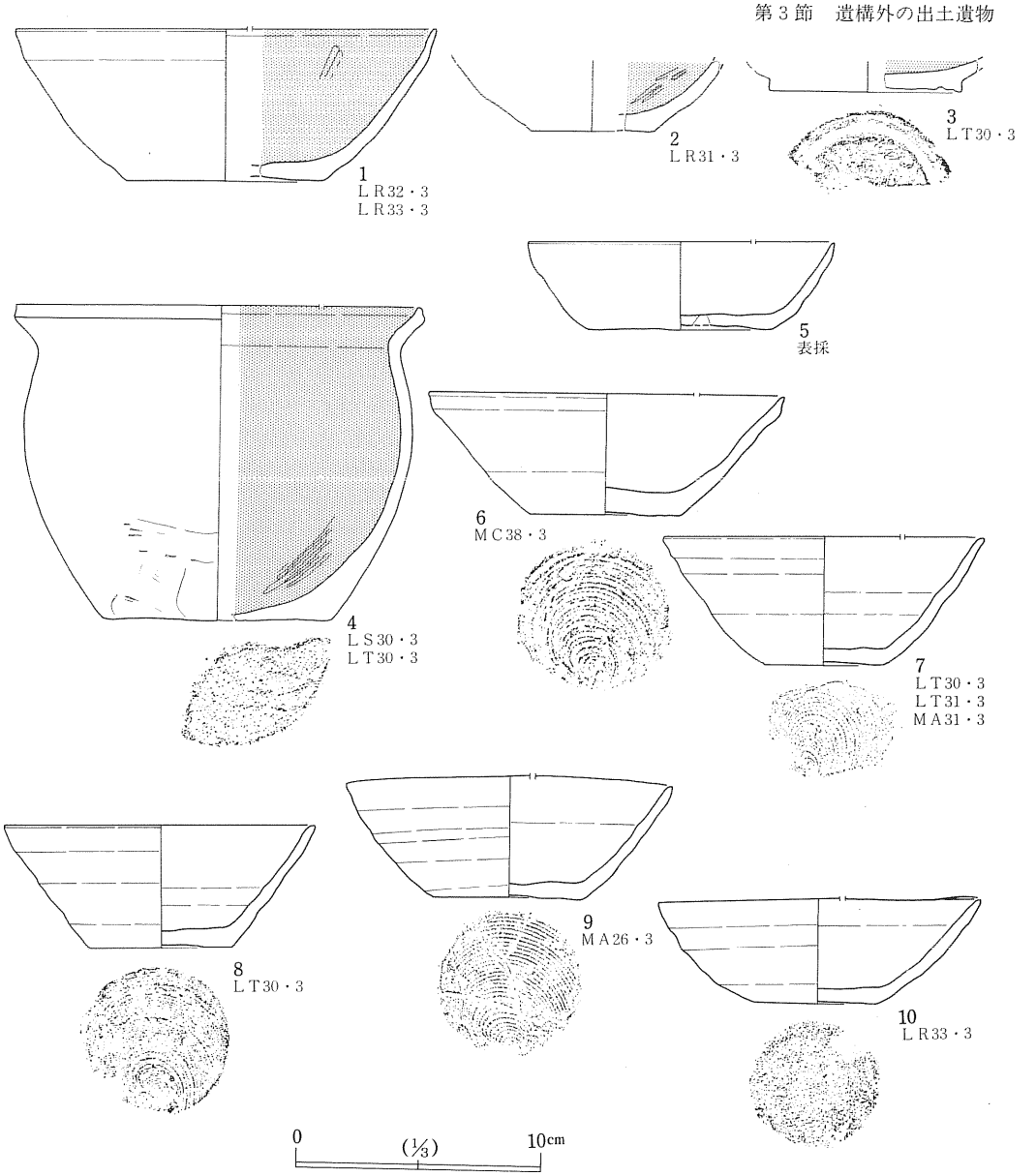
註２）　赤焼土器に器高の低い、小ぶりの皿に近い形態のものが入っていないことが、９世紀代にした根拠である。

註３）『日本陶磁全集６白瓷』中央公論社－1976年－の編年表を参考にした。

註４）『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館－1989年－の編年表を参考にした。

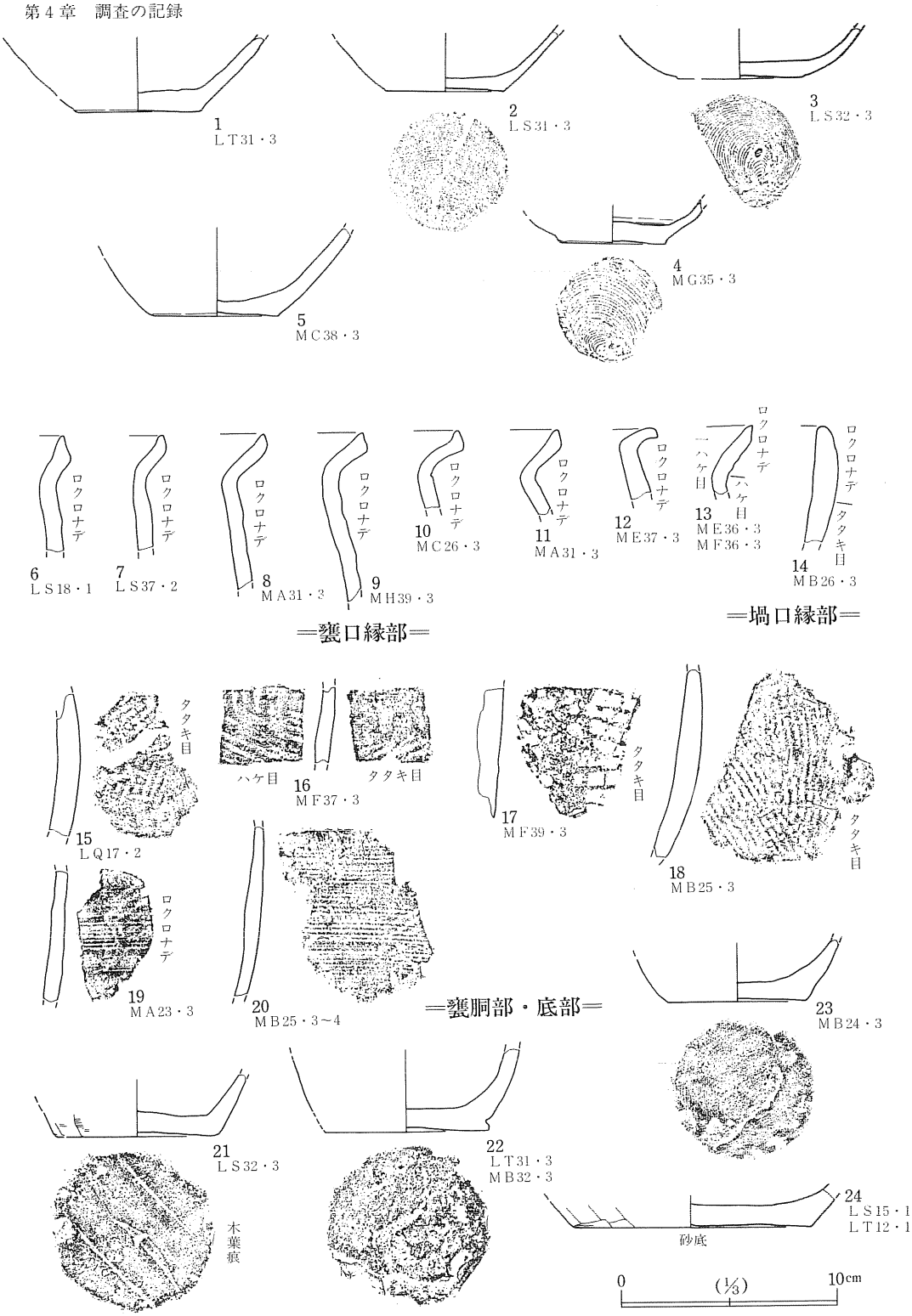
註５）　輸入磁器、施釉陶器、染付け陶磁器の生産地・年代については、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏のご教示によるものである。

註６）　施釉陶器の瀬戸・美濃の大窯産の年代については、瀬戸美濃民俗資料館のご教示を得た。

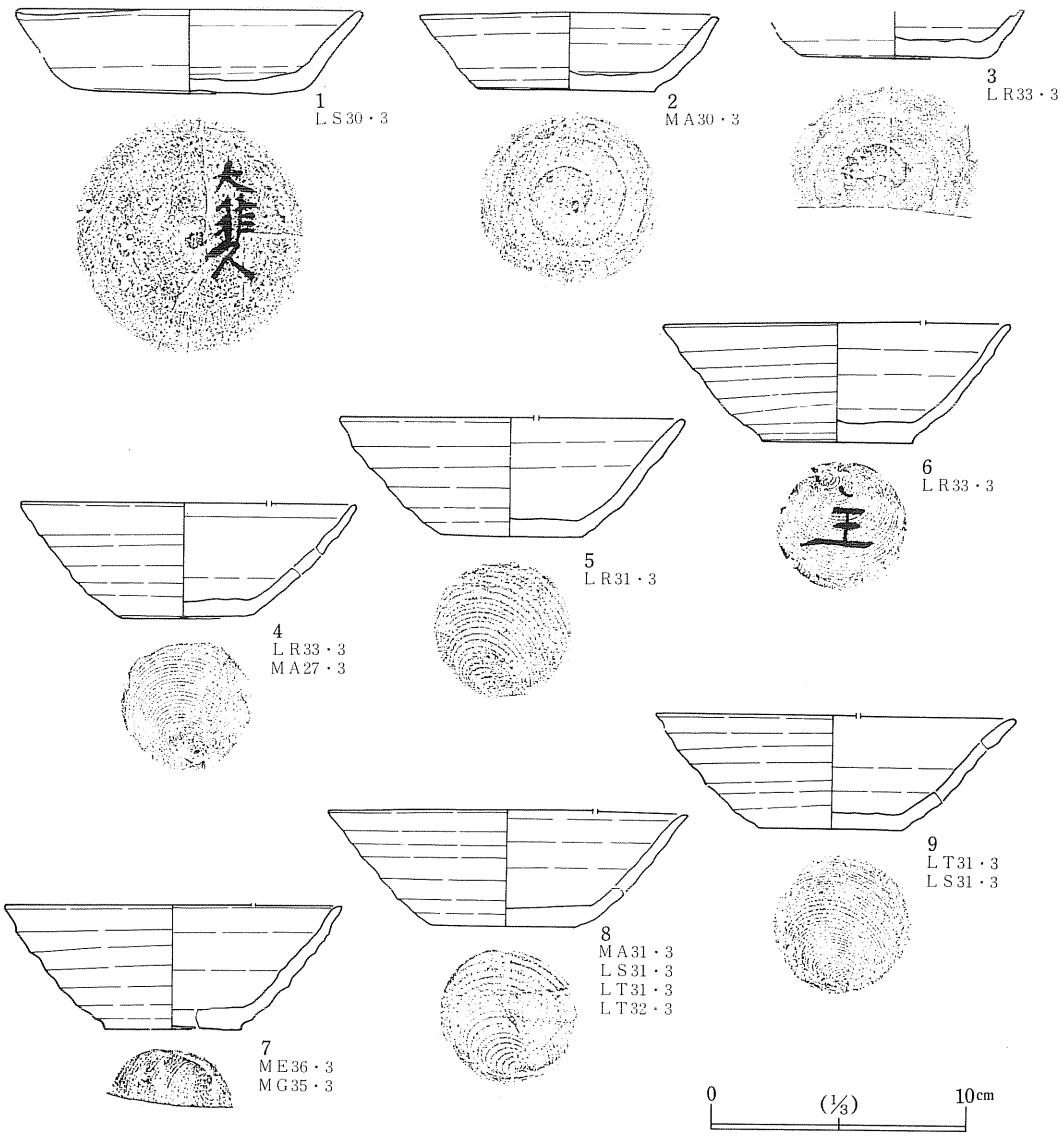



| 番号 | 種　類 | 分類記号 | 外面色調 | 胎土 | 外面観察 | 内面観察 | 口径　底径　高さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器杯 | ＡａＩ | 浅黄橙 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：指ナデ | ミガキ後黒色処理 | (17.4)・(8.2)・(6.2) |
| 4 | 土師器甕 | ＡａＩＩ | にぶい橙 | 粗 | 口縁：ロクロナデ　体部：縦方向のケズリ　底部：回転糸切り | ミガキ後黒色処理 | (15.8)・(8.2)・13.0 |
| 5 | 赤焼土器杯 | ＡｂＩ１ | 浅黄橙 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (12.7)・ 7.6 ・ 3.6 |
| 6 | 赤焼土器杯 | ＡｂＩ２ | 橙 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (14.6)・ 6.2 ・ 5.0 |
| 7 | 赤焼土器杯 | ＡｂＩ２ | 浅黄橙 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | 13.3 ・ 5.0 ・ 5.3 |
| 8 | 赤焼土器杯 | ＡｂＩ２ | 浅黄橙 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | 13.0 ・ 6.0 ・ 5.1 |
| 9 | 赤焼土器杯 | ＡｂＩ３ | 橙 | 粗 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (13.4)・ 6.2 ・ 5.0 |
| 10 | 赤焼土器杯 | ＡｂＩ３ | 橙 | 粗 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (13.4)・ 5.0 ・ 4.3 |

**第22図　遺構外出土遺物－土師器・赤焼土器－**

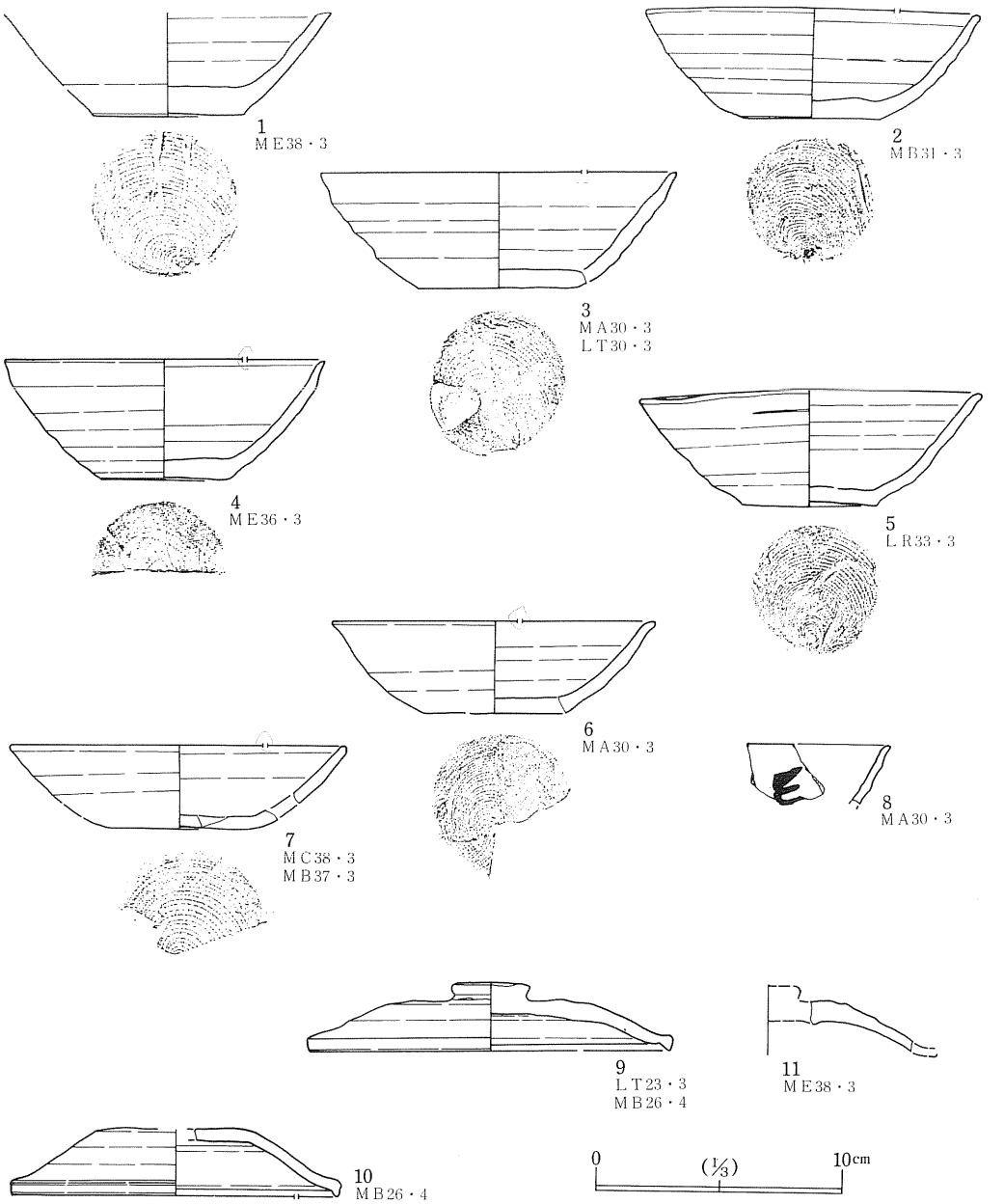



第23図　遺構外出土遺物－赤焼土器－



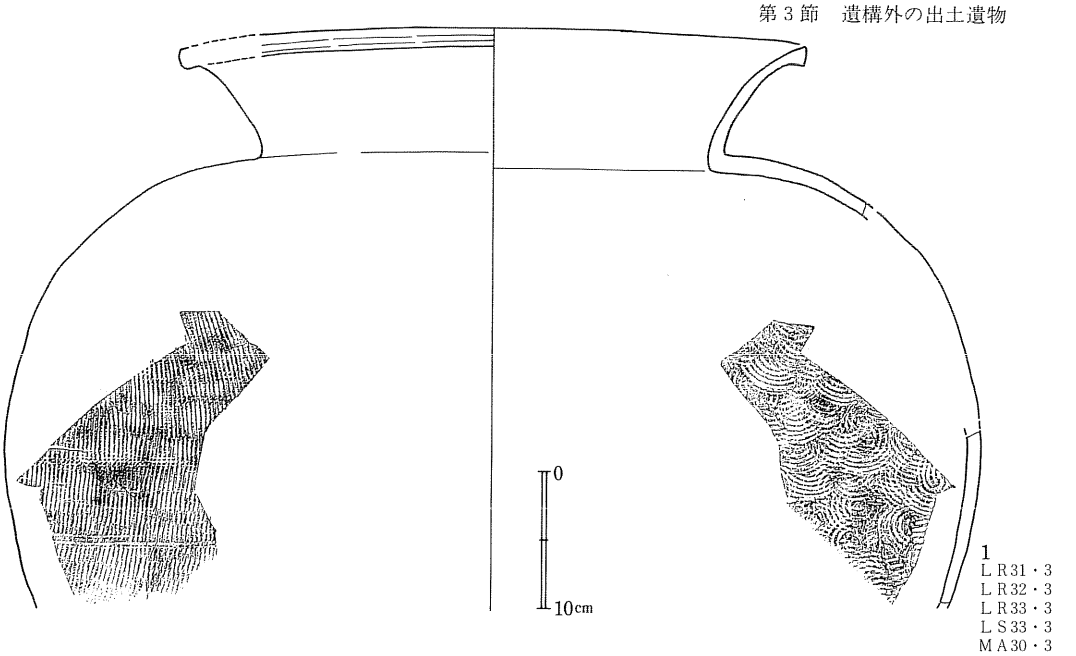

| 番号 | 種類 | 分類記号 | 外面色調 | 胎土 | 外面観察 | 内面観察 | 口径　底径　高さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ１ | 灰白 | 粗 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り | ロクロナデ | 13.9 ・ 9.2 ・3.3 | 墨書あり |
| 2 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ２ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り | ロクロナデ | 12.2 ・ 7.2 ・3.0 | |
| 4 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (13.4)・ 5.3 ・4.5 | |
| 5 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (13.8)・ 5.6 ・4.7 | |
| 6 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | 13.8 ・ 5.9 ・4.8 | 墨書あり「主」 |
| 7 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (13.4)・(5.5)・4.9 | |
| 8 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | 14.4 ・ 5.6 ・4.6 | |
| 9 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (14.3)・ 5.7 ・4.5 | |

**第24図　遺構外出土遺物－須恵器〈杯〉－**

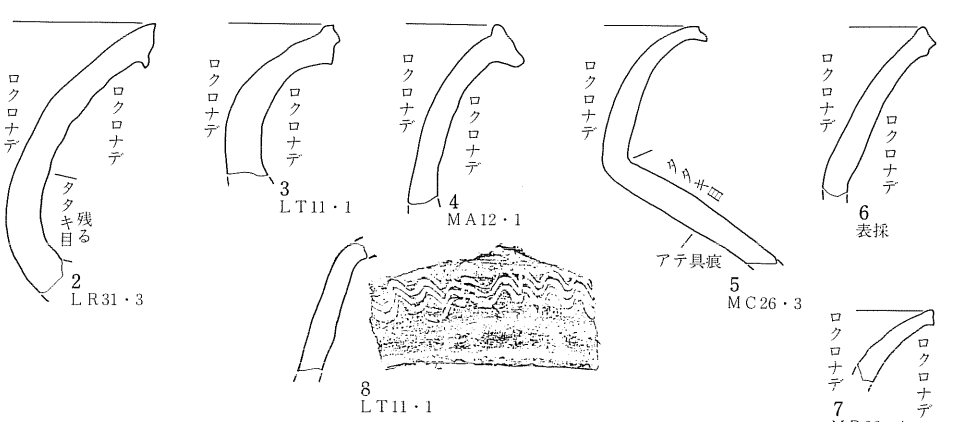



| 番号 | 種類 | 分類記号 | 外面色調 | 胎土 | 外面観察 | 内面観察 | 口径　底径　高さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | 13.7　・5.5・4.5 |
| 3 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | 14.6　・6.2・4.8 |
| 4 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (13.0)・5.4・5.0 |
| 5 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ３ | 灰褐 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | 14.1　・5.6・4.8 |
| 6 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ４ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (13.2　・5.8・3.8 |
| 7 | 須恵器杯 | Ａｃ Ｉ４ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り | ロクロナデ | (14.6)・5.8・3.4 |
| 9 | 須恵器蓋 | Ａｃ Ⅱ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ | ロクロナデ | (15.0)・—・2.8 |

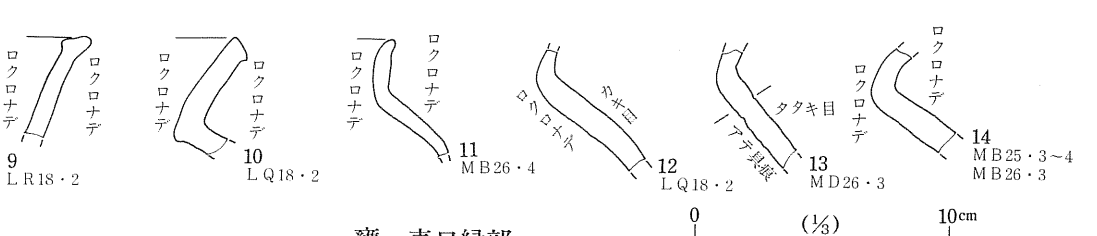
**第25図　遺構外出土遺物－須恵器〈杯・蓋〉－**




| 番号 | 種類 | 分類記号 | 外面色調 | 胎土 | 外面観察 | 内面観察 | 口径　底径　高さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器甕 | ＡｃⅢ | 灰 | 密 | 口縁：ロクロナデ　体部：平行叩き目 | 同心円状あて具痕 | (45.4) ―― (43.0) |



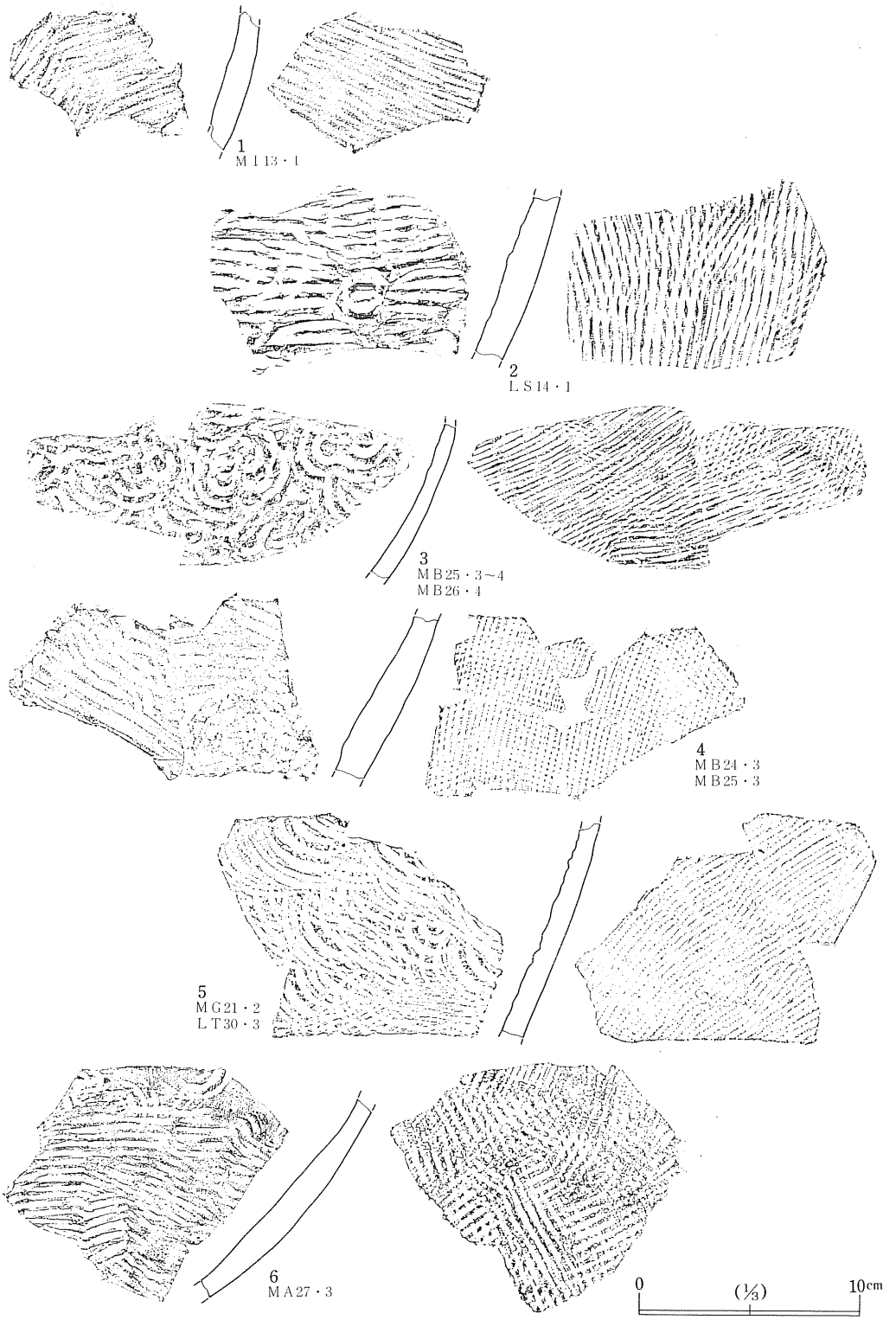

＝甕口縁部＝



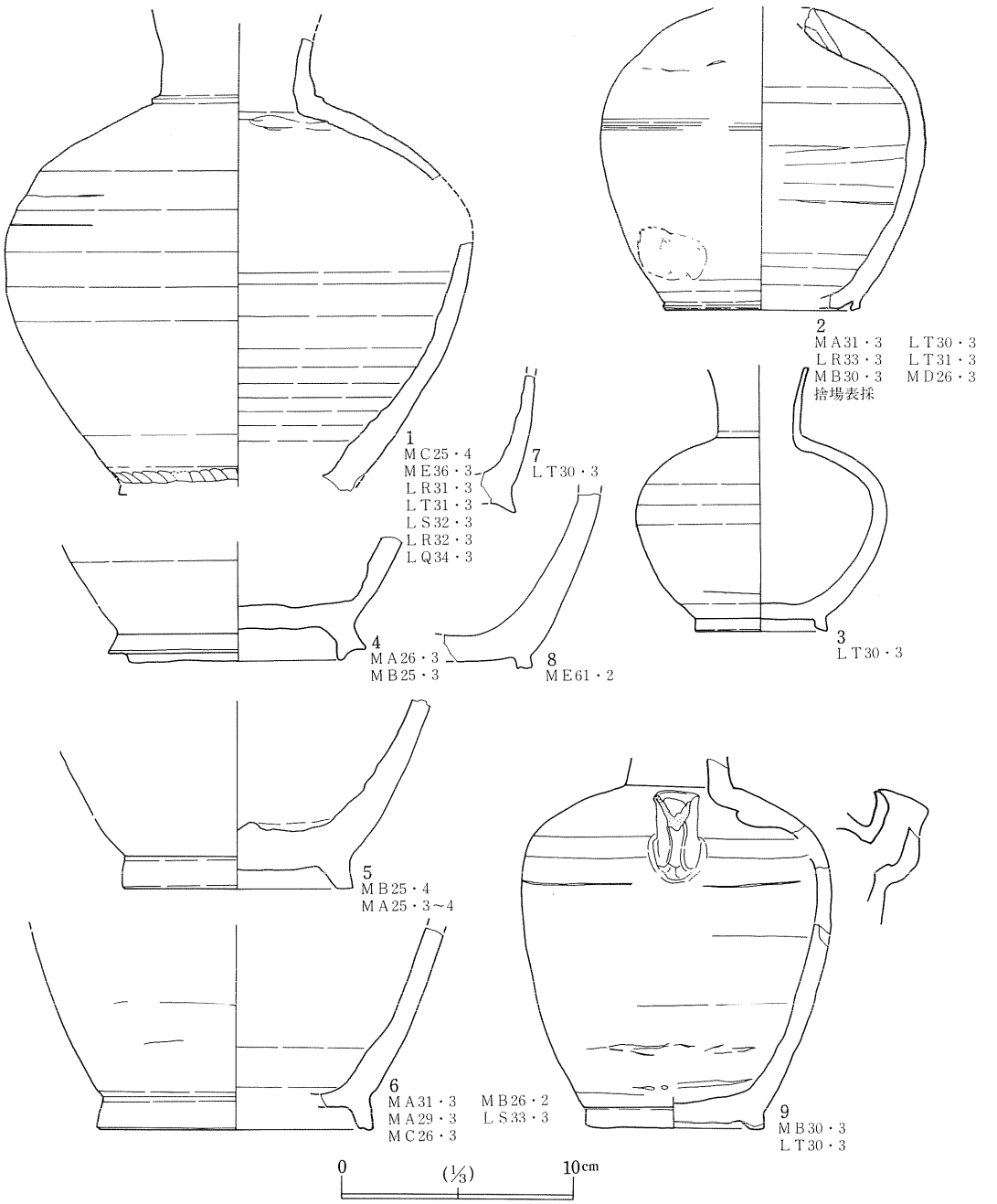

＝甕・壺口縁部＝

**第26図　遺構外出土遺物－須恵器〈甕〉－**

第27図　遺構外出土遺物－須恵器〈甕〉－

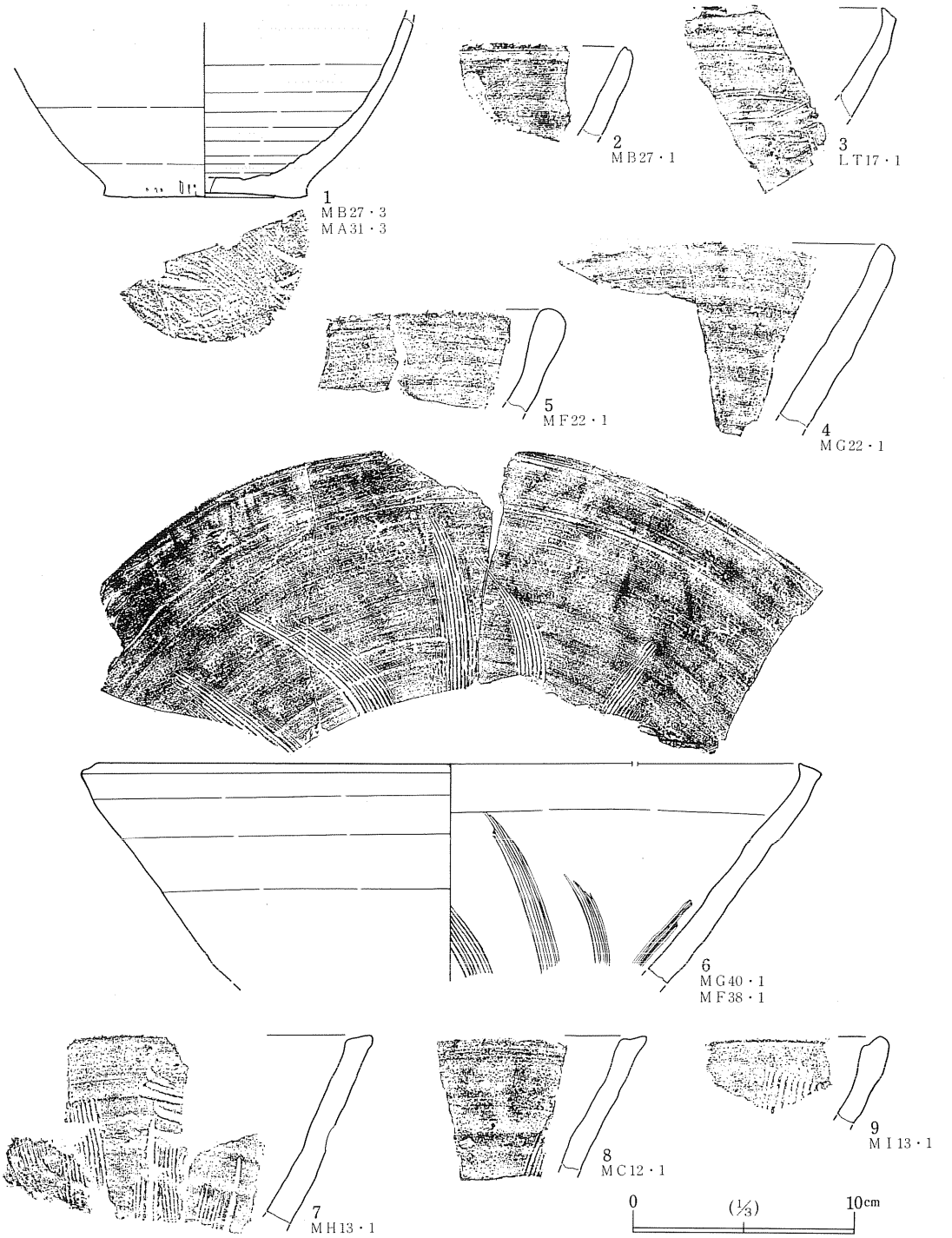



**第28図　遺構外出土遺物－須恵器〈甕〉－**



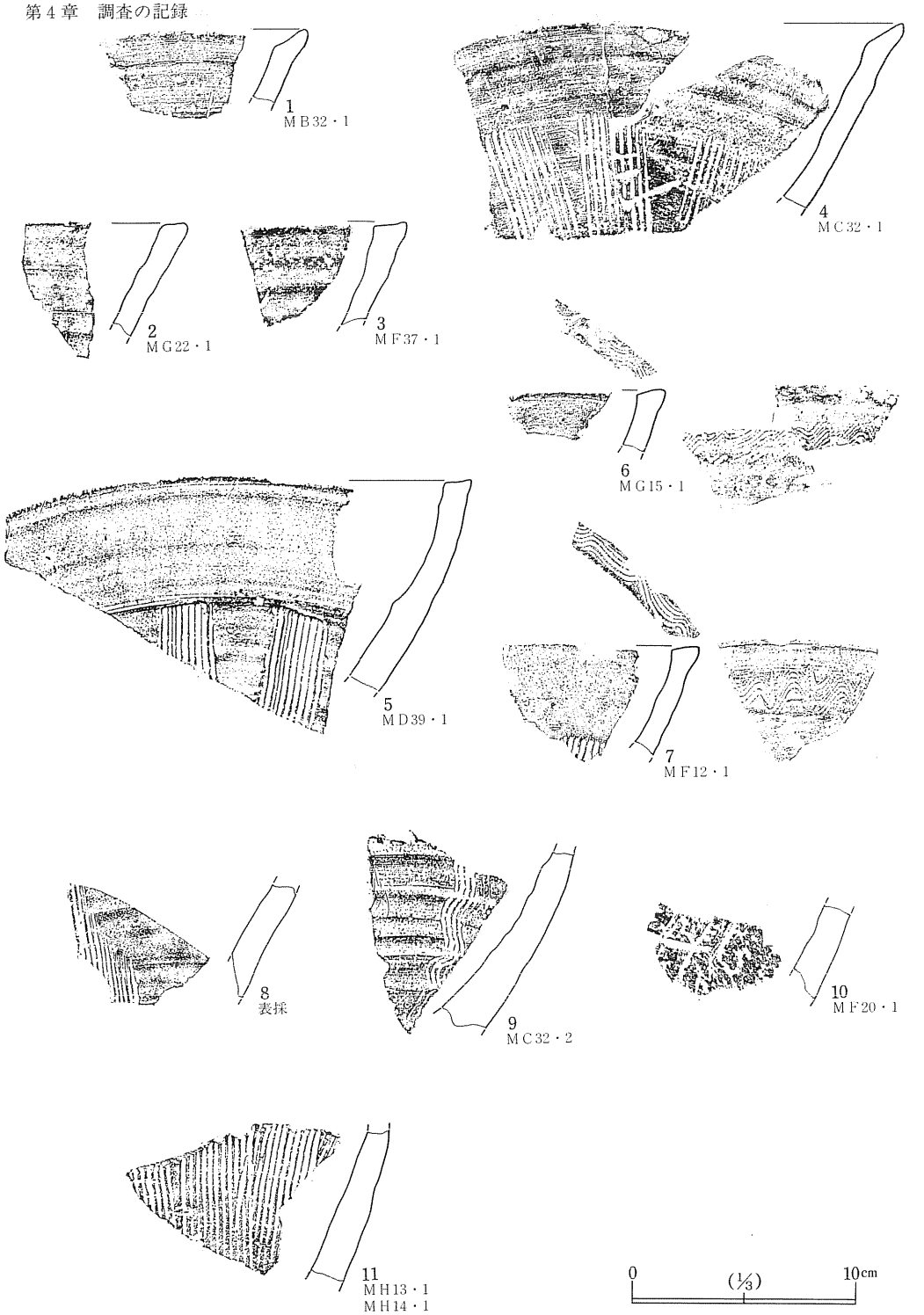

| 番号 | 種類 | 分類記号 | 外面色調 | 胎土 | 外面観察 | 内面観察 | 口径　底径　高さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器壺 | Ａｃ Ⅳ | 灰 | 密 | 口縁：ロクロナデ　体部：ロクロナデ　底部：指ナデ | 口縁・体部：ロクロナデ　底部：指ナデ | ――・――・(21.0) |
| 3 | 須恵器壺 | Ａｃ Ⅳ | 灰 | 密 | 口縁：ロクロナデ　体部：ロクロナデ　底部：糸切り後ナデ | | ――・5.8・(11.5) |
| 9 | 灰釉陶器浄瓶 | Ｂａ | 灰白 | 密 | 体部：ロクロナデ　底部：糸切り周縁ナデ | 体部：ロクロナデ | ――・(7.8)・(16.0) |

**第29図　遺構外出土遺物－須恵器〈壺〉、灰釉陶器〈浄瓶〉－**

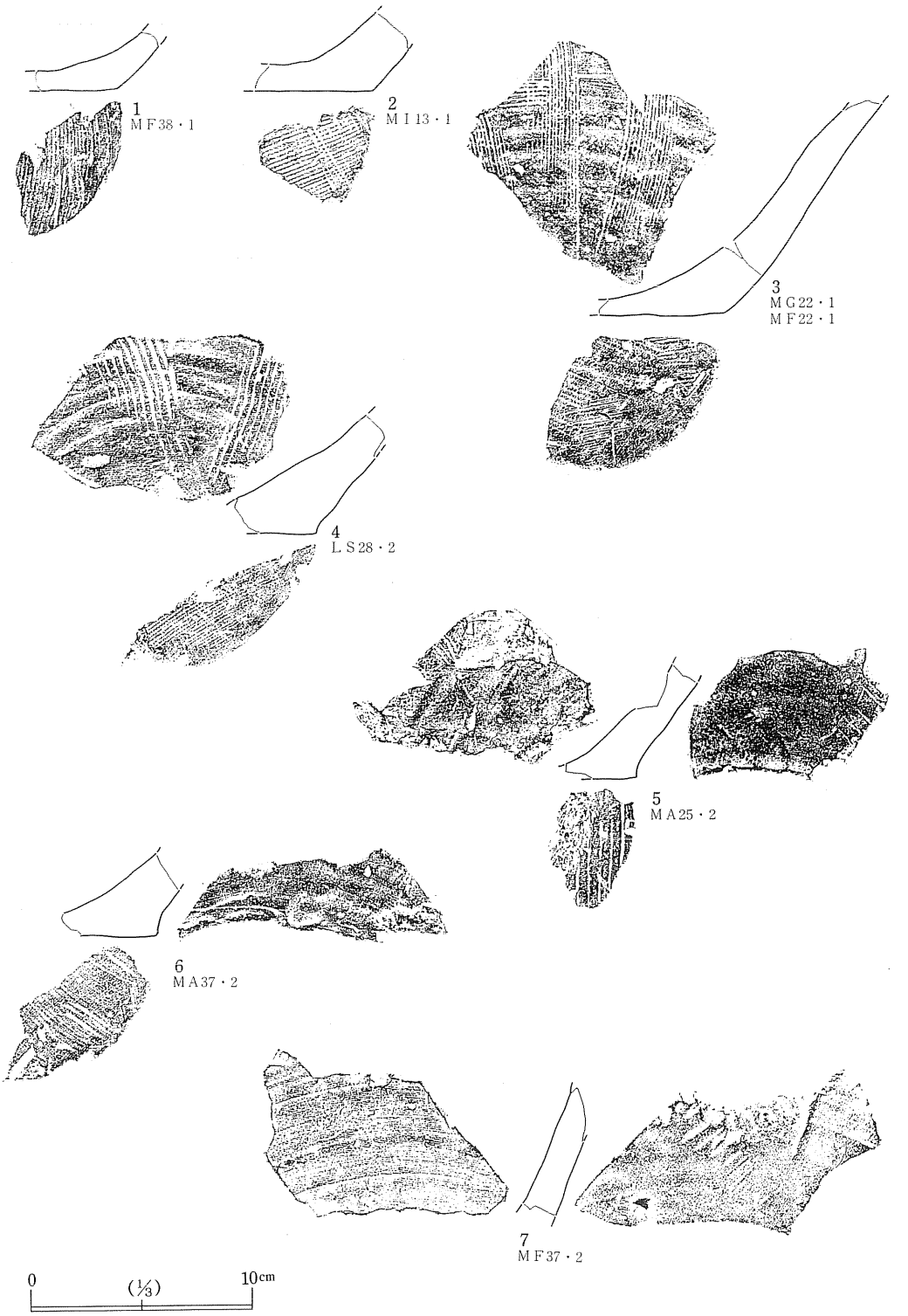



| 番号 | 種類 | 分類記号 | 外面色調 | 胎土 | 外面観察 | 内面観察 | 口径　底径　高さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉢 | ＢｂＩ１ | 灰白 | 密 | 体部：ロクロナデ　底部：静止糸切り | 体部・底部：ロクロナデ | ——・9.2・（8.0） |
| 6 | 擂鉢 | ＢｂＩ２ | 灰 | 密 | 口縁・体部：ロクロナデ | 口縁・体部：ロクロナデ　卸し目幅20mm10条 | 34.0・——・（10.0） |

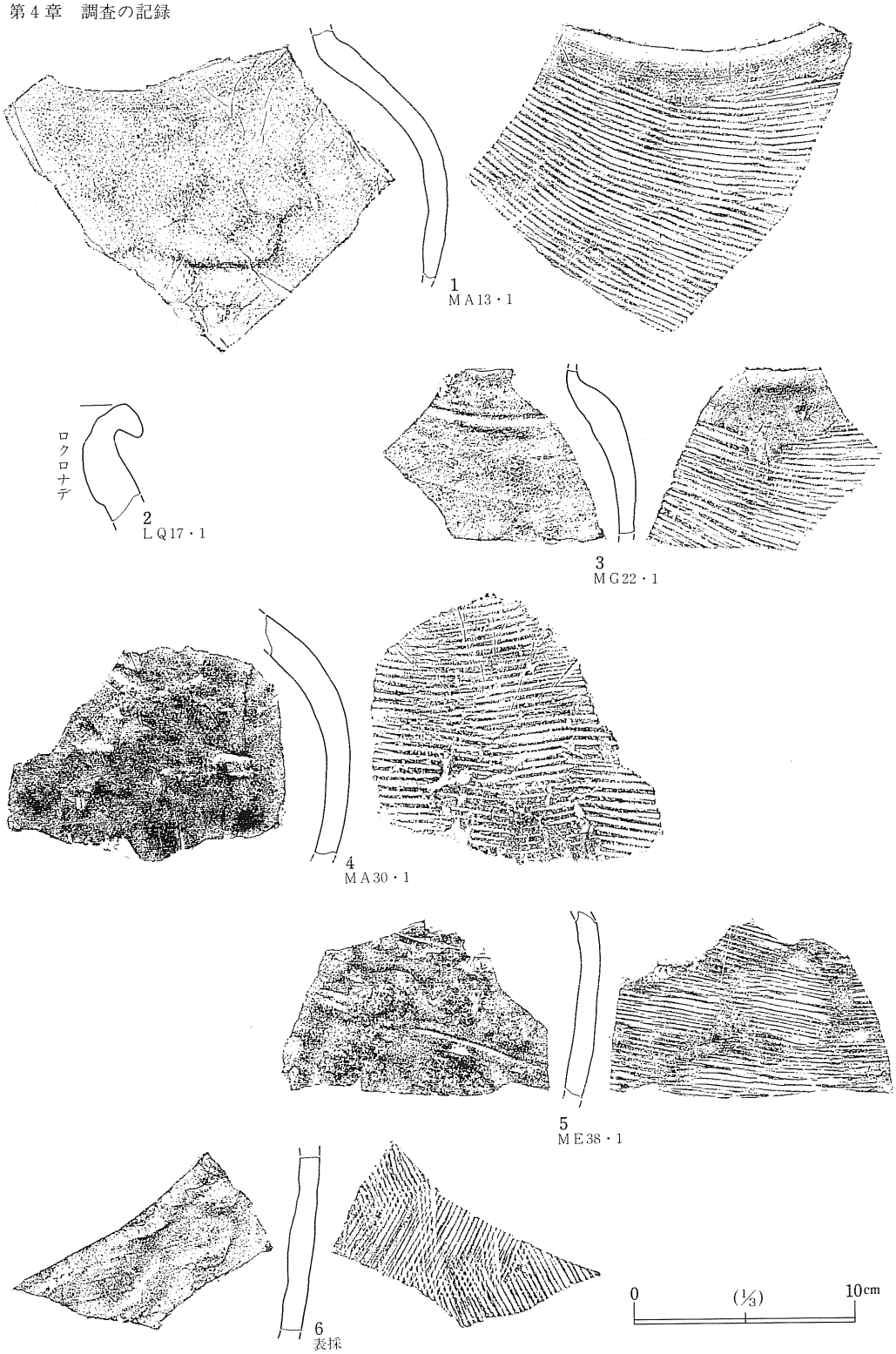
**第30図　遺構外出土遺物－須恵系中世陶器〈鉢・擂鉢〉－**



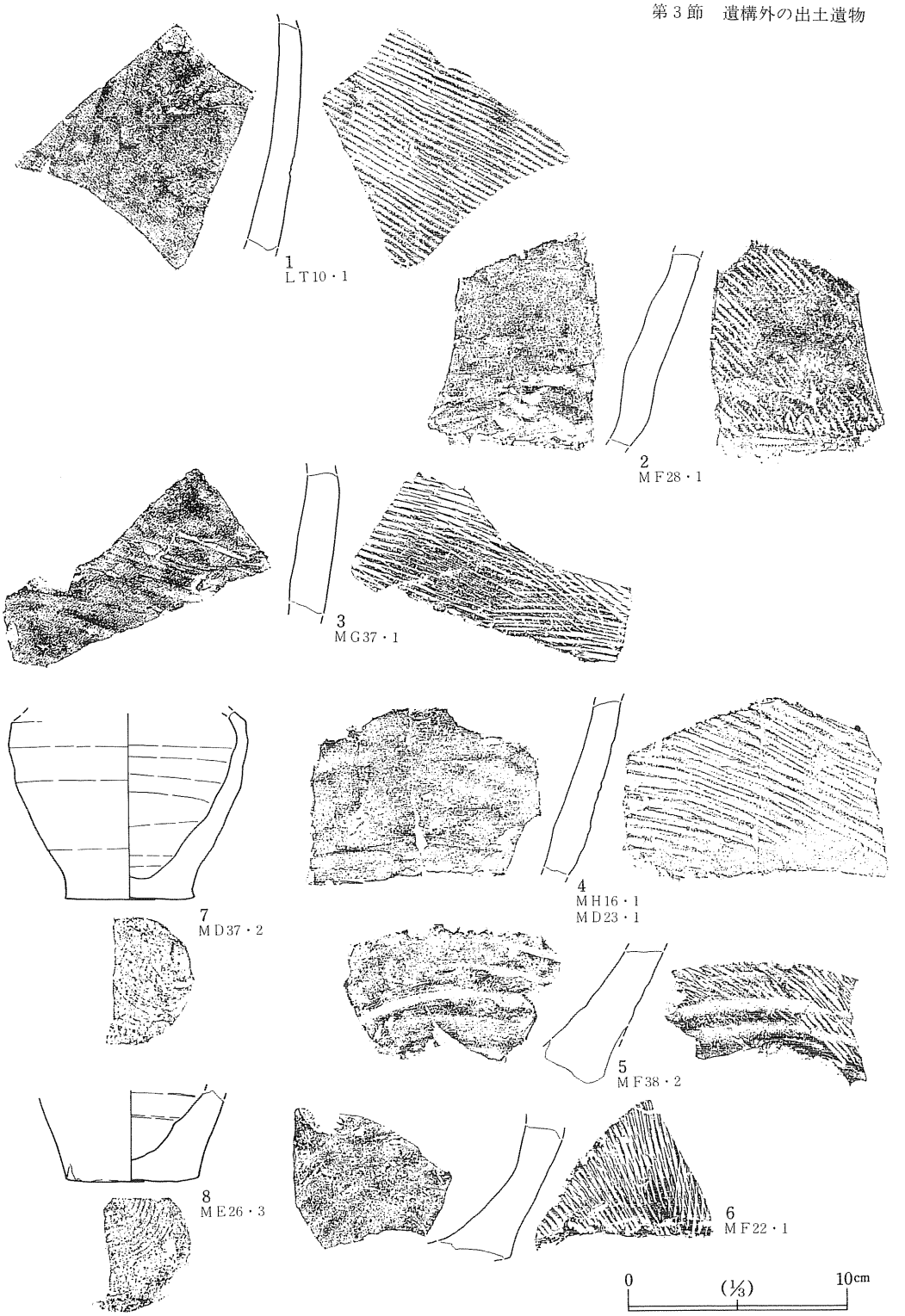

**第31図　遺構外出土遺物－須恵系中世陶器〈擂鉢〉－**



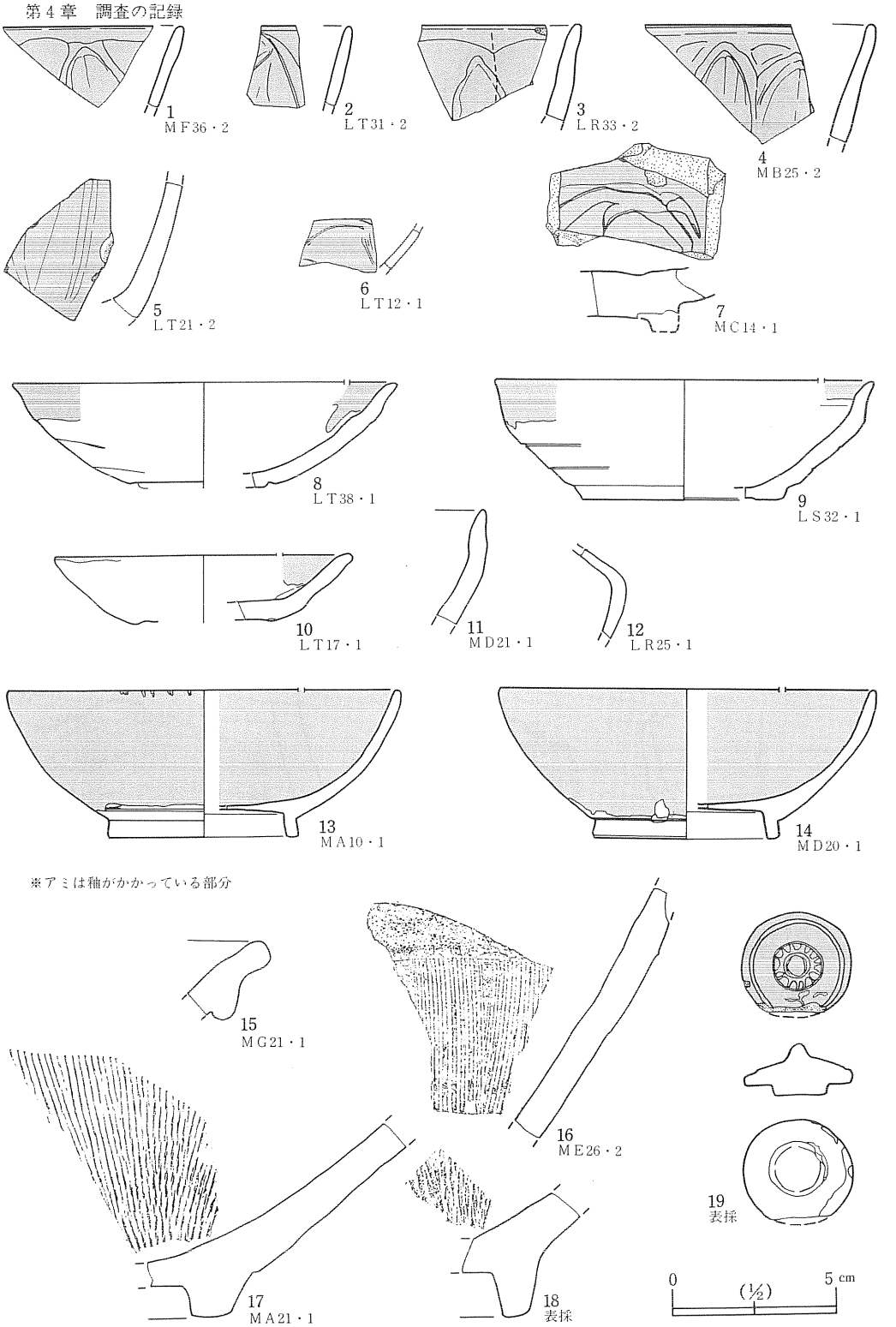

第32図　遺構外出土遺物－須恵系中世陶器〈擂鉢〉、瓦質土製品－



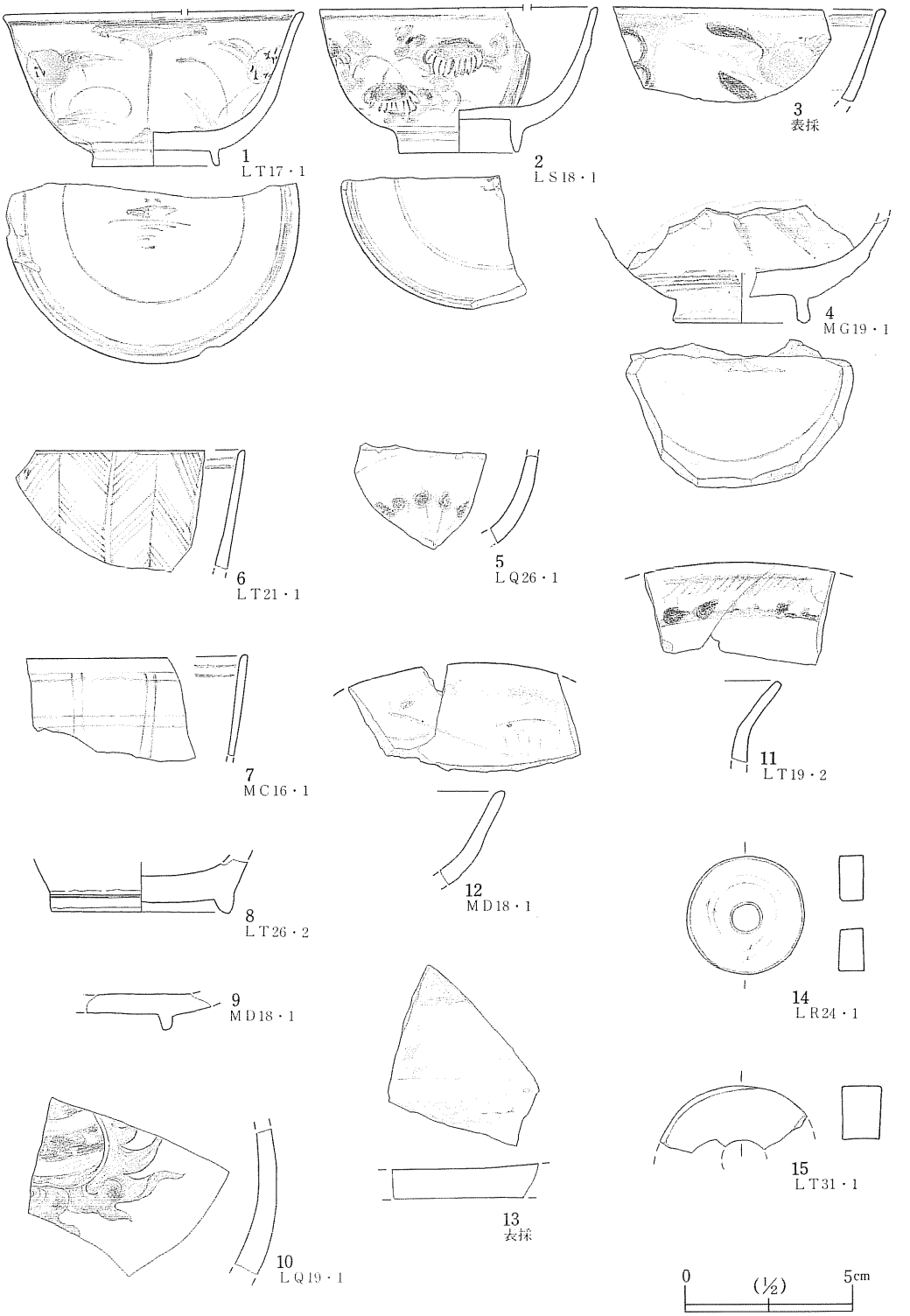

**第33図　遺構外出土遺物ー須恵系中世陶器〈甕・壺〉ー**



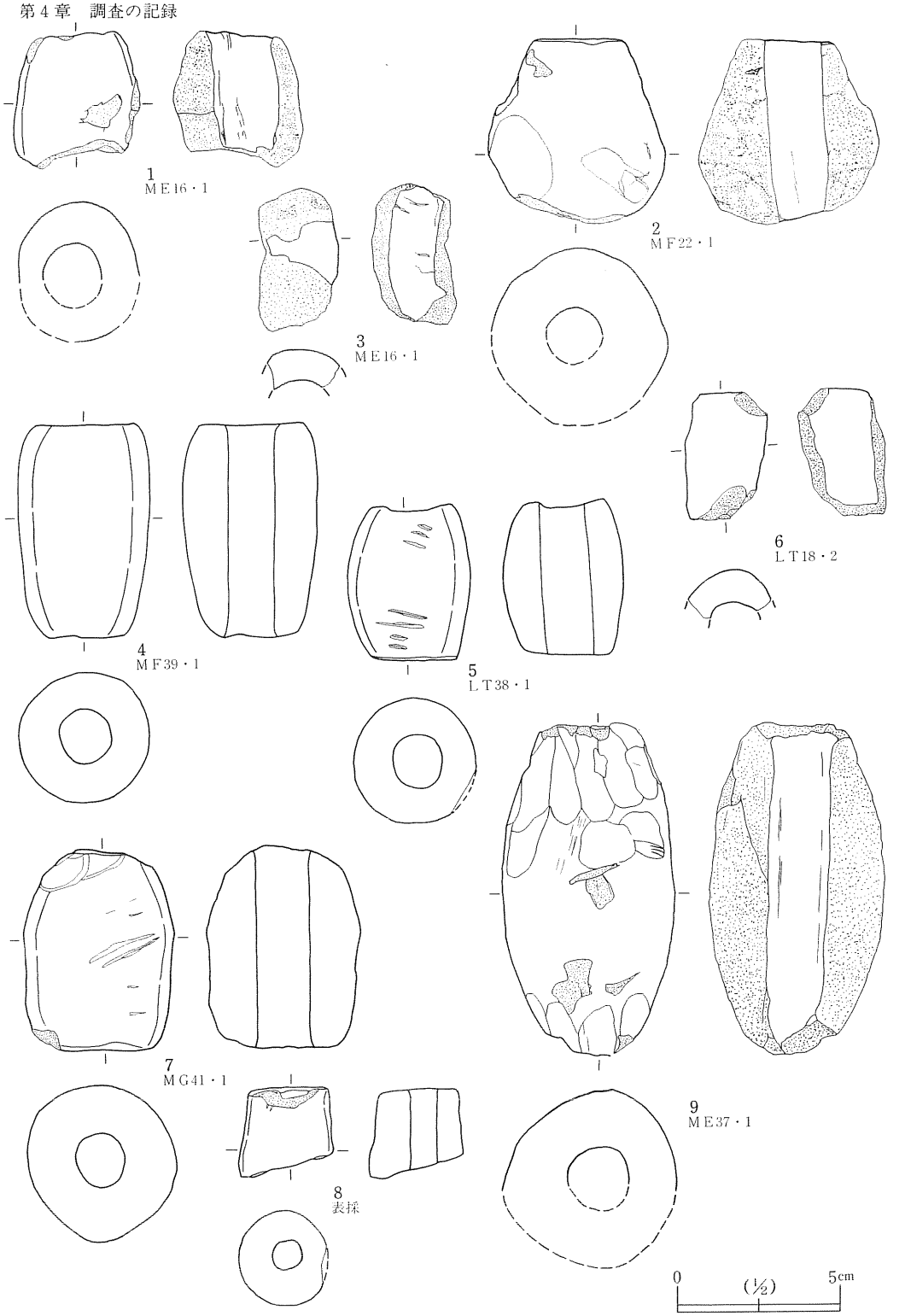

第34図　遺構外出土遺物－須恵系中世陶器〈甕・小壺〉－



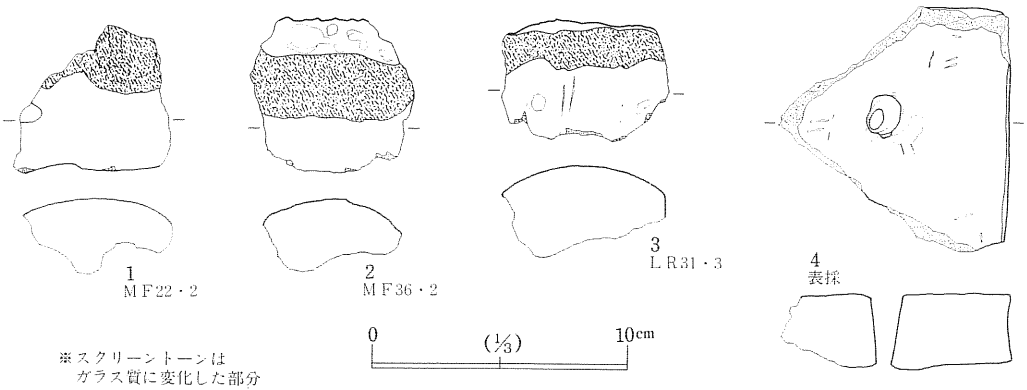

**第35図　遺構外出土遺物－輸入磁器、施釉陶器－**




第36図　遺構外出土遺物－染付け陶磁器－




第37図　遺構外出土遺物－土錘、陶錘－




**第38図　遺構外出土遺物ーふいご羽口、塼ー**

## ［石製品］

＜剝片石器＞―第39図１～12、第40図13～19―

－石鏃－

無茎のものが２点あり、（１）が二等辺三角形を呈し、基部が凹んでいる。やや厚みのある剝片に、両面の側縁から調整加工を施し形を整えている。（２）は表裏に剝離面を残しており、薄い剝片の素材の側縁に、短く連続する調整加工を施して形を作りだしている。（３）は側縁からの調整加工があるが、左右対称でなく未完成品と思われる。

有茎のものが４点あり、（４）は尖基で全体が柳葉形を呈している。厚みのある剝片に両面から細かい丁寧な調整加工を施し形を作りだしている。断面はレンズ状を呈している。他は凸基であるが、形状がわかるのは２点だけで、（５）は二等辺三角形、（６）は左右のバランスを欠いているが、ほぼ二等辺三角形を呈する。いずれも裏面に剝離面を残しているが。側縁からの調整加工で仕上げている。（７）は基部だけである。

－石槍－

（８）は基部が平らで先端が鋭く尖る。縦長の剝片を側縁から丁寧な調整加工を施し仕上げている。中軸に稜をもつ。（９）は凸を呈する基部の破片と思われる。側縁からの加工も丁寧で、断面はレンズ状を呈する。(10)は先端が欠損している。側縁からの加工は粗い。

－石篦－

(11)は刃部が丸い篦状を呈しており、肉厚の剝片の両面から調整加工を施し形を作りだしている。表面がややもりあがっており、中位での断面は凸レンズ状を呈している。

－石匙－

(12)はつまみ部の中心線をとおる長さに対し幅が狭い、いわゆる縦型の石匙である。縦長の剝片の裏面に平坦な剝離面を残し、もりあがって凸を呈する片面に主に調整加工を施している。

調整はつまみ部から先端までおよぶ。裏面の一方にも連続する調整加工痕がある。

(13)は三角形の頂部に近いところの左右をへこませ、撥形にしている。打撃面に対する辺に両面から調整加工を施し、刃部を作りだしている。

(14)は表裏に剝離面を残し、打撃面に対する先端につまみ部を作り出している。一方の側縁に両面から調整を加え、刃部を作り出している。

－その他の剝片石器－

(15)は欠損しており、縦長の剝片の側縁および先端に片側から加工を施している。

(16)は欠損しており、先端に連続する加工がみえる。

(17)はかなり厚手の剝片で形状が円に近い。一部に調整加工が施されている。

(18)・(19)はいずれも剝片で、 連続する加工がわずかにみえる。

＜礫石器＞―第40図20～22―

(20)は磨製石斧で、基部が欠損している。短冊形をしており、刃部は両刃である。

(21)は三角濤形石製品で山形の面は磨られて滑らかであるが、下面は粗い加工が施され凹んでいる。

(22)は石棒の破片と思われる。

※石器の年代について

石鏃など剝片石器は、縄文時代前期以降、石斧など礫石器は、後期以降と推定される。

＜砥石＞―第41図１～10―

大きさ・形状に違いあり、共通する点だけ上げると、次のようになる。

1 細長い長方体を呈し、両端が幅広のものである。四面を使用し、一面にU字状の凹みあるいは線状のするどい刻みをもつ。

2 小形のもので偏平な石の広い両面、左右のせまいところを磨面としている。

3 大きな自然石の上面に磨面が見えるものである。

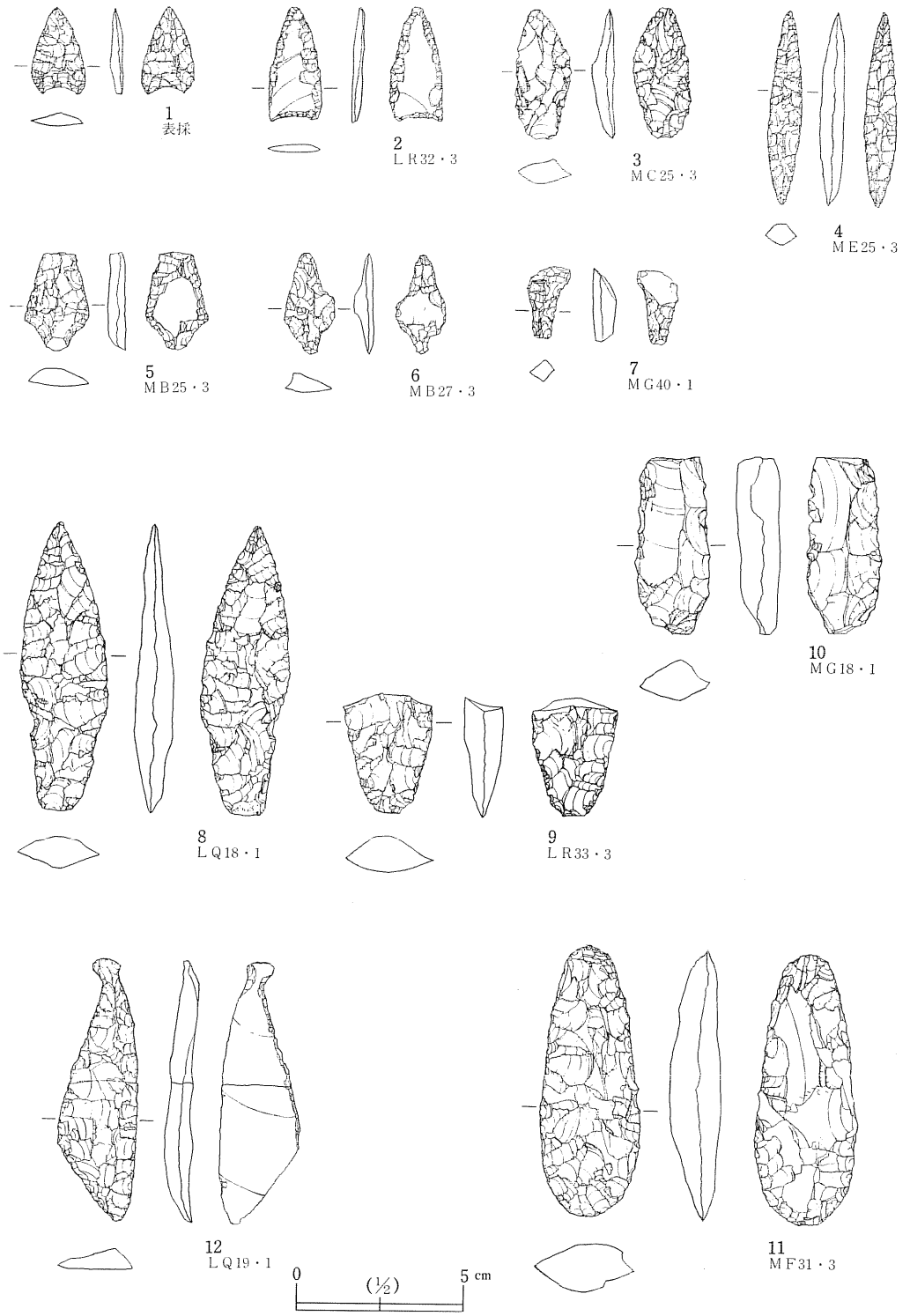
※砥石の年代について

土器との共伴関係から古代から中世のものと考えられる。

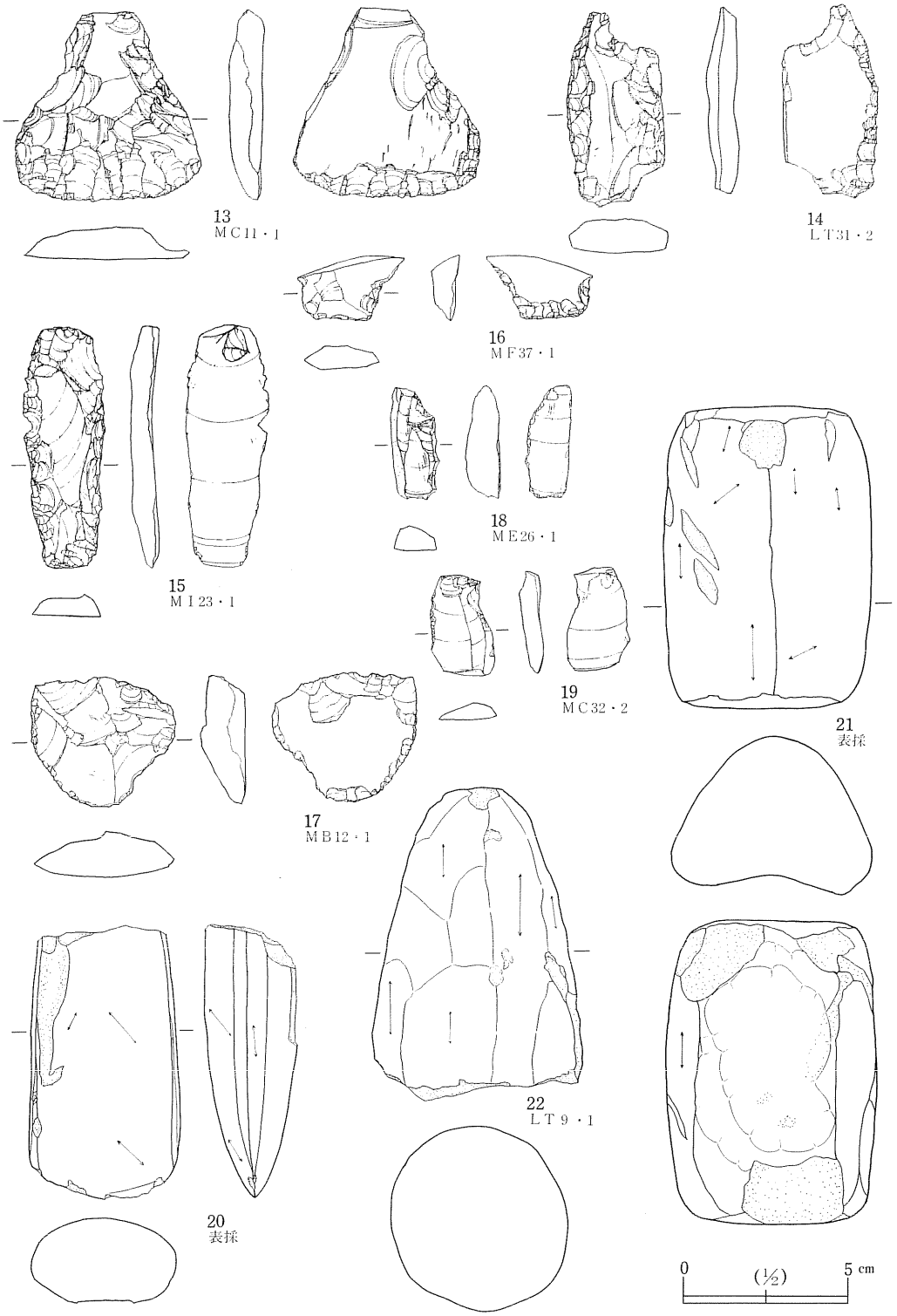
## ［金属製品］

＜銭貨＞―第42図1～13―

丘の頂上部から12点の寛永通宝が出土している。文字の形・背文字の有無でバラツキがある。他に文字不明のものが１点ある。

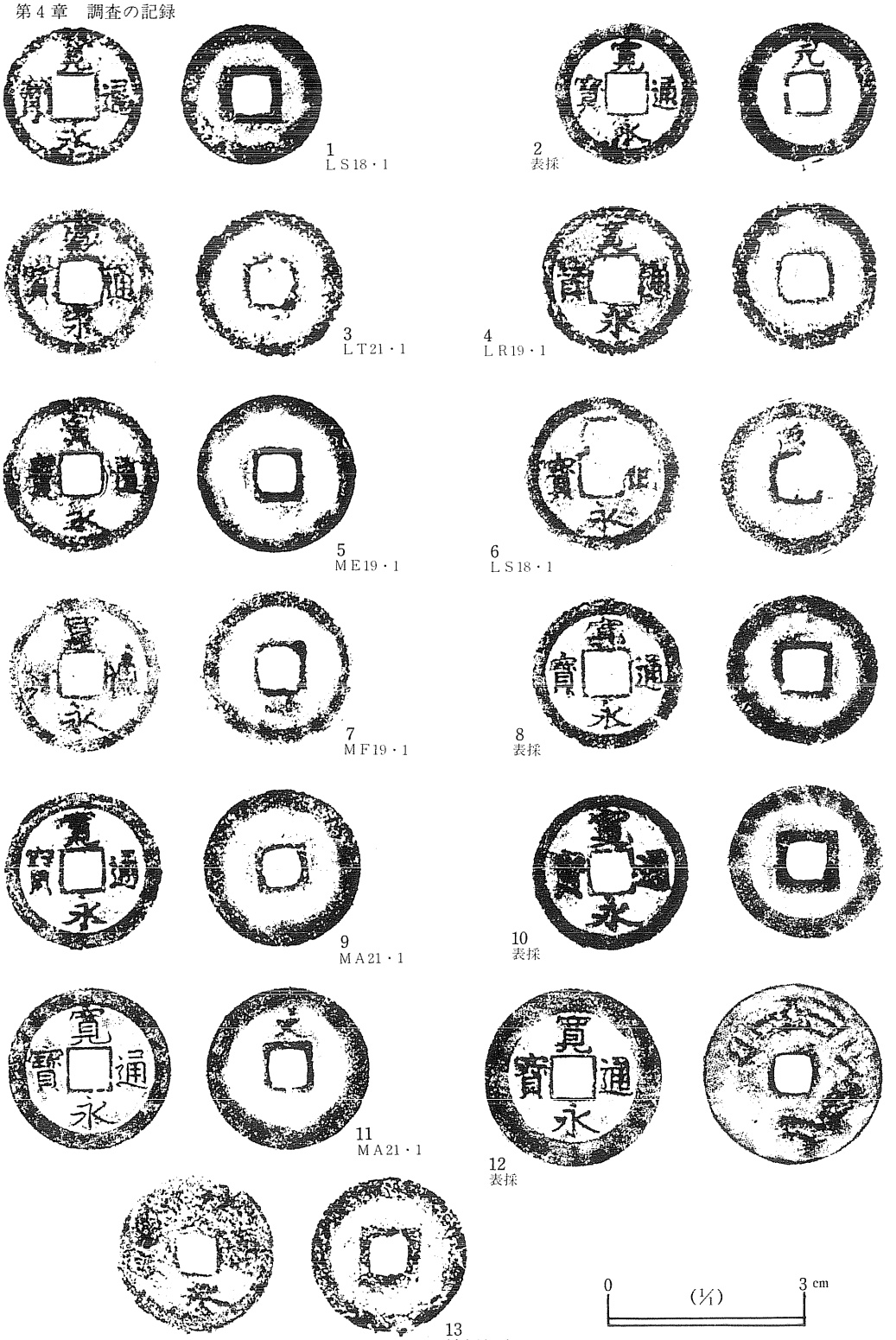



第39図　遺構外出土遺物－石器－




第40図　遺構外出土遺物－石器－

第41図　遺構外出土遺物－砥石－




第42図　遺構外出土遺物－銭貨－

# 第５章　まとめ

## 第１節　遺構の立地と年代

旧神社があった丘の上で確認された土坑については、遺構内からの出土遺物もないことから年代については不明である。丘裾平坦面で確認されたものに第１号井戸跡がある。井戸跡の底面付近から須恵系中世陶器の擂鉢・甕破片が出土していること、木組みが方形隅柱型であることから14～15世紀の年代が考えられる註1)。確認状況から井戸跡の構築は丘裾を削りだした平場造成後である。

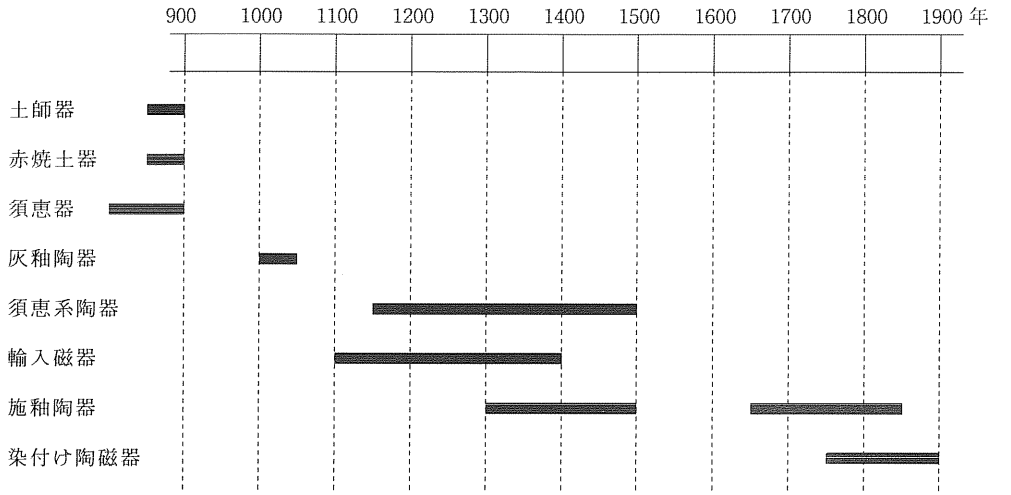
西谷部で検出された３基の井戸跡については、第４号井戸跡底面で回転糸切りで切り離された赤焼土器杯底部が出ていること、第２～４号井戸跡がいずれも円形の素掘り型であることから９世紀後半に年代が推定される。

西谷部をはさんで、東に張り出した平場のつけねで建物跡が検出された。張り出しはほぼ長方形に近く、平場の南辺と建物跡の南辺が方向を同じにしている。西側の畑との段差があることから、なだらかであった中腹斜面を削り出して平場を造成し、建物を立てたものと考えられる。平場の落ち際で須恵系中世陶器がまとまってみつかっていること、第１号井戸跡のある平場とほぼ同じ高さにあることから、建物跡の年代を第１号井戸跡と同じ頃と考え、また土器・陶磁器を次頁の表に示したが、陶磁器のまとまりがみられる14～15世紀に年代を推定したい。

建物の北側、浅い谷の縁辺で井戸跡・土坑が検出されている。第５号井戸跡は円形の素掘り型であり、第２～４号井戸跡同様に９世紀後半と推定される。

そこで第２～４号井戸跡・第５号井戸跡の古代に属すると考えられる遺構のありかたと、東谷部・西谷部の谷底に近いところで多量の赤焼土器および須恵器が出土している状況から推して、谷がほぼ埋もれた段階で平場の造成が行われたものと考えられる。

北側中腹斜面で検出された火葬墓群については、尾根筋にまとまっているが、配列に規則性は見いだせない。ただ中がぬけているので円形を意識しているのかもしれない。全体に上面が削られているが、骨蔵器をともなわない火葬墓群であると判断される。第６・８・11号火葬墓の埋土から併せて４点の銅銭が出土した。第６号火葬墓から政和通宝の文字のあるものが見つかっており、中国からの渡来銭であるとする鑑定を得た註3)。こうした中国の北宋銭が流通したのは、鎌倉時代後半から室町時代中頃にかけてであり、火葬墓の年代もほぼ同じ時期と推定したい註4)。




## 第2節　遺跡の性格

遺物としては縄文時代、古代、中世、近世の遺物が出土しており、複合遺跡としてとらえられる。ただし調査区内で縄文時代の遺構は確認されておらず、当該時代の様子については言及することができない。それと同じように古代についても井戸跡の検出だけであり、調査区内で居住にかかわる遺構は見つかっていない。中世以降の平場造成によって削平された可能性も指摘できるが、西谷部の遺物包含層が調査区外にのびていることから調査区外の西の山腹に遺構群の存在する可能性がある。 西谷部から仏具である浄瓶（県内ではじめての発見例である）が出土しており、寺にかかわる遺構の存在も考えておきたい。近世の陶磁器・貨幣といった遺物は旧金比羅神社周辺から多く見つかっており、神社に供えられたものの可能性が高い。

中世の遺構は、建物跡を中心とする居住区域と火葬墓がまとまった墓地がある。総柱の建物跡の秋田県内での検出例は未だ少ないものの、比内町谷地中館の建物跡と柱間間隔が近似している。付編で復元作業を行い、地侍層の居館とする見解を示しているが、その見解は、建物を立てるための土地造成行っていること、周辺から中世の輸入磁器・国産施釉陶器の出ていることからも裏付けられる。墓地については、その占地状況から居館との関係が深いといえる。

待入Ⅲ遺跡の性格を考える上で、地理的要件も加味する必要があろう。遺跡のすぐ西に高岡館が、さらに北には片田館があり、その間をつなぐ位置にある。しかも下を流れる馬踏川がかつては遺跡近くでもっとも川幅を広げていたと推測され、水上交通の要衝地として物資の流通にかかわっていた可能性も指摘できる註5)。

最後に、これまで県内各地で多くの中世遺跡が確認されているが、ここで居館と推定される

建物跡が検出されたことで、秋田県の中世社会の様相を一歩ふみこんで想定できるものと考えられる。

註１）　木組み井戸については、鎌倉考古学研究所の調査から、方形横桟支柱型が鎌倉時代、方形隅柱型が室町時代とする変遷が示されている。

『掘り出された鎌倉』鎌倉考古学研究所　1981年

註２）　秋田市下夕野遺跡では51基検出された井戸のうち45基が素掘り井戸であり、中世の方形隅柱の木組み井戸より古いという見識をよせている。

『下夕野遺跡』秋田市教育委員会　1979年

註３）　大西　良彦氏の鑑定による。

註４）　『図説　日本の貨幣Ⅰ原始・古代・中世』東洋経済新報社－1972年－

秋田市後城遺跡では骨蔵器を伴わず、掘り込みをもつ土壙墓が20基検出されており、大部分の掘り込みから木炭・焼土に混じって骨片が見つかっていることで、火葬墓と考えられる。陶磁器および中国北宋銭がでていることから14世紀～15世紀に年代を推定している。

註５）　船着き場があったという伝がある。

# —付編—
# 待入Ⅲ遺跡の掘立柱建物跡について

五十嵐典彦

掘立柱建物跡の実測平面図は各柱穴が整然と配列されている様子が見事に描き出されている。Ｙ通りの各柱穴は完全に揃い、Ｘ通りも$Y_2$～$Y_7$までは完全に揃っている。ただ$Y_0$～$Y_1$のＸ通りの柱穴のうちいくつかは通り心を半分ずつずれている。これは施工誤差によるものではなく意図的にずらしたと考えられる（後補の可能性もある）。なお柱及び床束はすべて角柱であり、柱穴の大きさもほぼ揃っている。

各通りの基準寸法は、Ｘ軸が平均3.63尺、Ｙ軸が平均5.67尺である。このことからＸ軸は半間毎にならんでいることがわかる。つまり柱間基準寸法は7.3尺前後である。一方Ｙ軸は柱穴毎を一間と見なすか半間と見なすかが検討を要するところである。前者とすれば柱間基準寸法が5.7尺前後で、中世の柱間としては少し狭い。また後者とすると柱間基準寸法が11.3尺強になり、柱間としては明らかに広すぎる。室町時代大同年間に立てられた古井家住宅のように10.65尺の柱間の例もあるから一概には言えないが、中世以降の住宅は７尺を上限に減少するのが一般的であるから、当遺跡の場合は柱穴毎を一間とみなした方が妥当であろう。

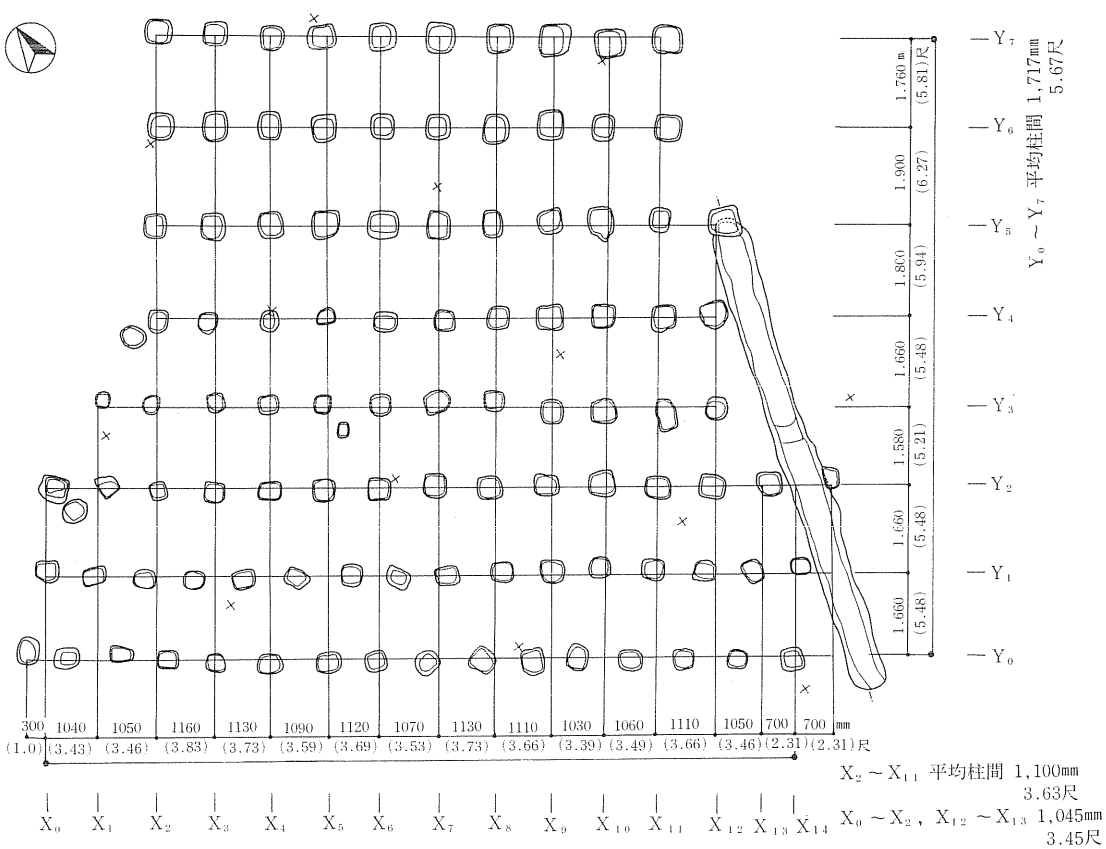
次にこの掘立柱建物跡の形式と間取りの復元を推定してみよう。当遺跡の柱穴列から判明することは、土間を有しないということである。ということは農家でないことを示している。遺跡の立地場所などから推定すると、地侍層の居館と考えられる。この遺構の年代については出土遺物等から推定するのが妥当であろうが、あえて私見を言えば、秋田県の中世の館跡は室町時代後期から戦国時代にかけてが大半を占めると考えていることから、この掘立柱建物跡もそのころの時代のものと考えたい。

以上のことを前提として推定復元すると、建物の形式・間取りは各種想定できるが、そのうち形式と間取りを一例ずつのみ図示しておく。中世の地方豪族の住宅に関する遺構の類はほとんど無く、史料も少ない。確実なものは皆無に近い。少ない史料から類推するしかないが、復元に当たってよりどころになった史料を上げておく。「法然上人絵伝」は14世紀初頭に描かれたものである。美作国の押領使漆間時国の屋敷であり、主殿に中門廊が張り出した形式である。萱葺の母屋の四方に庇を巡らしている。部屋は畳を敷きつめ、建具は蔀・遣戸・障子・襖が見られる。柱は石場立である。「蒙古襲来絵詞」の秋田城介泰盛邸は13世紀の武士住宅を示している。畳は部屋の周囲に置畳にして、建具は蔀・遣戸が見られる。「一遍上人絵伝」は13世紀の地方武士の居館を描いている。その中で、信州佐久郡の大井太郎の屋敷は、母屋の前面に取り付けられた庇がそのまま横にのびて短い中門を成している。屋根は板葺である。「町田家本洛中洛外図屏風」のうち細川管領邸なども、主殿は同種の建物として参考になる。

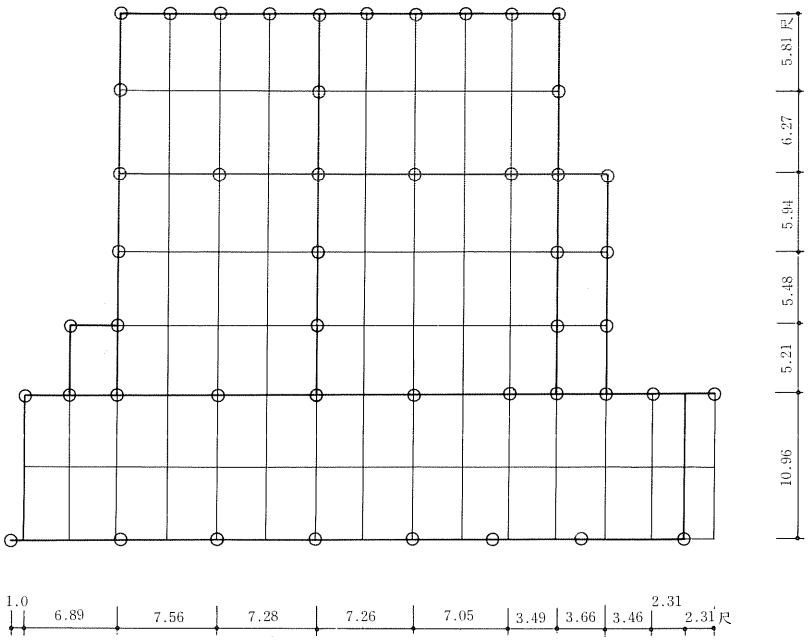
これらの絵は外観を伝えるだけで、間取りはわからない。間取りについては平内政信が慶長13年に書いた『匠明』のうち殿屋集の「昔六間七間の主殿之図」が一応の参考になる。この図に類似した平面をもつ遺構として園城寺光浄院客殿（慶長６年）があり、また同様の形態をもつ建物として園城寺勧学院客殿（慶長５年）がある。さらに寛正年間の地侍屋敷の間取りを書いた「備中国新見庄地頭方政所指図」も参考になる。

当遺跡の掘立柱建物跡の復元はこれらの少ない史料や遺構を参考にしたものであり、推定の域を出るものではない。しかし、この遺構が用途は明らかでないにしても、接客部を備えた中世の主殿の形式を想定させうる住宅であろうことからすると、この遺跡の価値は決して低くないし、今後詳細な検討と分析を必要とする。

最後に復元間取りについて要点のみ記しておく。$Y_0$～$Y_2$通りと$X_0$～$X_{14}$通りの空間は柱穴の位置から考えて、庇形式の広縁で、その東端部は中門風の玄関と考えられる。$X_{11}$～$X_{12}$と$Y_2$～$Y_5$の張り出しは縁と考えられるが、あるいは押板形式の座敷飾りであった可能性もある。母屋はとりあえず単純な田ノ字形に分割したが、先述したように多様な間取りが考えられる。いずれにしても南側前半部は接客を兼ねた主室で、北側後半部は寝床などの私室であろう。

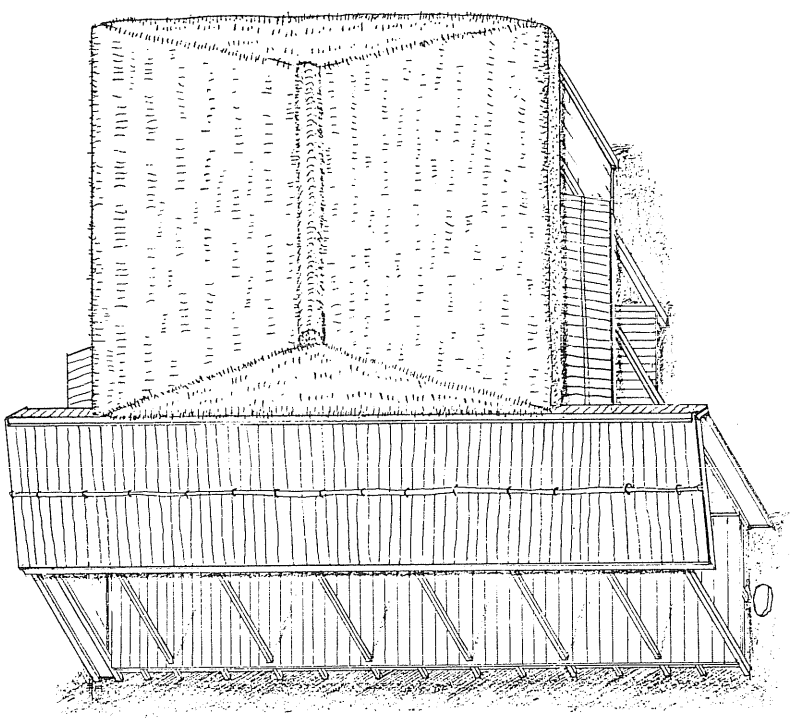



柱　間　寸　法




待入Ⅲ遺跡掘立柱建物推定復元平面図

0　10m



待入Ⅲ遺跡掘立柱建物推定復元図

遺 跡 遠 景(東→)

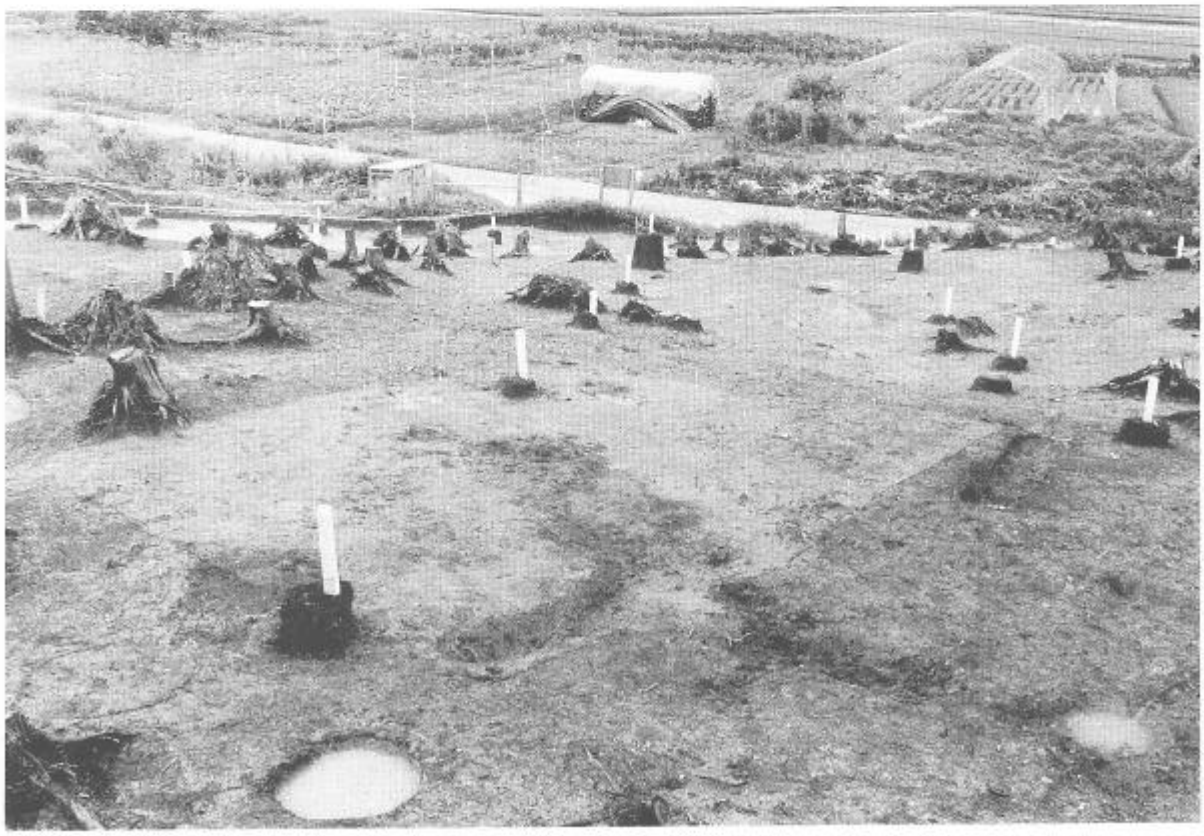
遺 跡 遠 景(北→)

図版2

丘中腹から中央平坦部調査前の状況(南→)

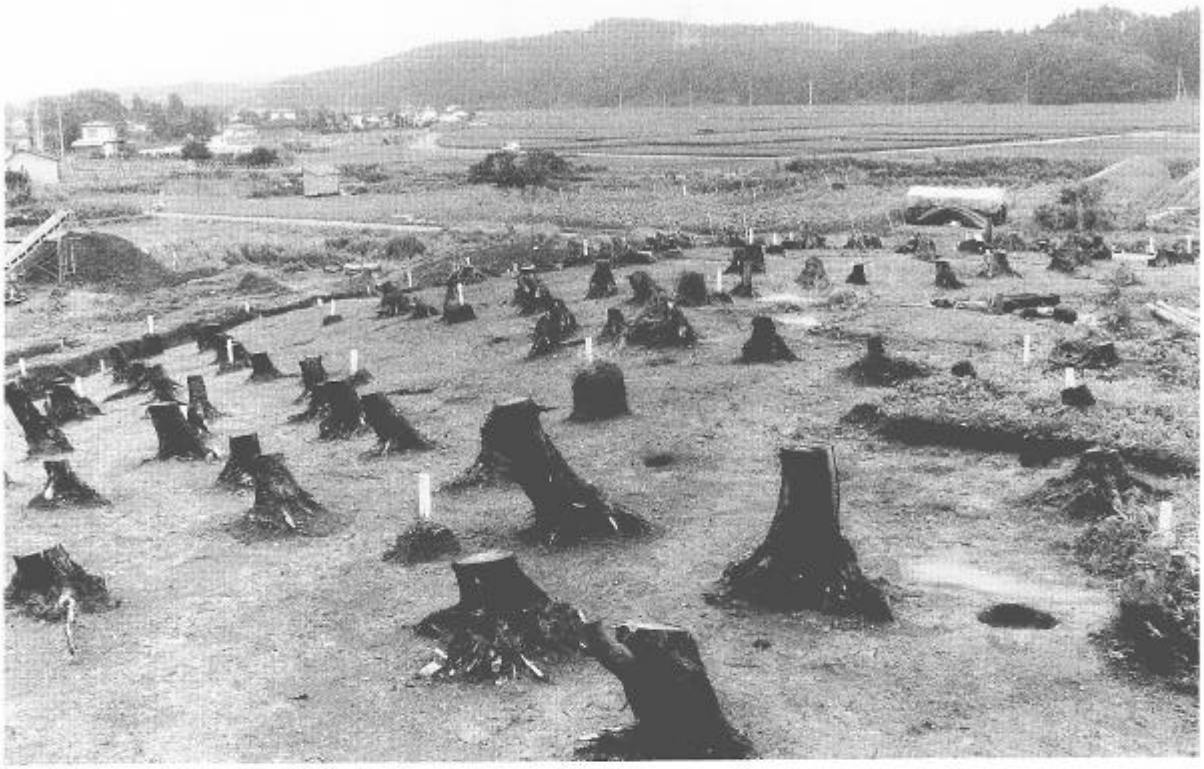
丘裾北側および谷部調査前の状況(西→)

丘頂部調査状況(西→)

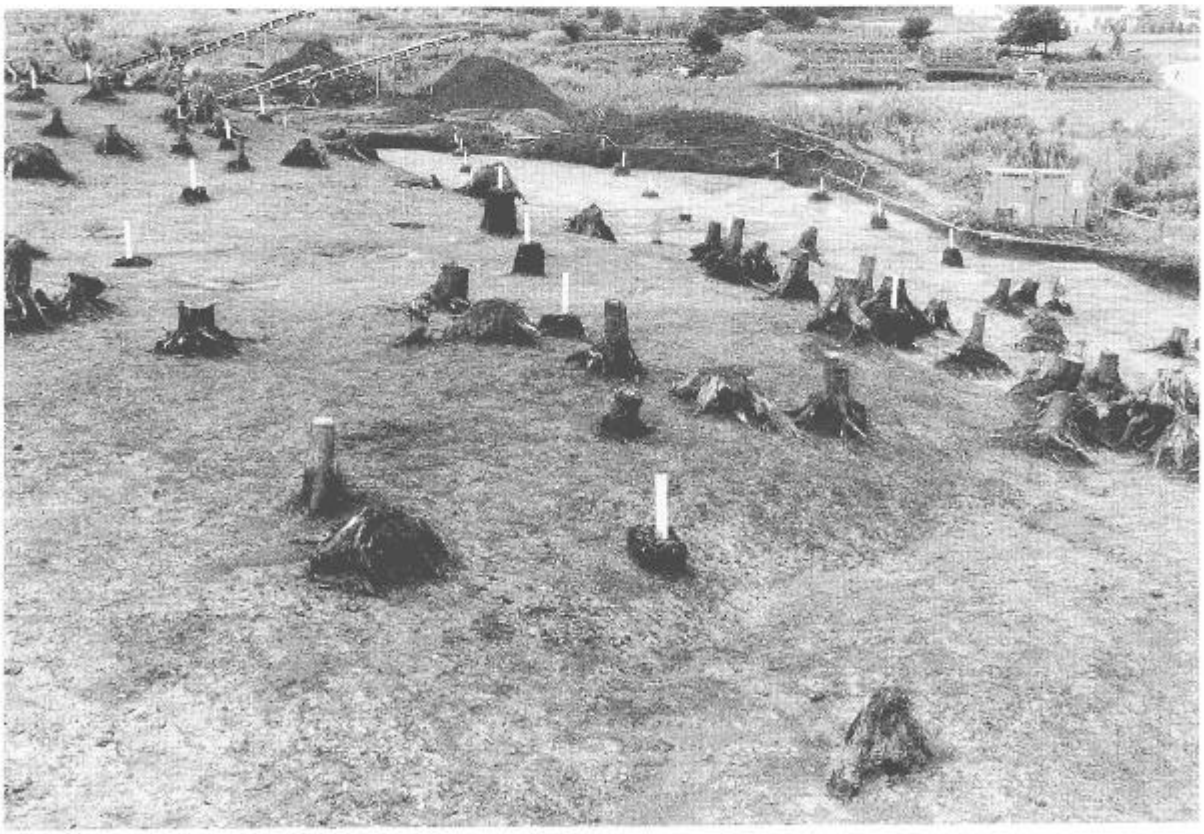


丘中腹部東側調査状況(西→)

図版4



丘頂部調査状況(南西→)



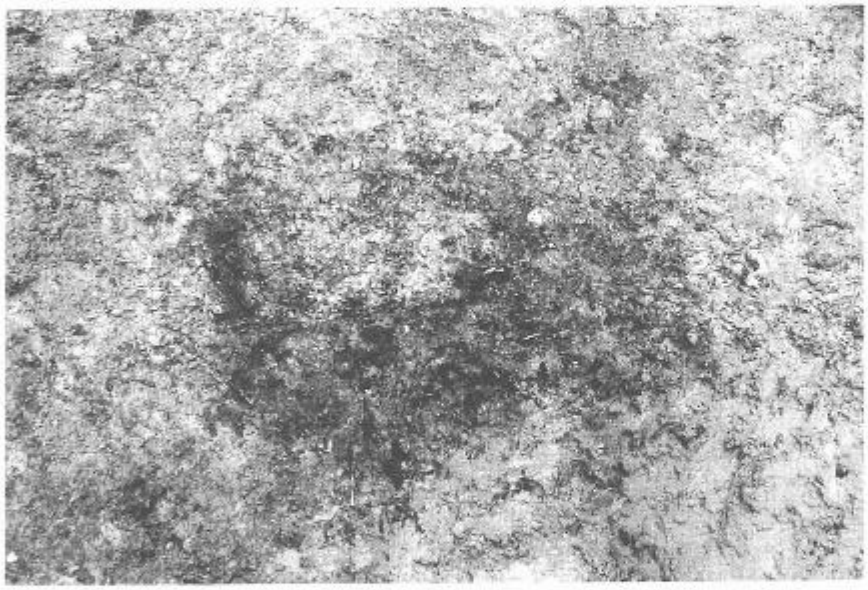
丘裾部調査状況(南→)

丘中腹から谷部調査状況(南→)

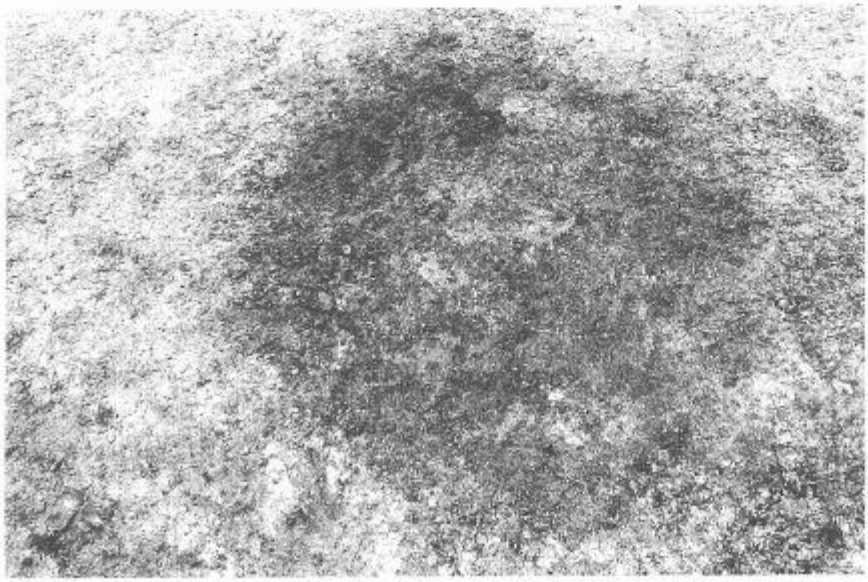
丘中腹部北側調査状況(西→)

図版6

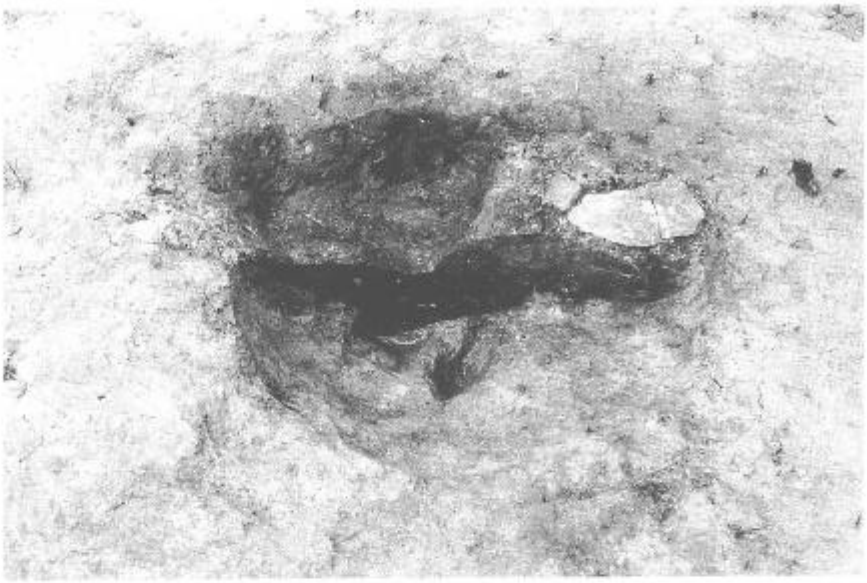
第1号火葬墓
確認状況(西→)



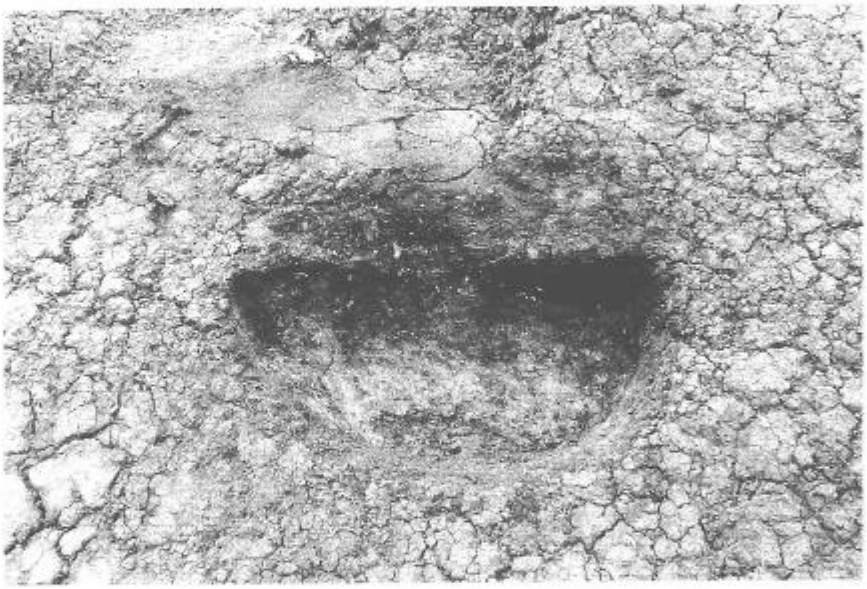
第2号火葬墓
確認状況(西→)



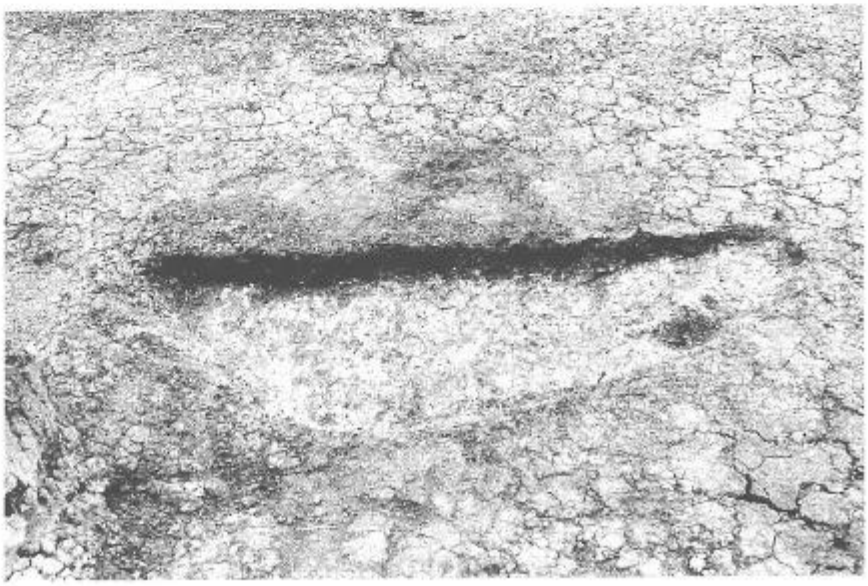
第3号火葬墓
確認状況(西→)



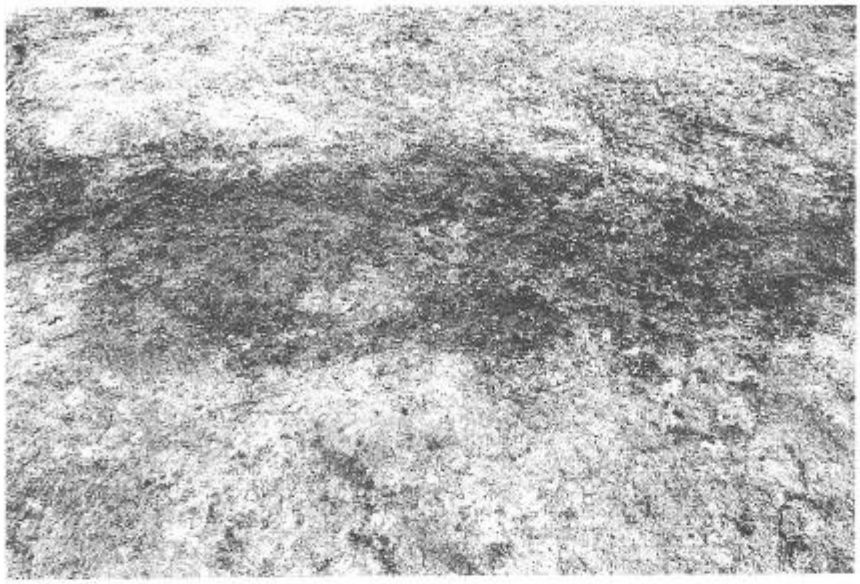
第1号火葬墓
断面(東→)



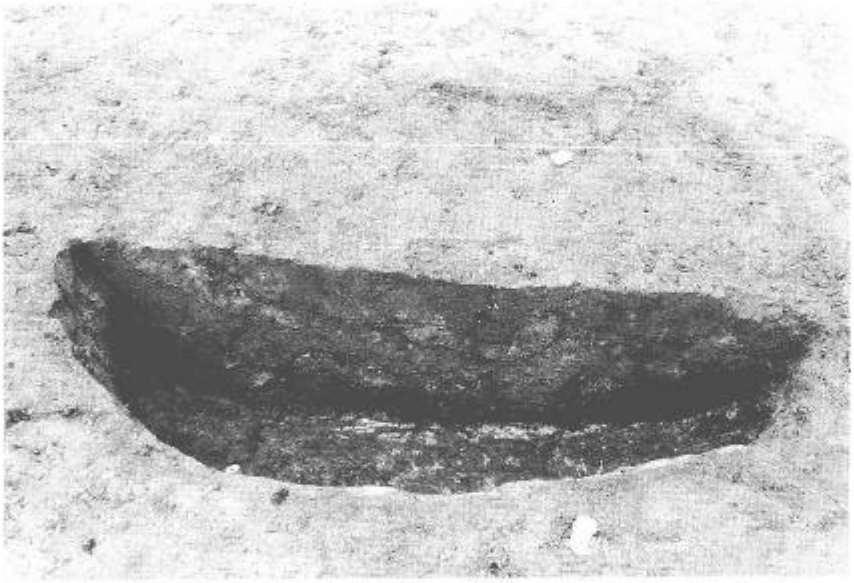
第2号火葬墓
断面(東→)



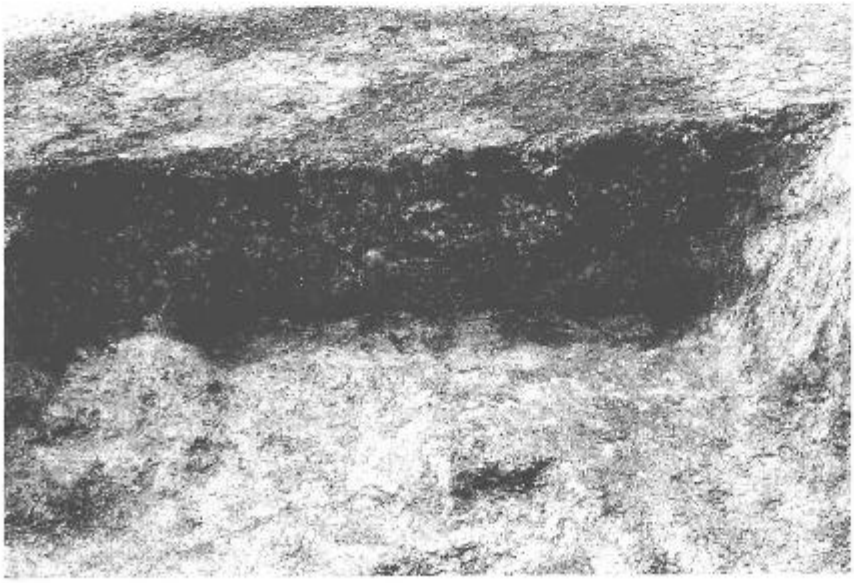
第3号火葬墓
断面(南→)



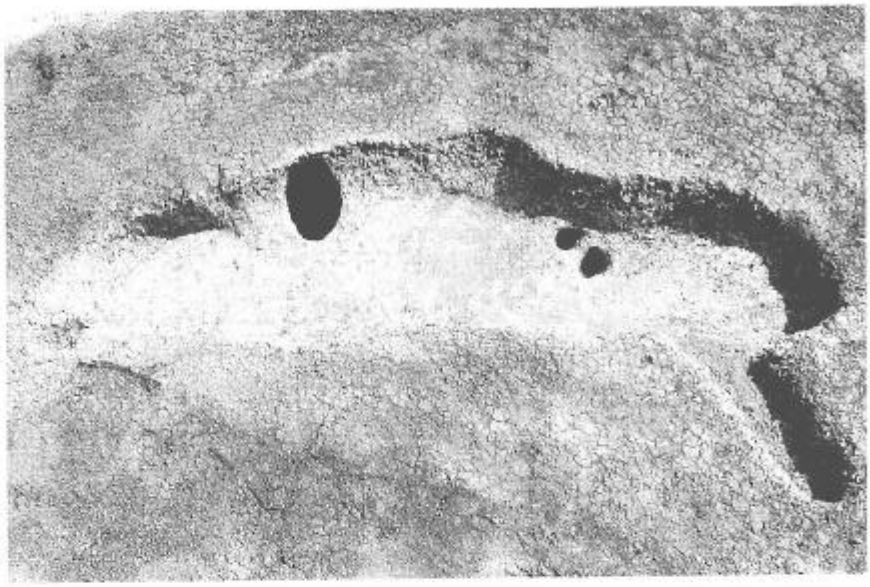
第1号土坑
確認状況(東→)



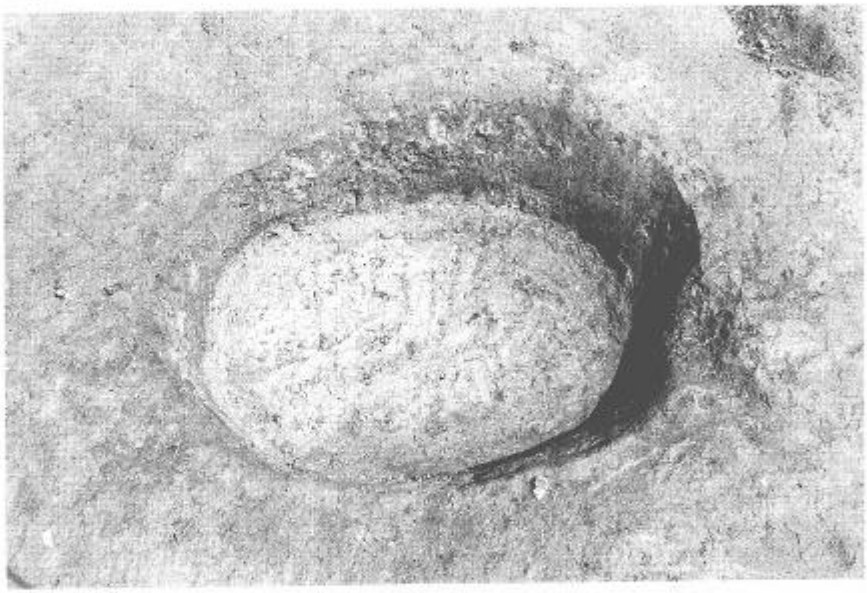
第2号土坑
断面(南→)



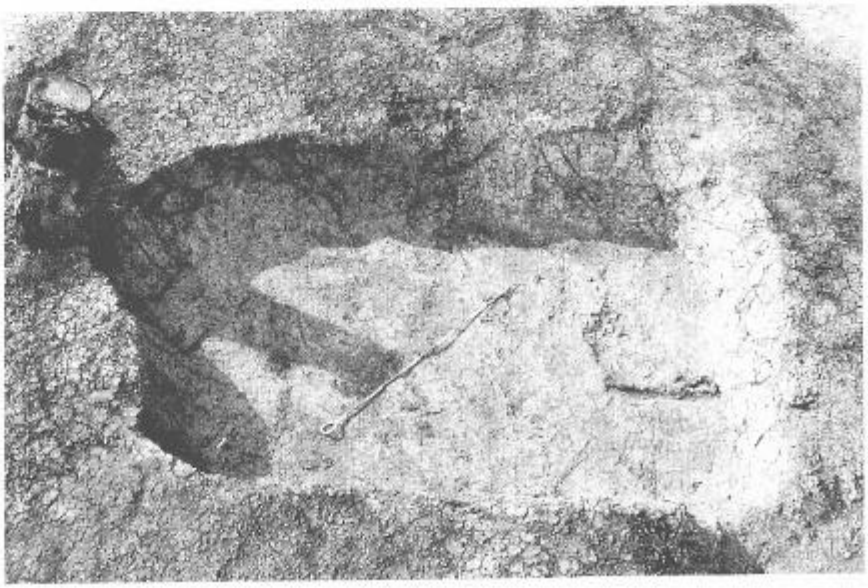
第3号土坑
断面(北→)



第1号土坑
完掘状況(北西→)

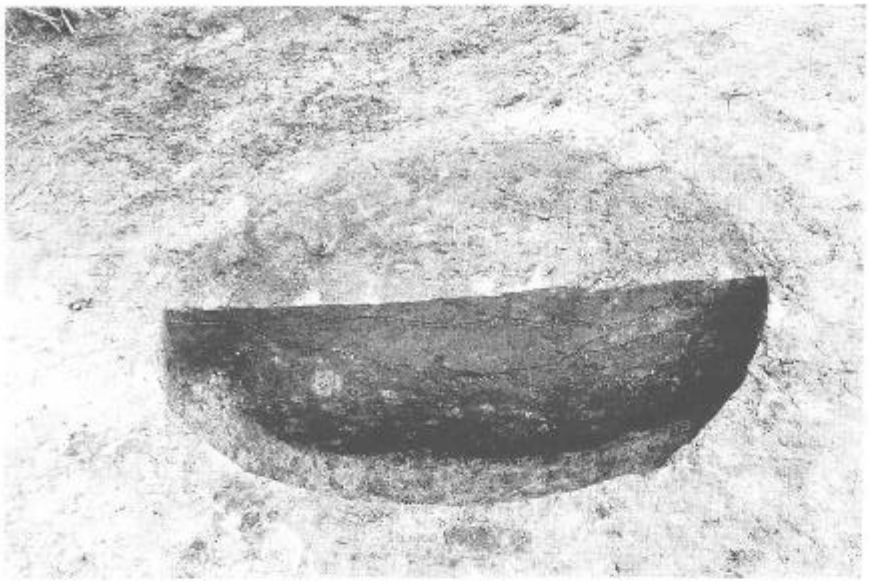


第2号土坑
完掘状況(南→)

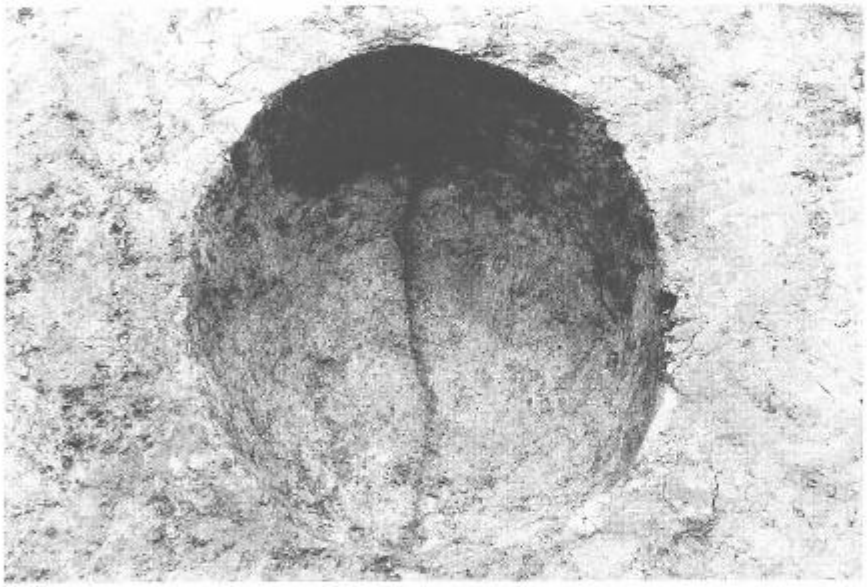


第3号土坑
完掘状況(南東→)

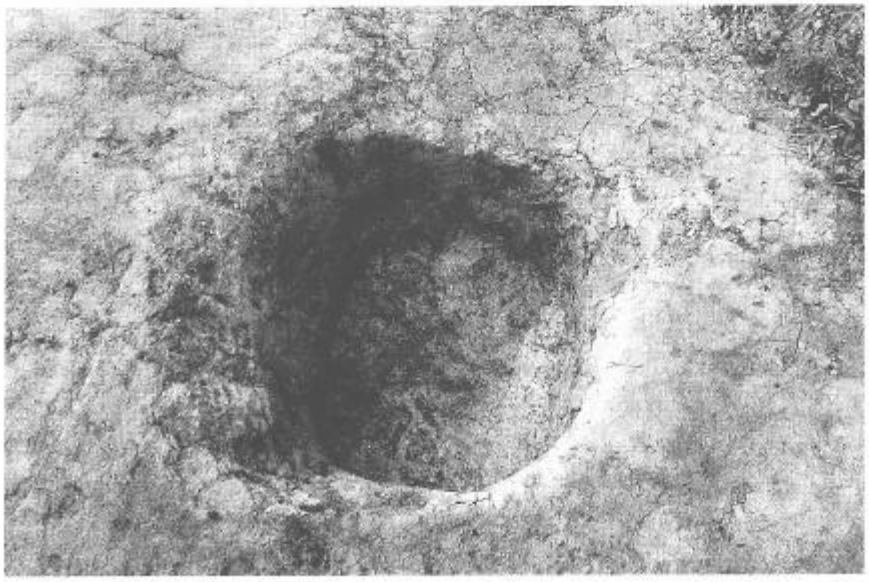
図版10



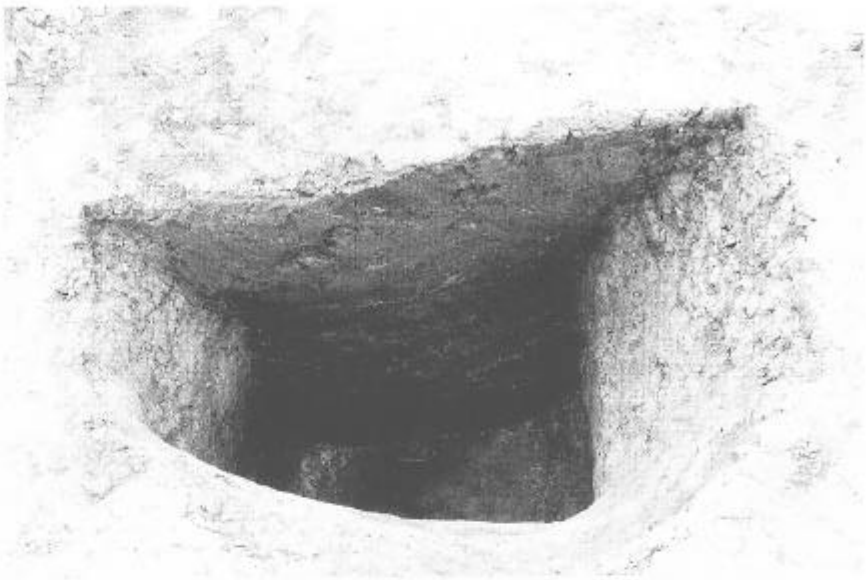
第4号土坑
断面(西→)



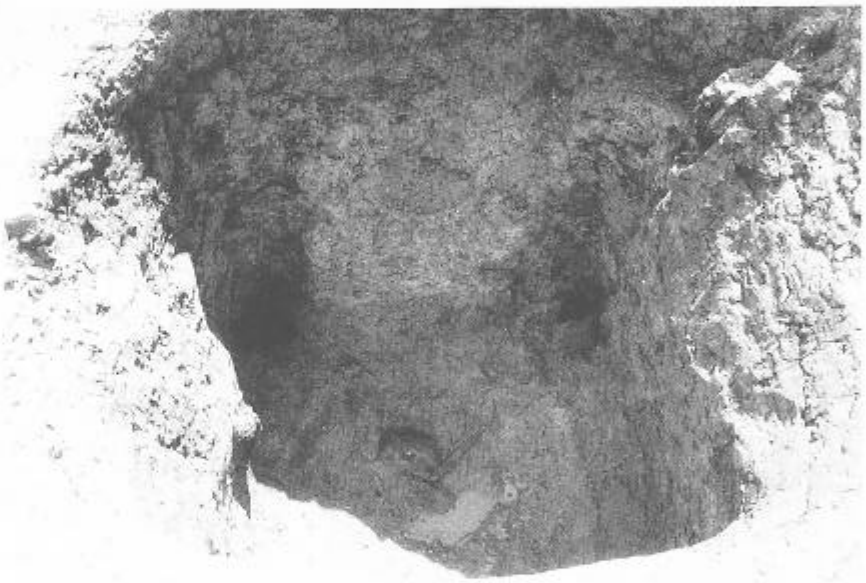
第4号土坑
完掘状況(北→)



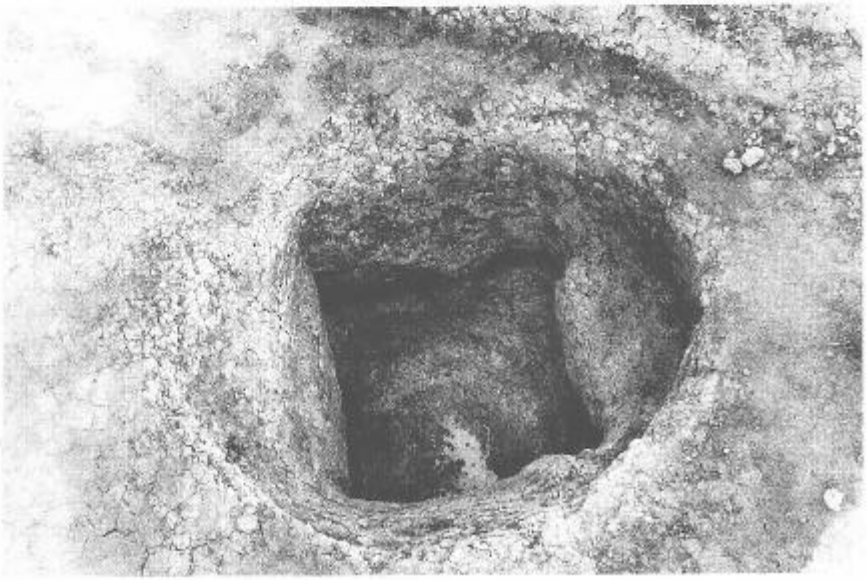
第5号土坑
完掘状況(東→)



第Ⅰ号井戸跡
断面(西→)



第Ⅰ号井戸跡
底面(北西→)

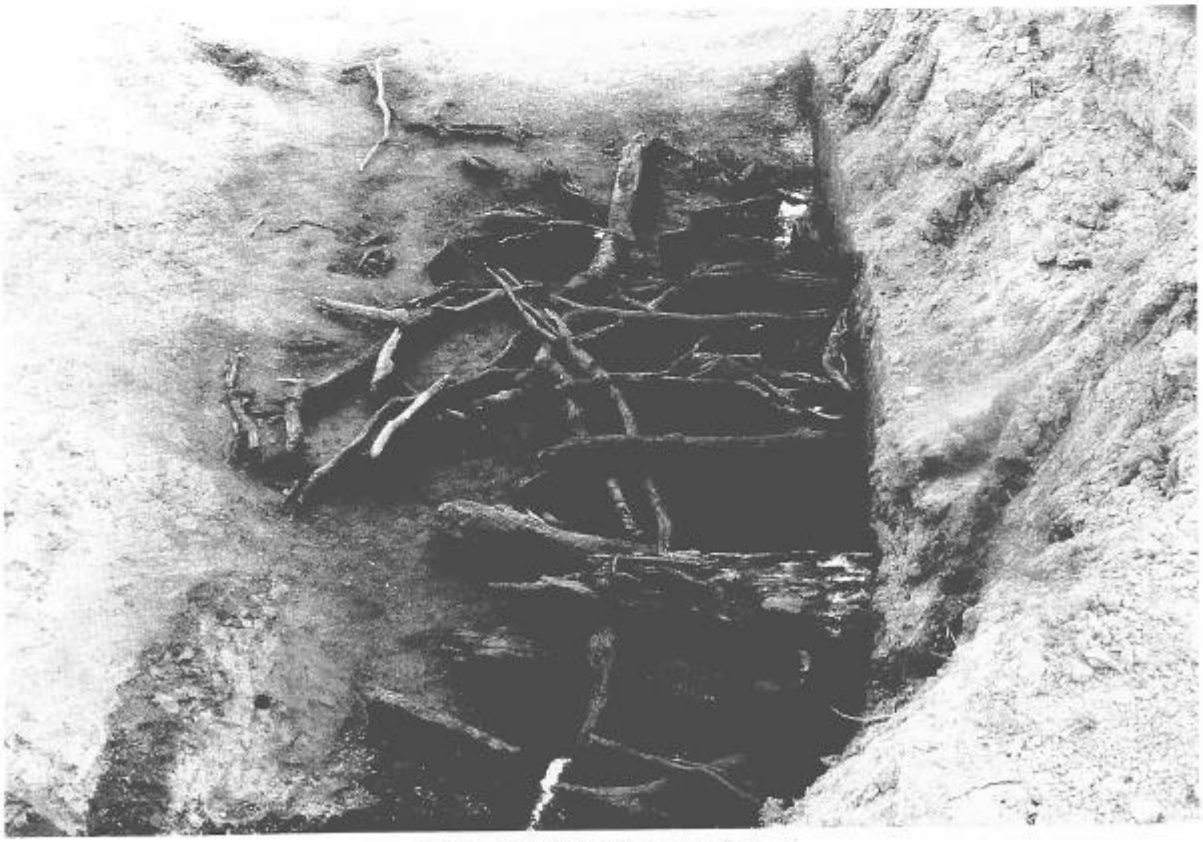


第Ⅰ号井戸跡
完掘状況(南→)

丘下東谷部調査風景(南→)

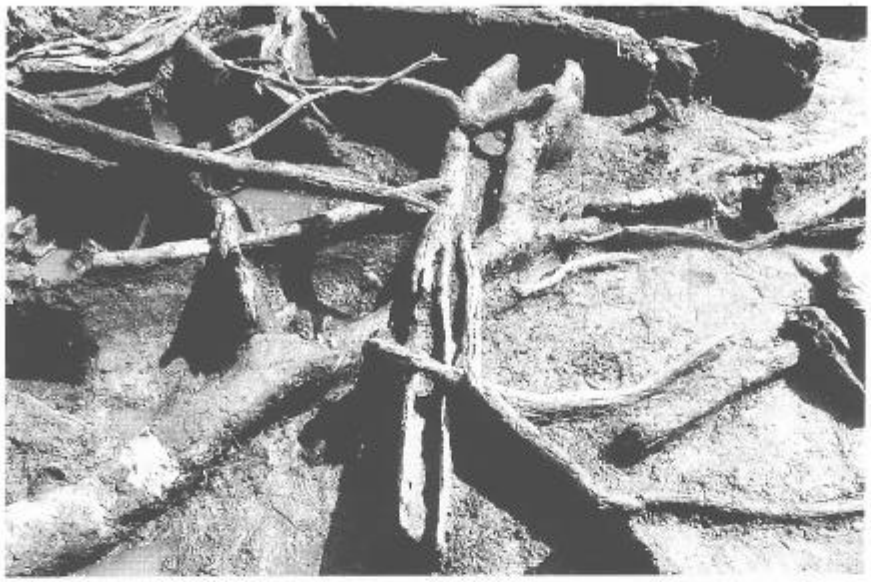
丘下谷部調査状況(南西→)

丘下東谷部調査状況(北東→)

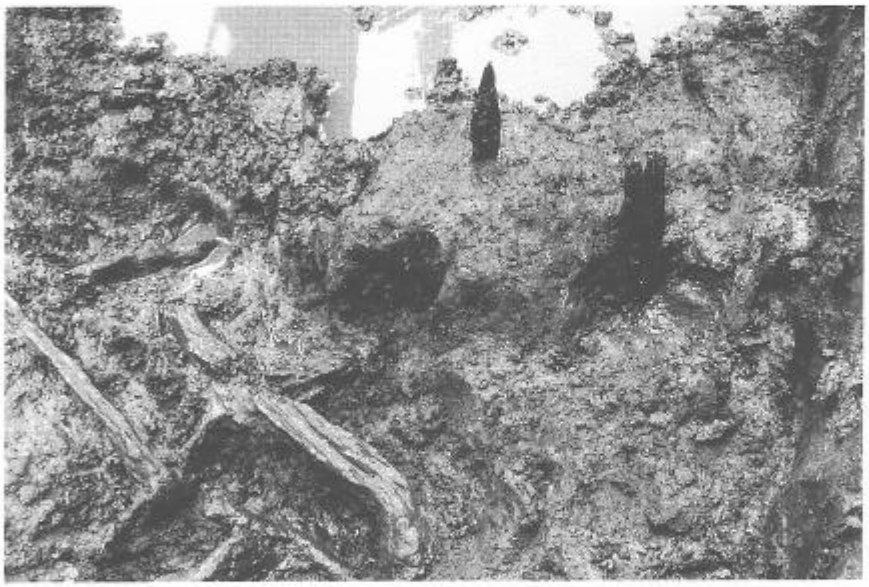


丘下東谷部木材検出状況(東→)

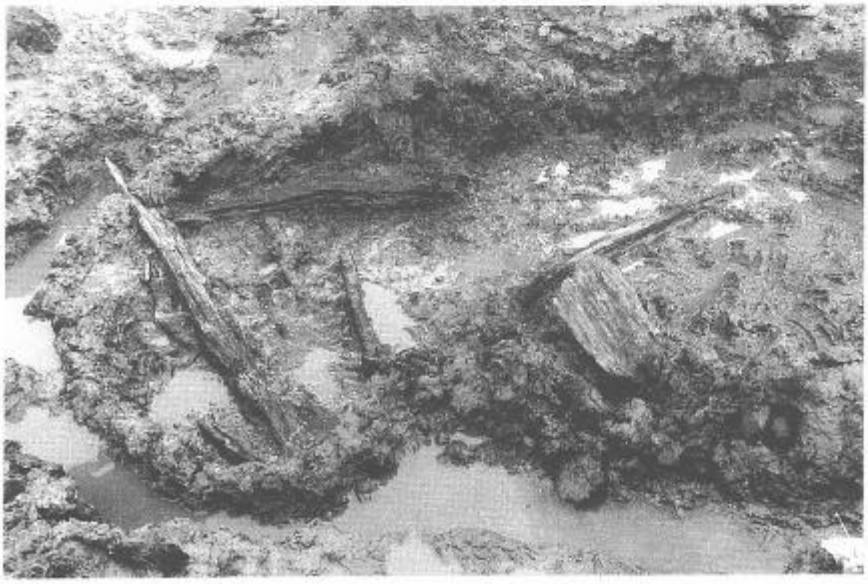
図版14



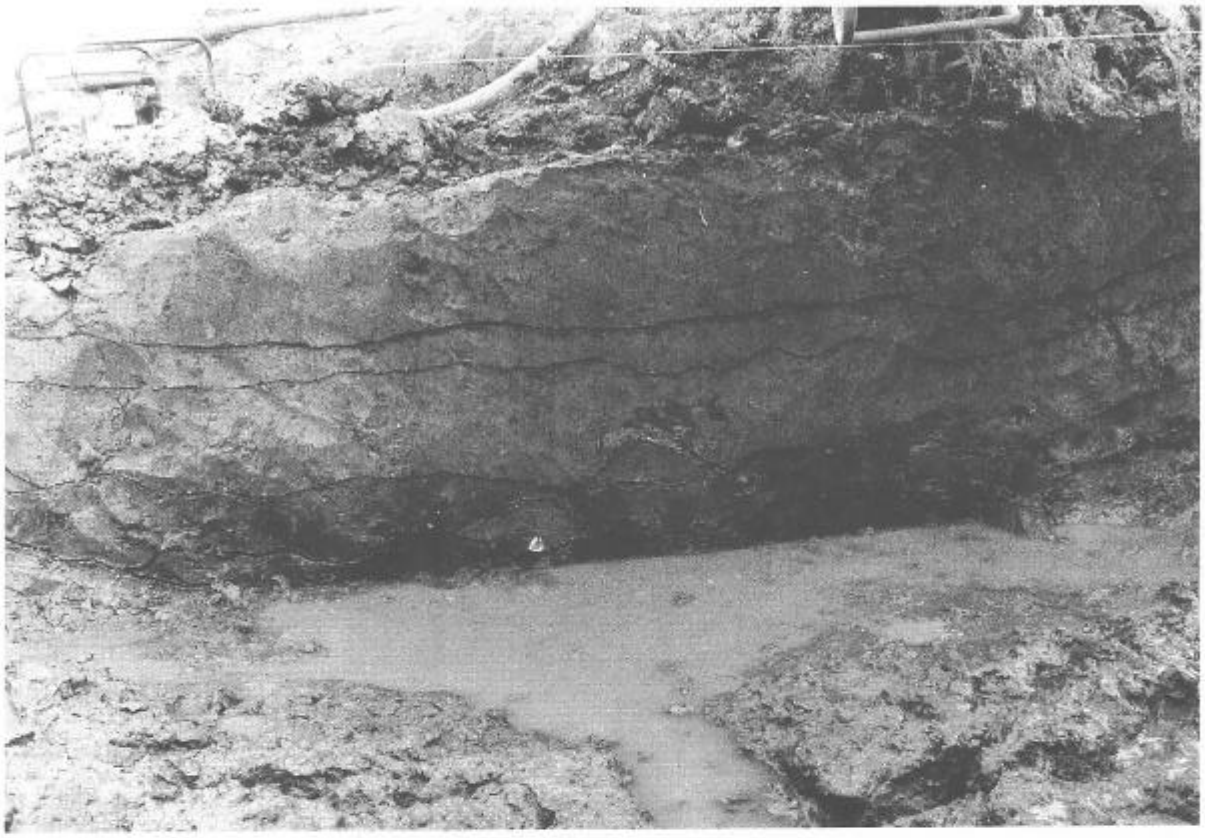
丘下東谷部
木材(西→)



丘下西谷部
杭検出状況(東→)

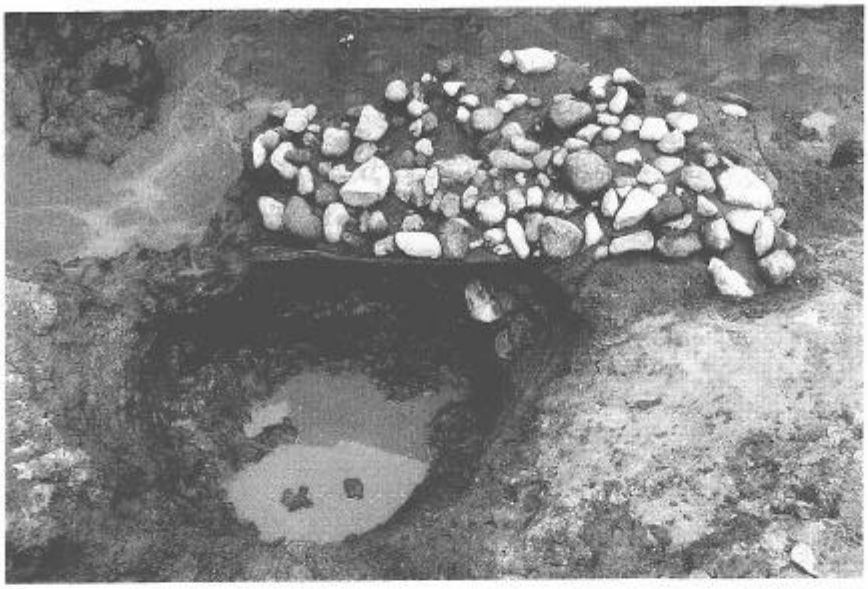


丘下西谷部
木材検出状況(南→)

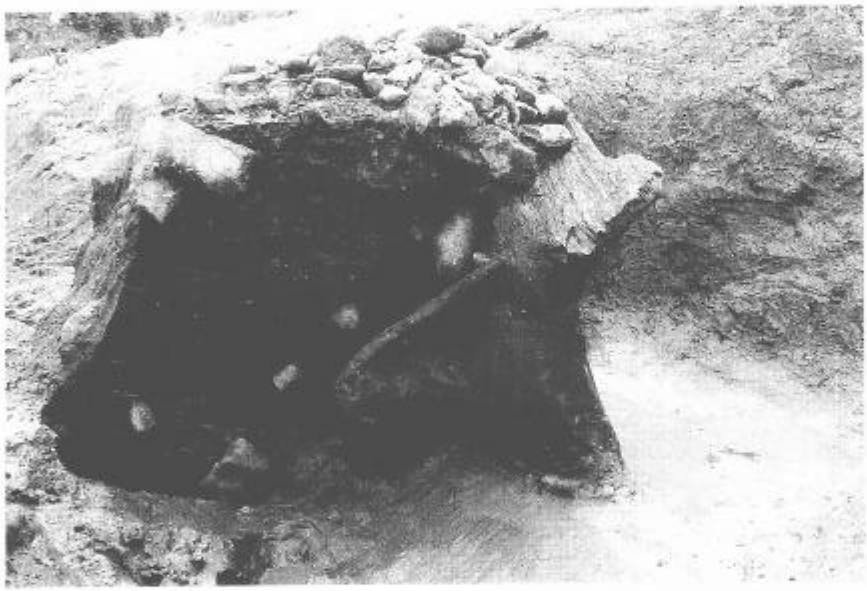


丘下西谷部土層断面(西→)

丘下西谷部完掘状況(東→)

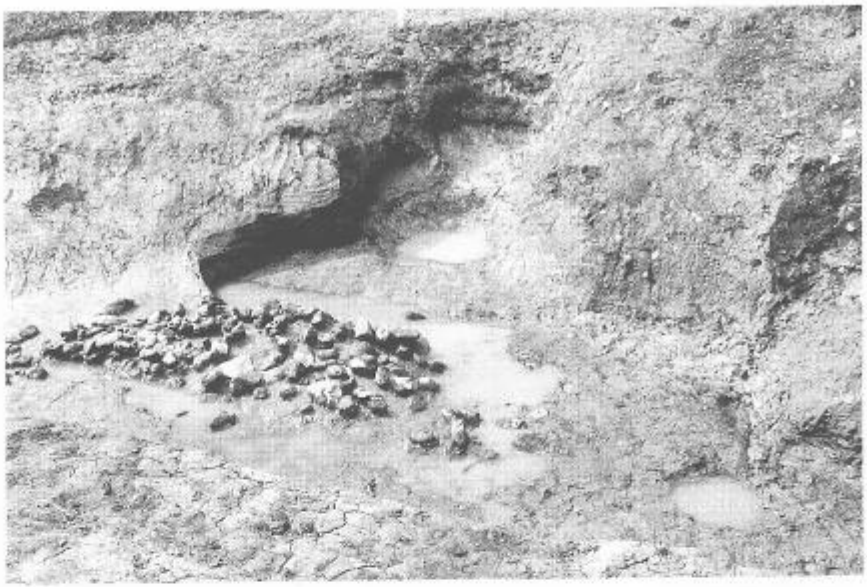


第２号井戸跡
検出状況（南→）

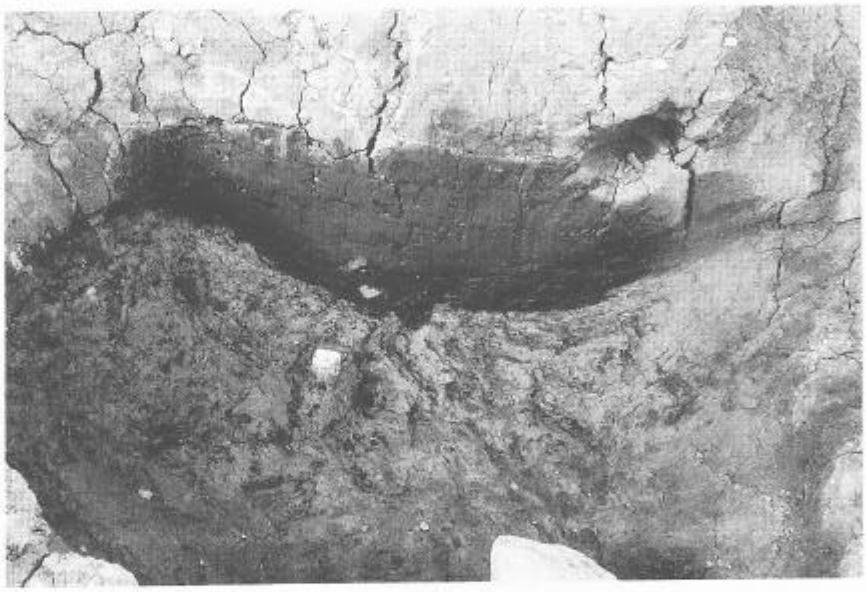


第２号井戸跡
断面（西→）

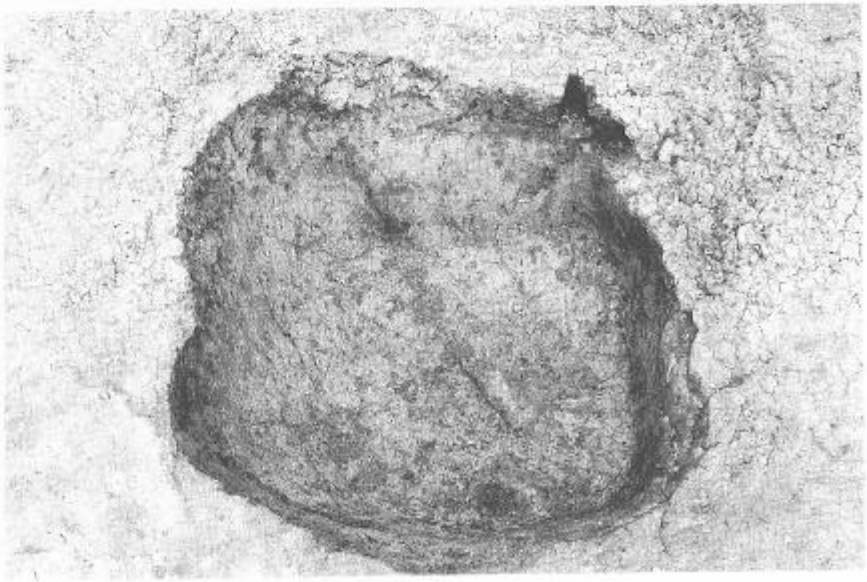
第２号井戸跡
木製品出土状況（北→）



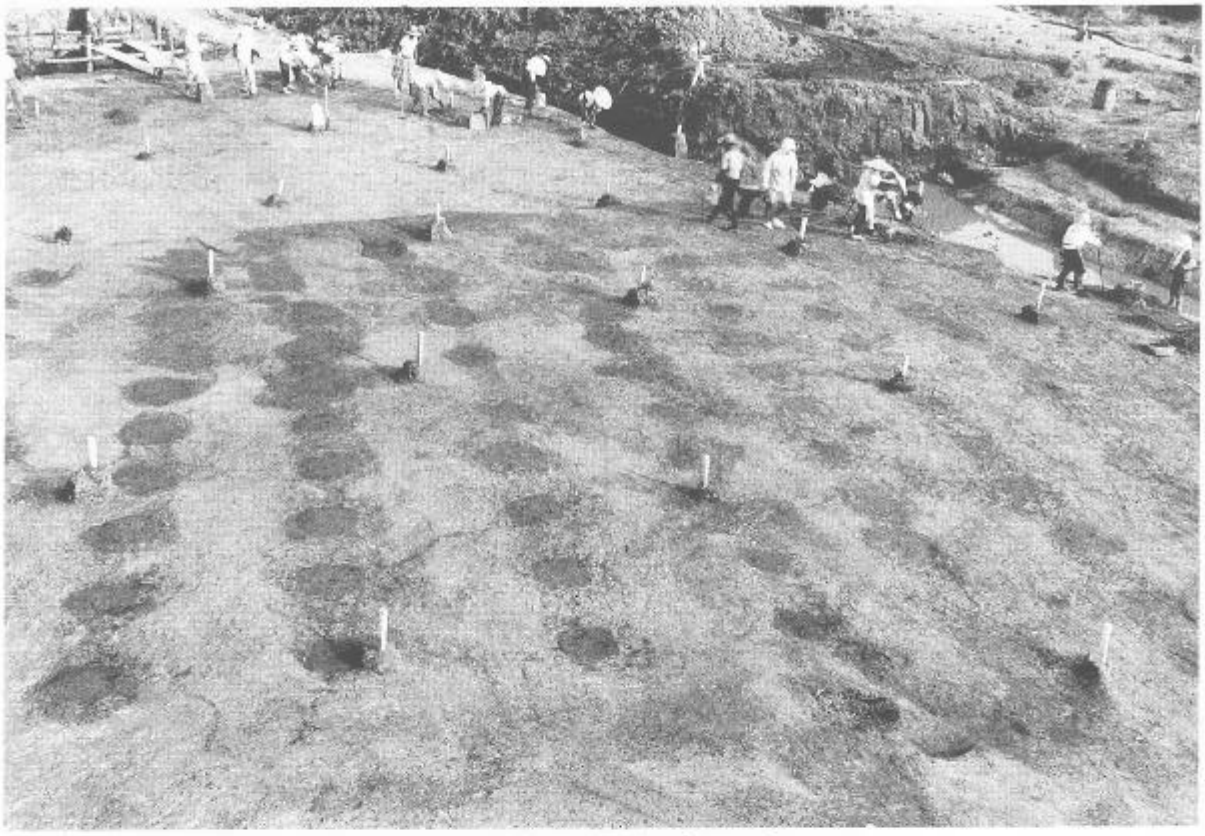
第2・3号井戸跡
近景(北→)



第4号井戸跡
断面(南→)

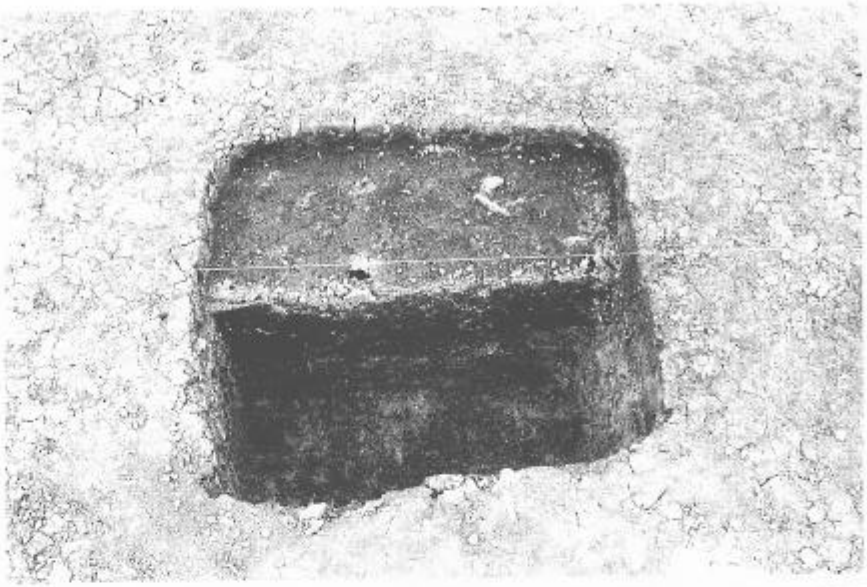


第7号土坑
完掘状況(南→)

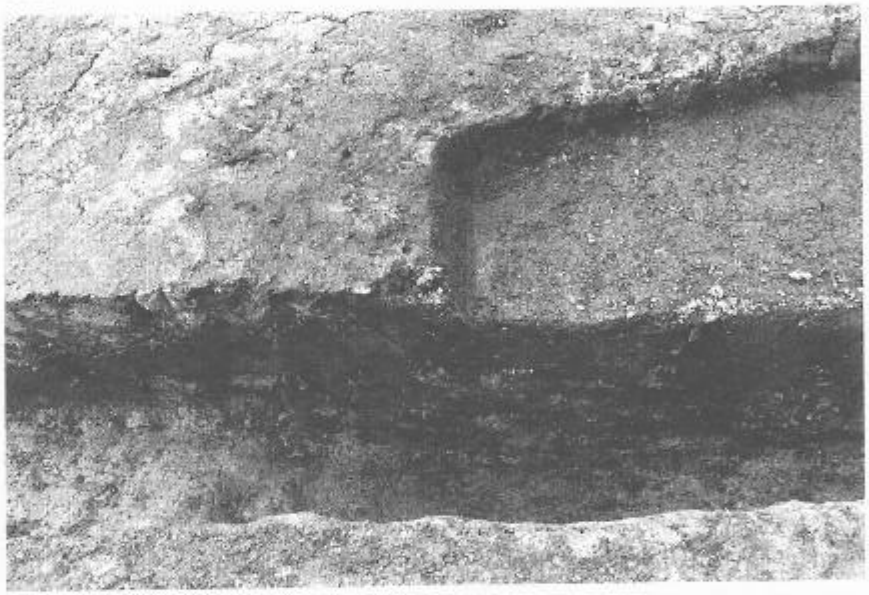


掘立柱建物跡確認状況(北西→)

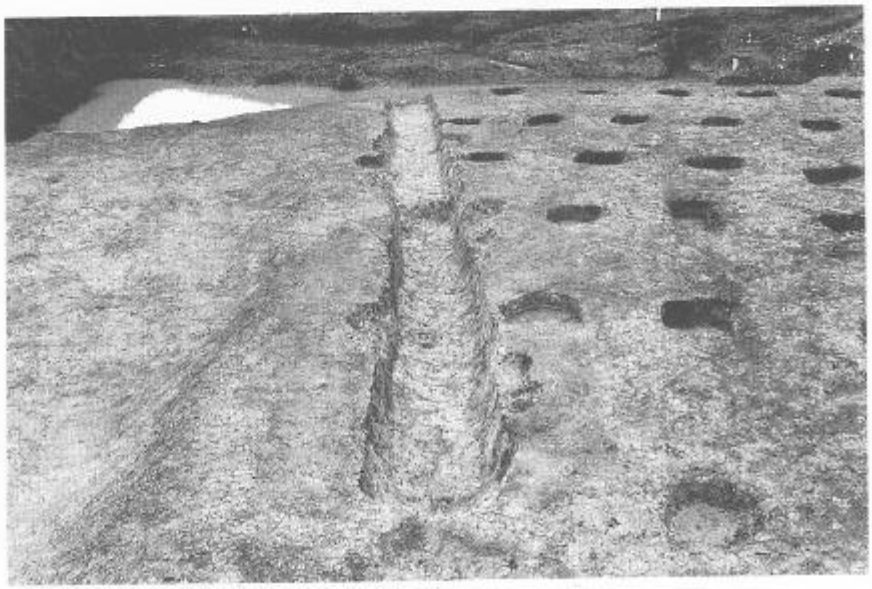
掘立柱建物跡調査風景(北西→)



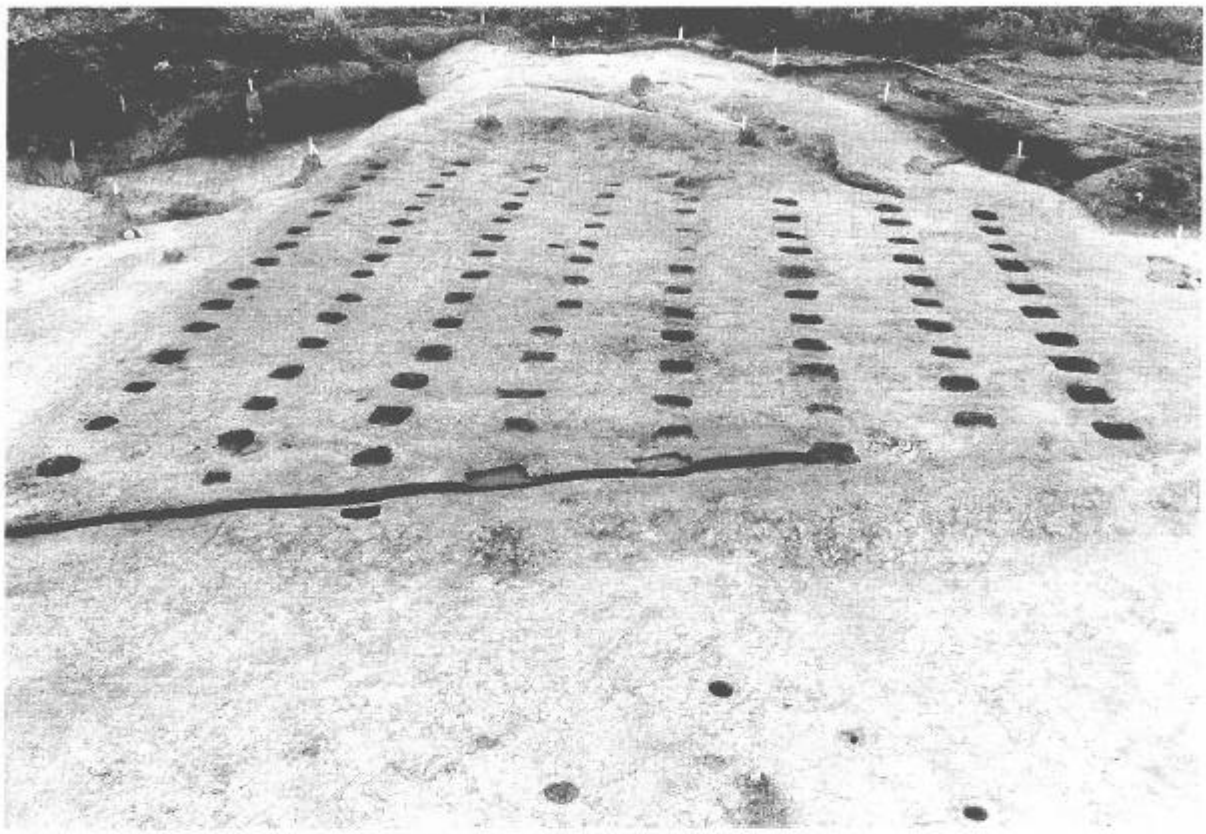
建物跡掘り方
断面(南→)



建物跡東辺溝跡
断面(東→)



東辺溝跡
完掘状況(北→)



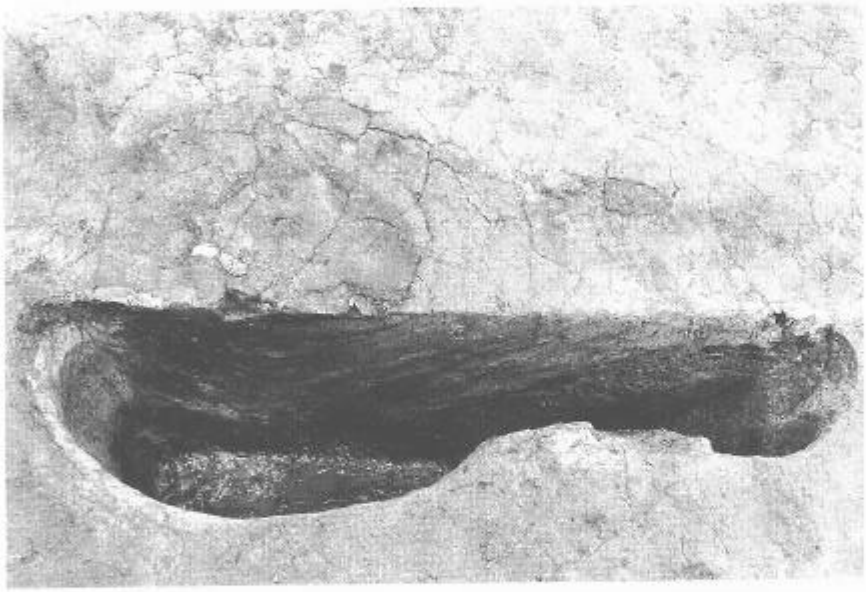
掘立柱建物跡完掘状況(東→)

掘立柱建物跡全景(北西→)

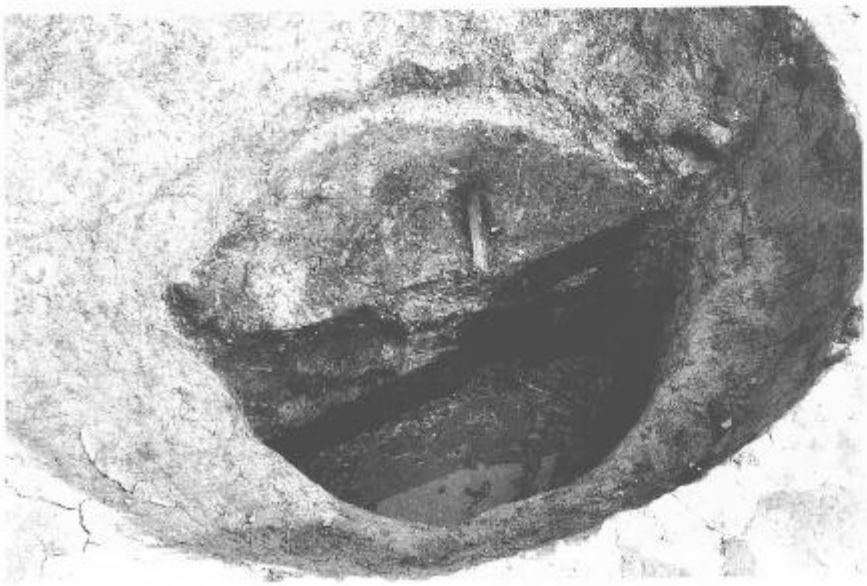
平坦部南側調査風景(北西→)

平坦部北側調査風景(西→)

第7号土坑
断面(南→)

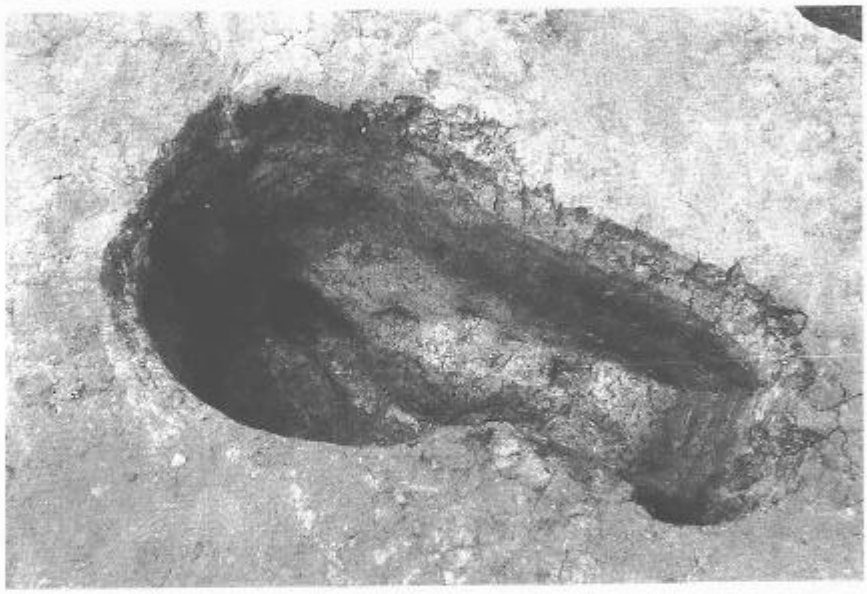


第8号土坑
断面(南→)



第5号井戸跡
断面(西→)

第7号土坑
完掘状況(南→)

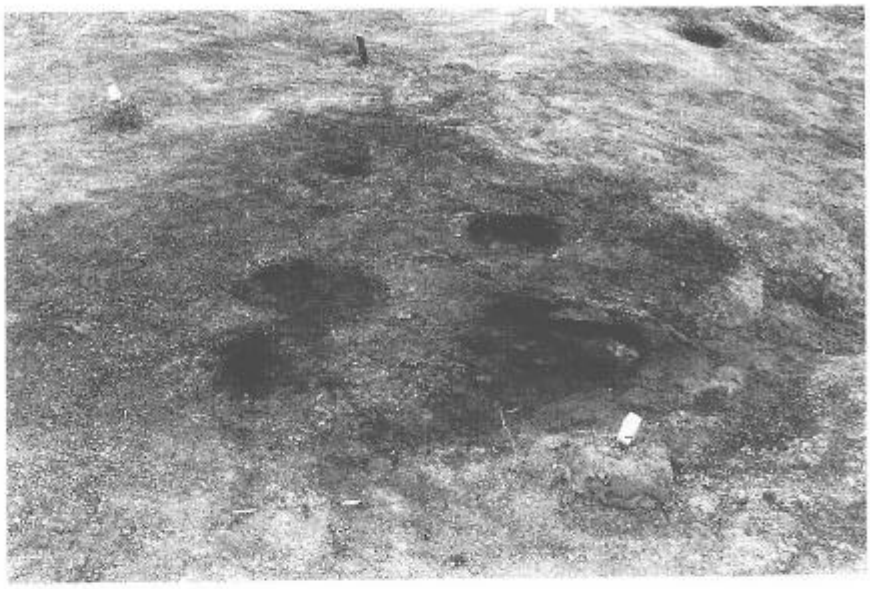


第8号土坑
完掘状況(南→)

第5号井戸跡
完掘状況(南西→)

中腹斜面調査状況(南東→)

中腹斜面調査状況(東→)

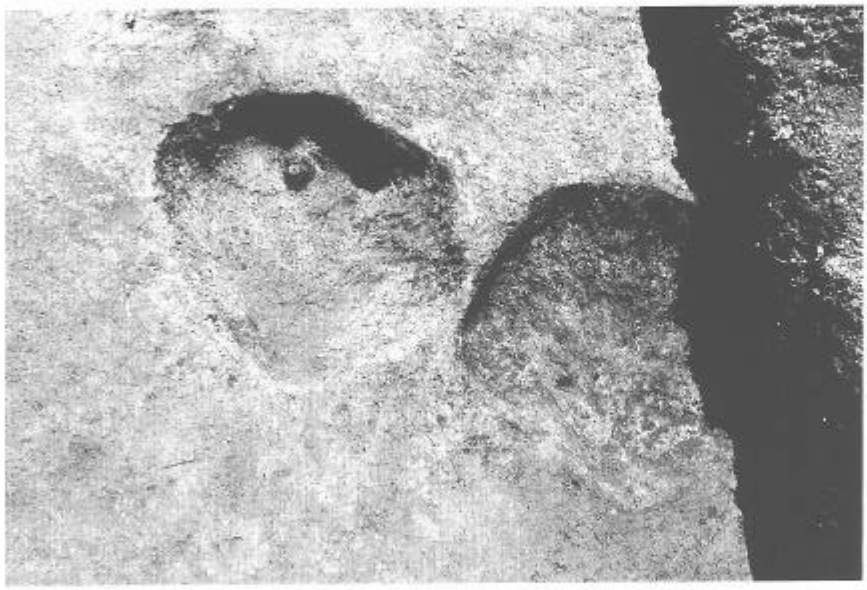


火葬墓群
確認状況(西→)

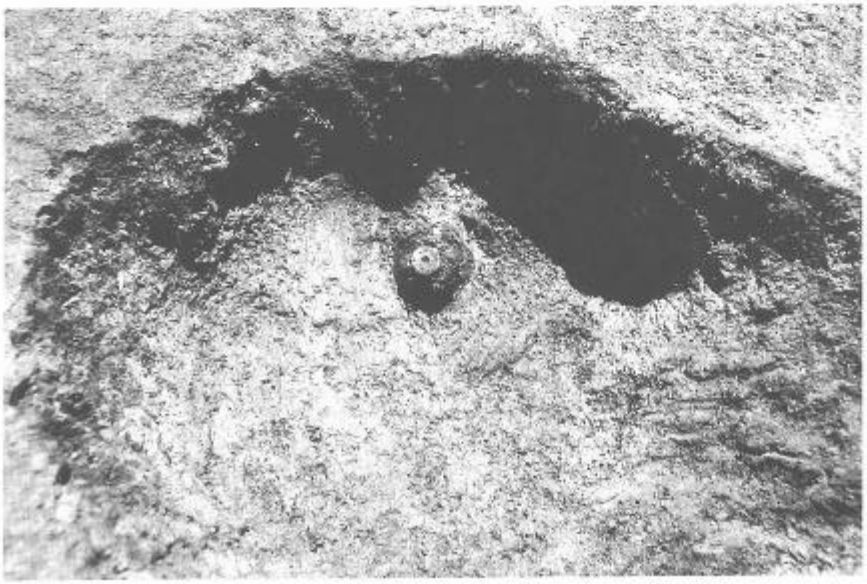
火葬墓群
確認状況(西→)

火葬墓群
完掘状況(東→)

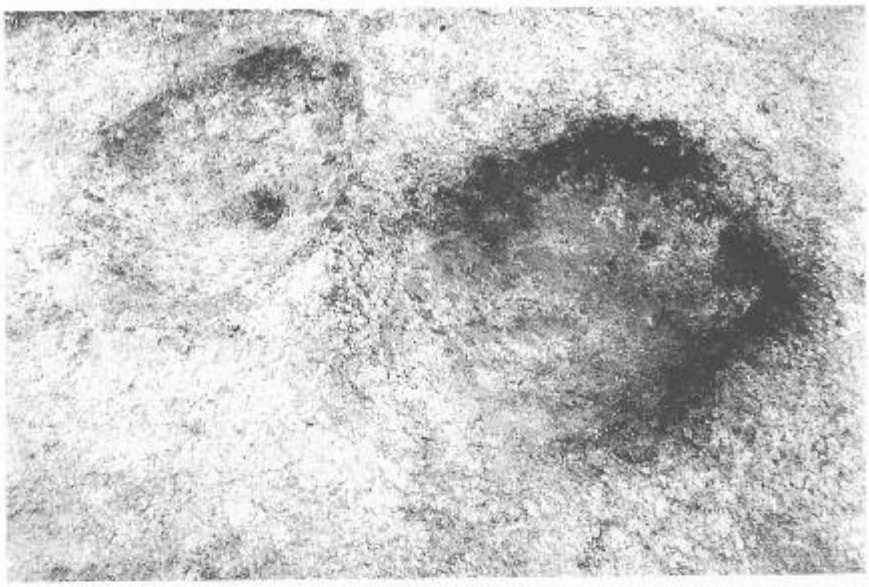
第4号火葬墓
完掘状況(南→)



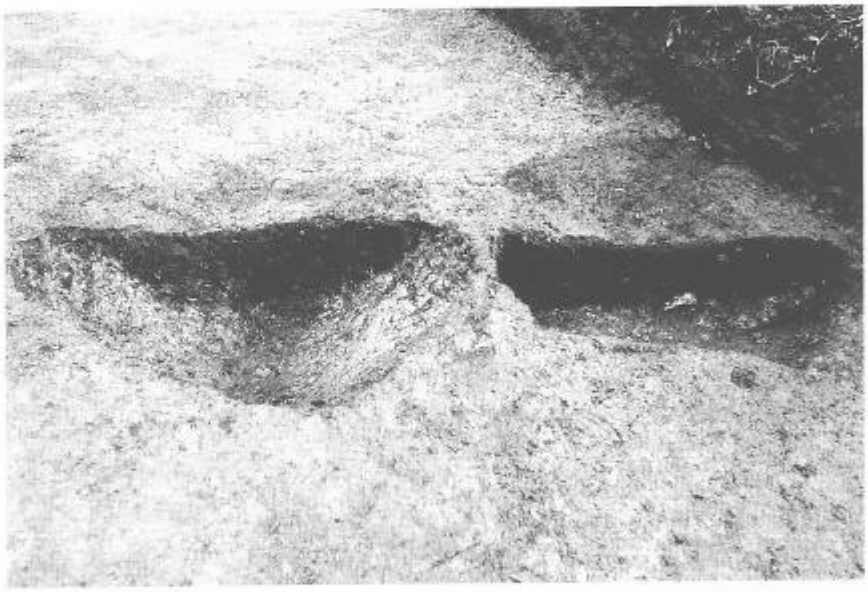
第8・9号火葬墓
完掘状況(西→)



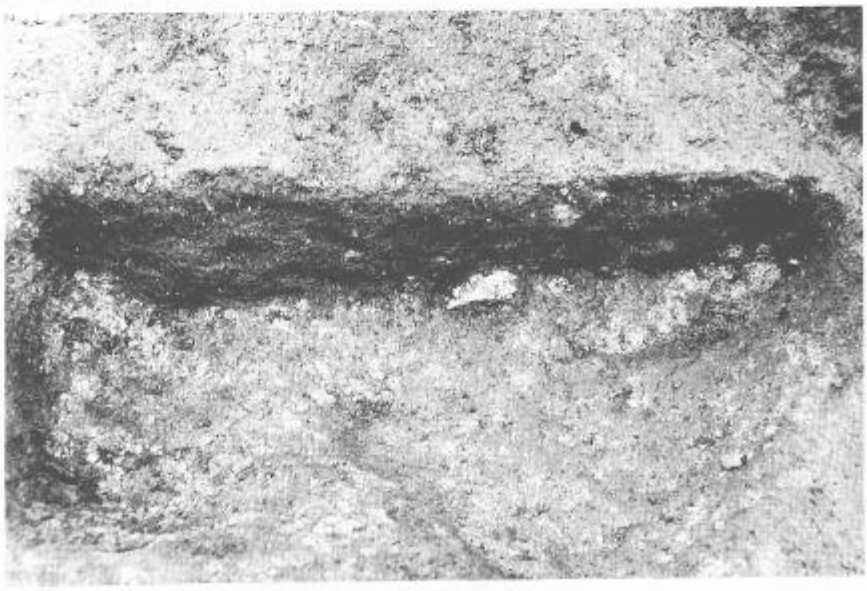
第8号火葬墓
銅銭出土状況(西→)



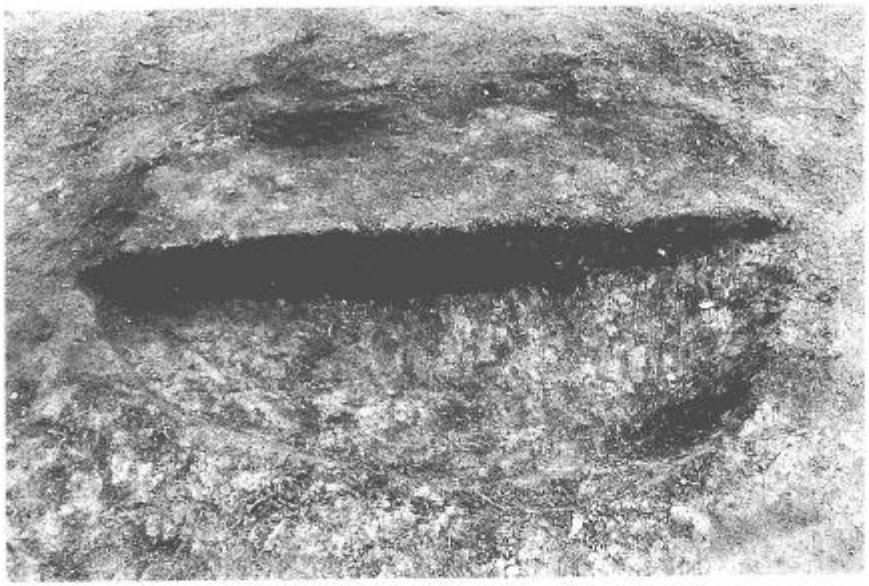
第４・７号火葬墓
完掘状況（南→）



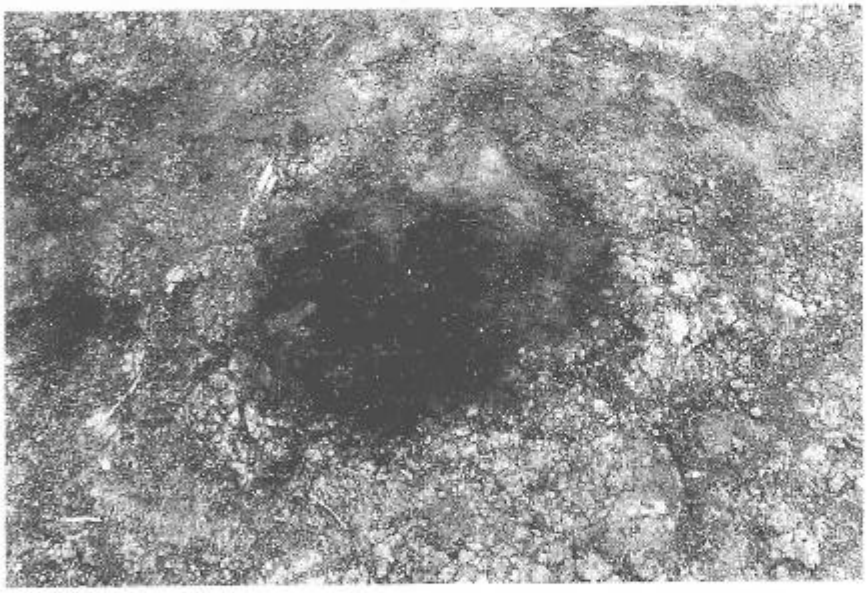
第８・９号火葬墓
断面（北西→）



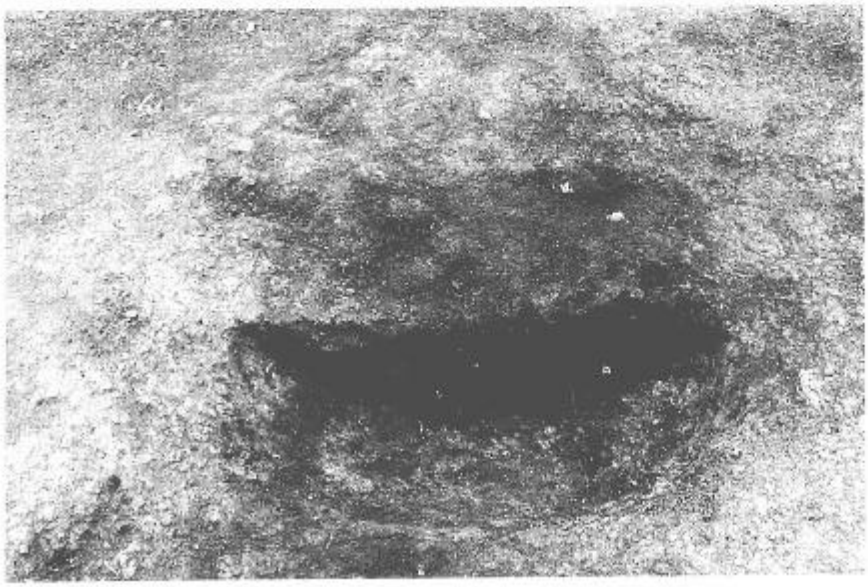
第９号火葬墓
断面（北西→）



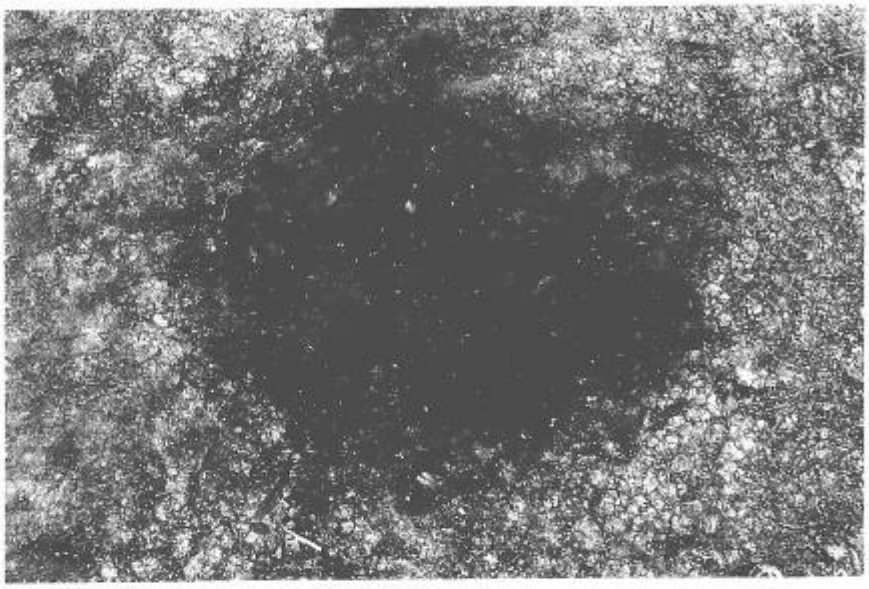
第14号火葬墓
断面(東→)



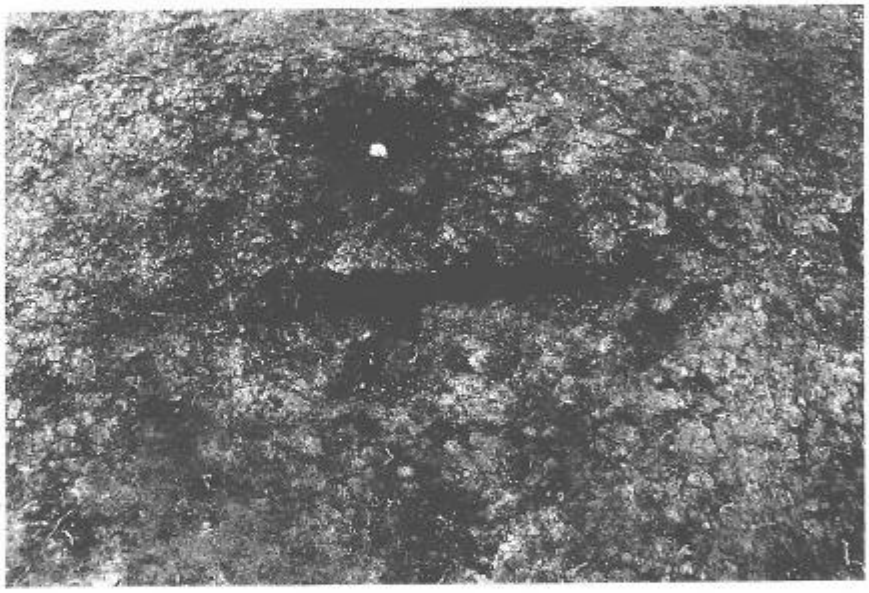
第15号火葬墓
確認状況(東→)



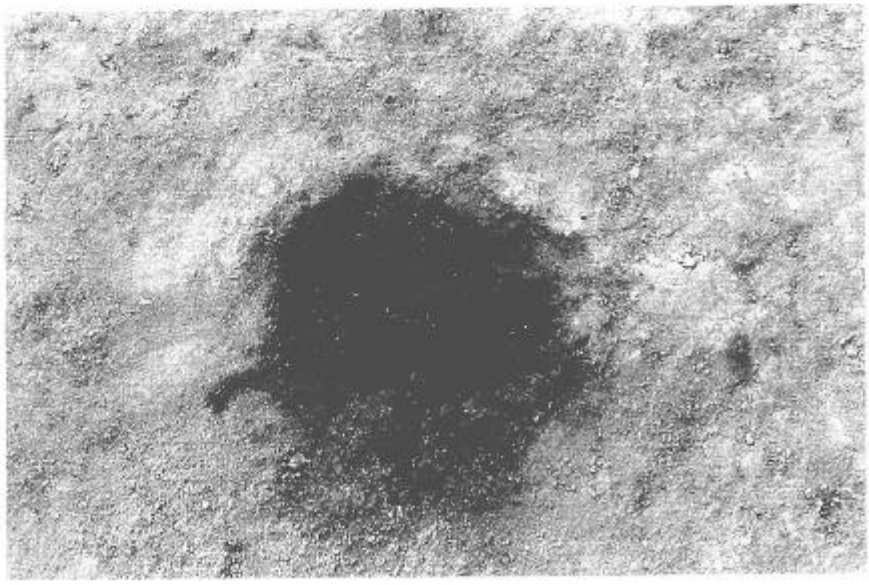
第16号火葬墓
断面(東→)



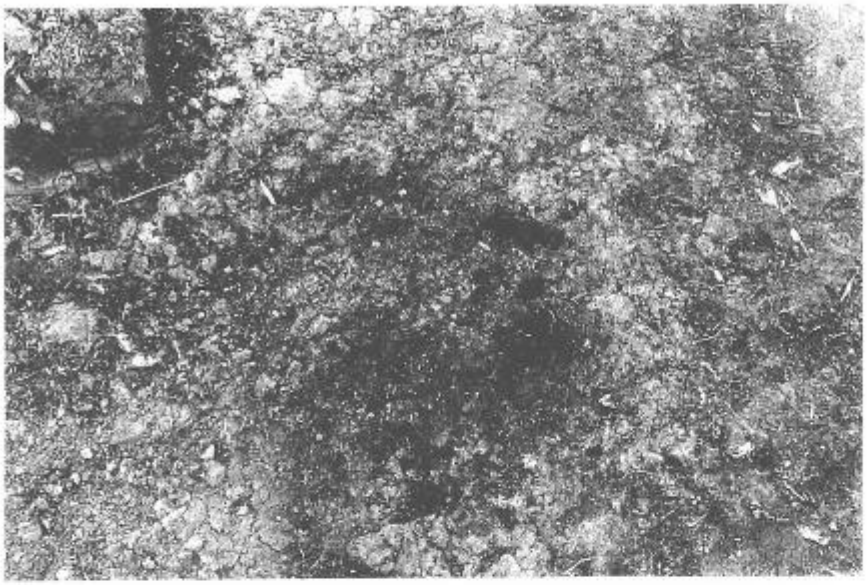
第17号火葬墓
確認状況(東→)



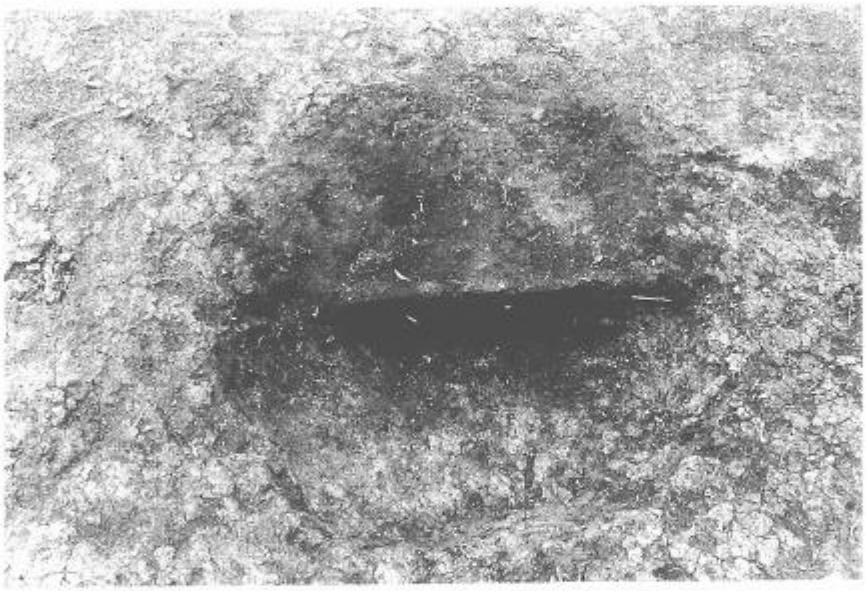
第18号火葬墓
断面(東→)



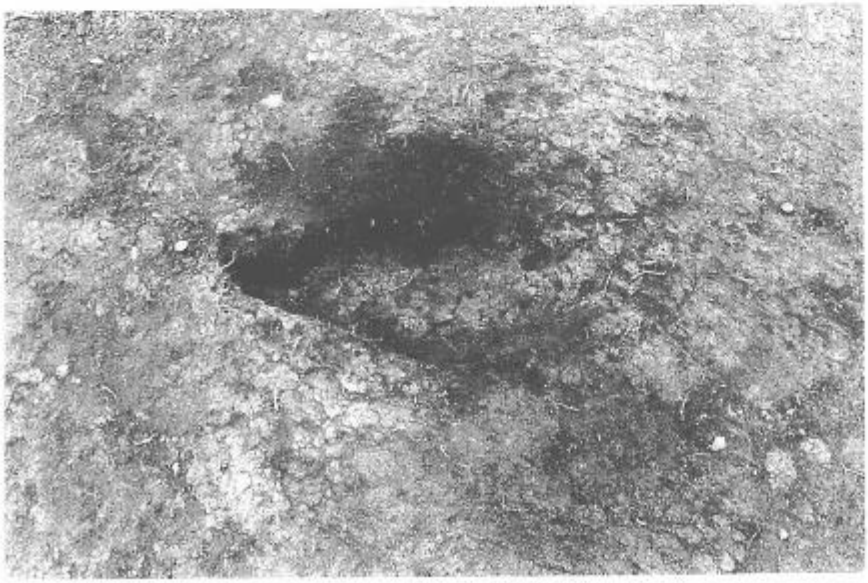
第19号火葬墓
確認状況(東→)



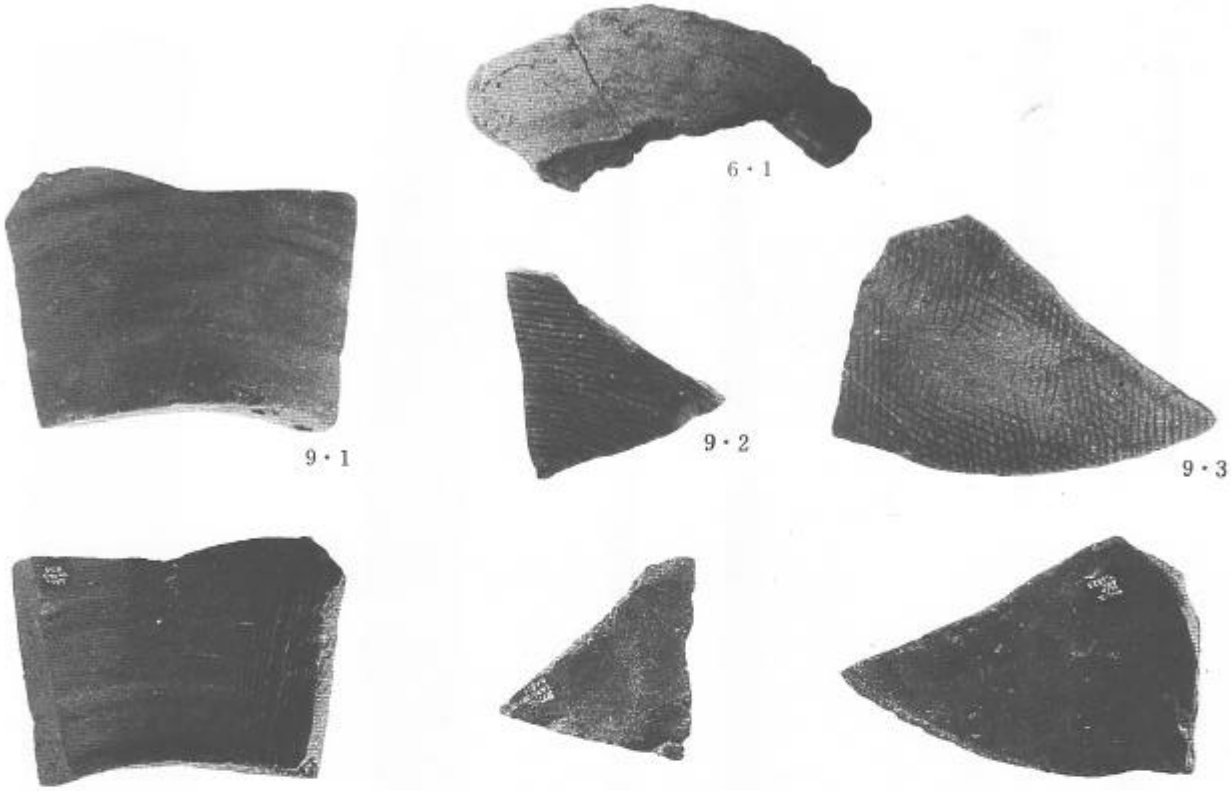
第20号火葬墓
確認状況(東→)

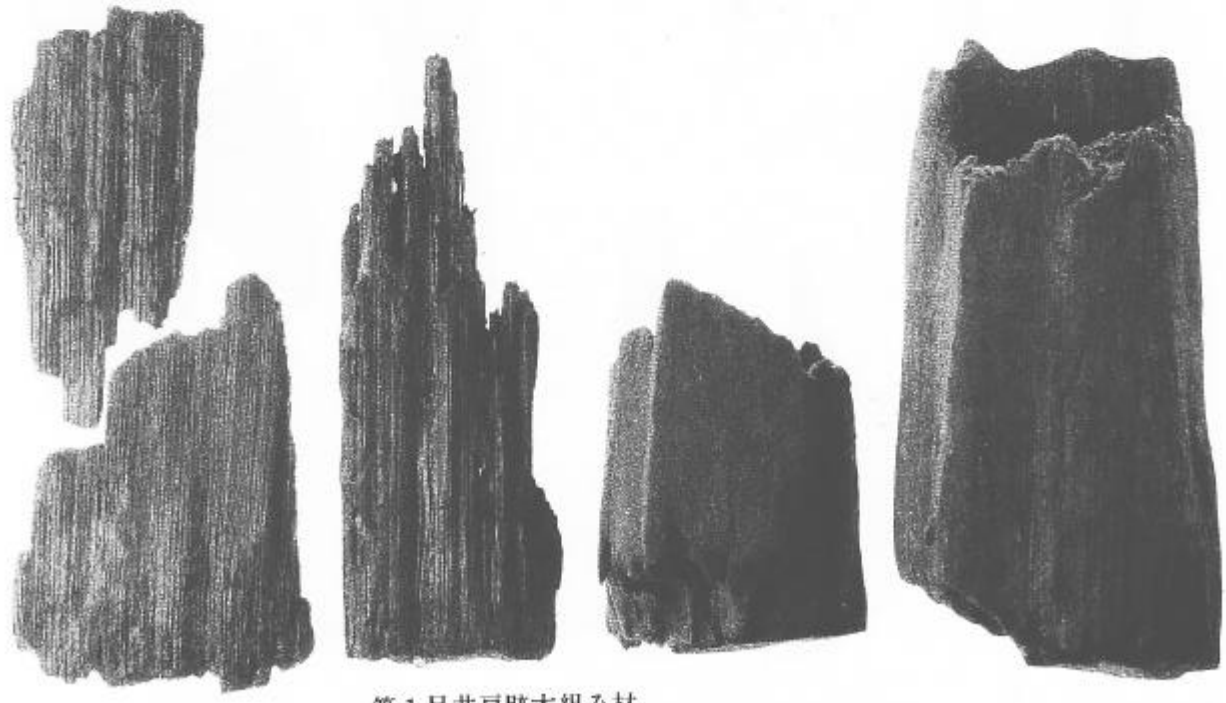


第21号火葬墓
断面(東→)



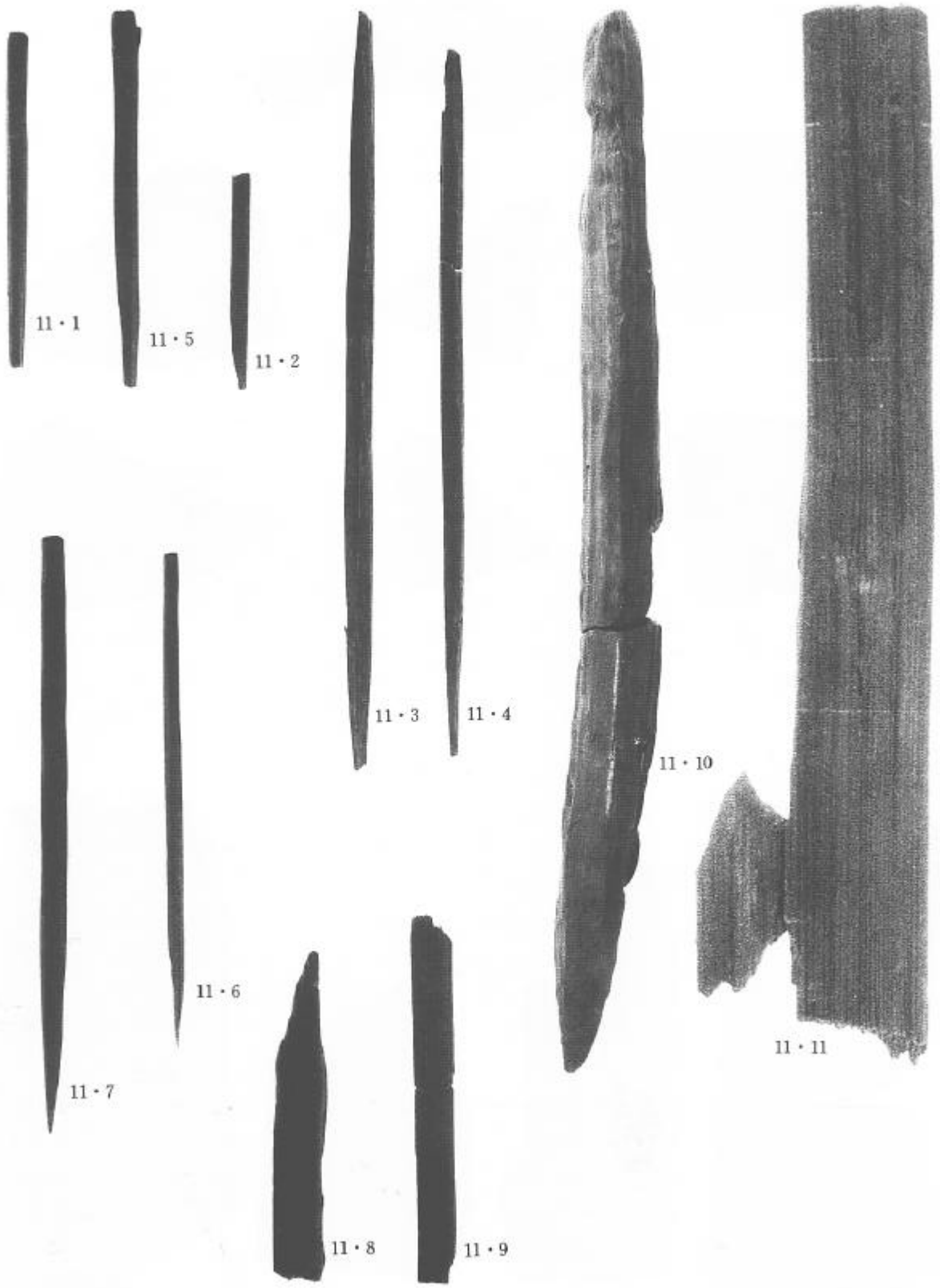
第22号火葬墓
断面(東→)



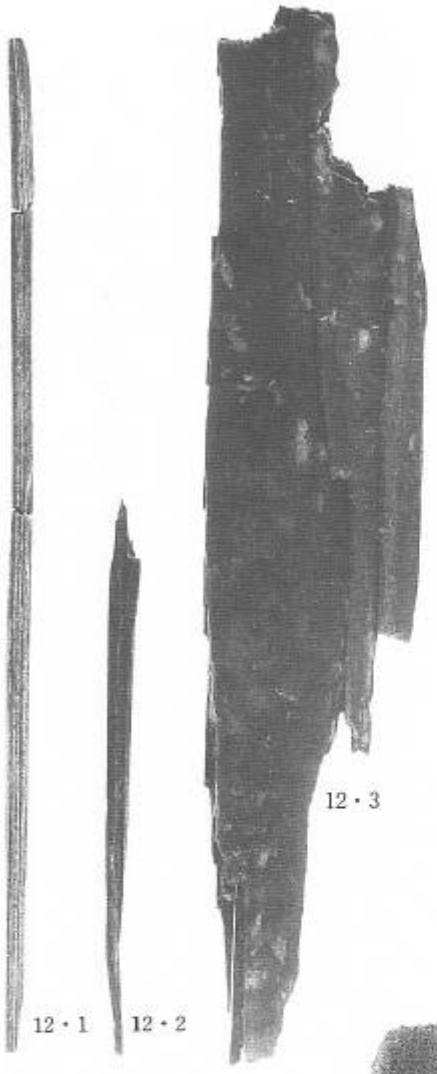



第１号井戸跡木組み材

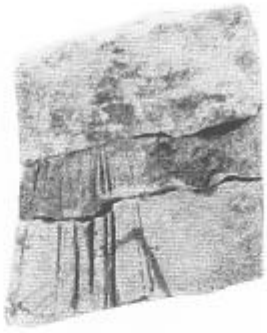
※遺物に付した数字は拠図番号・拠図内番号に対応する




遺構内出土遺物－第２・３号井戸跡－

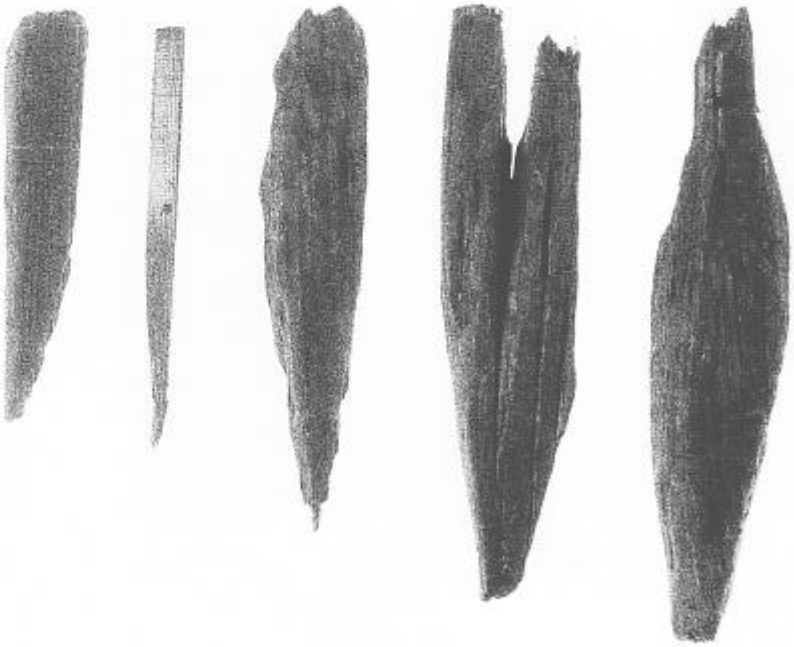


12・1　12・2　12・3



12・4

12・5



遺構内出土遺物ー第4号井戸跡、西谷部ー

16・1

16・2

16・3

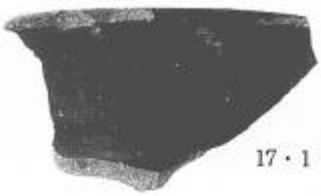
16・4

16・5

16・6

16・7

16・8


17・1

17・2

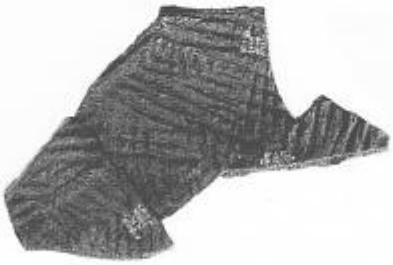
17・3

第7号土坑内

第8号土坑内

17・5

17・4



17・6

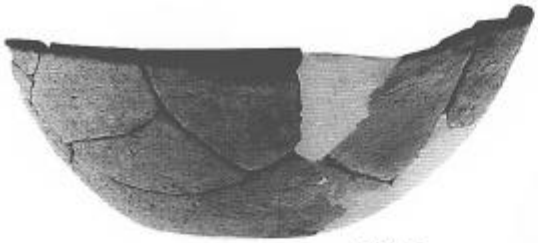
第6・11号火葬墓内

19・1

19・2

20・1

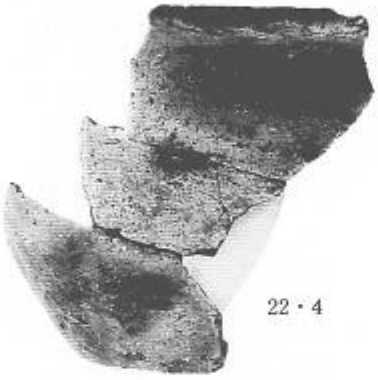
遺構内出土遺物ー第7・8号土坑、第6・11号火葬墓ー



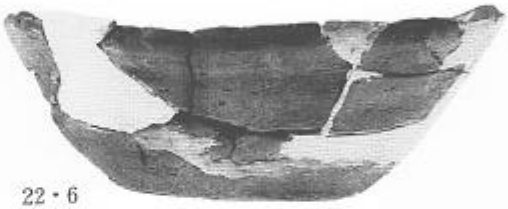
22・1

22・2

22・5

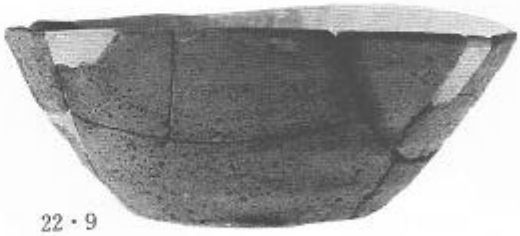


22・4



22・6

22・8

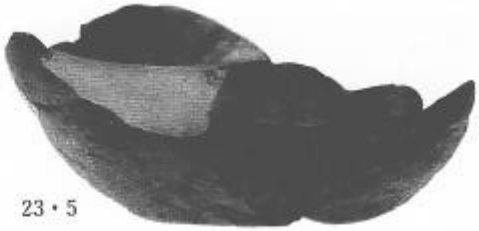


22・9

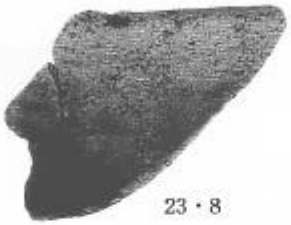
23・1

22・10

23・4


23・5

23・7


23・8

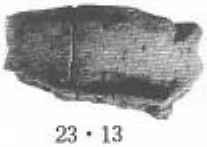
23・9

23・11

23・10

23・6

23・12


23・13

23・14

23・20

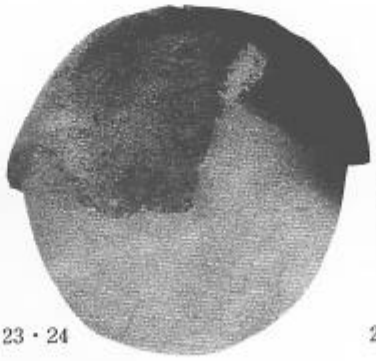
23・17

23・15

23・18

23・21

23・23


23・24

23・22

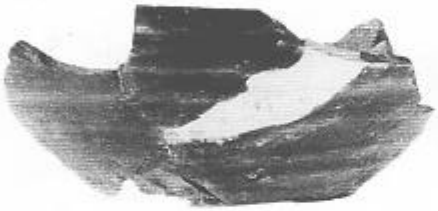
遺構外出土遺物－赤焼土器－

24・1

24・2

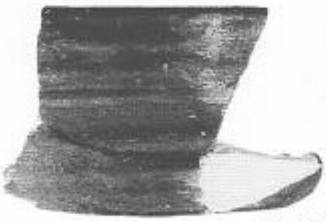
24・5

24・3



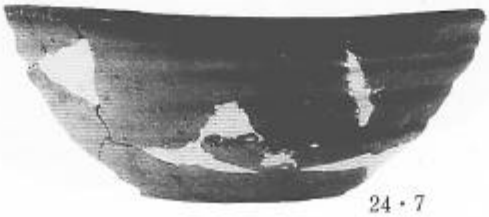
24・4

24・6



24・8

24・9



24・7

遺構外出土遺物－須恵器〈杯〉－

25・1

25・2

25・3

25・4

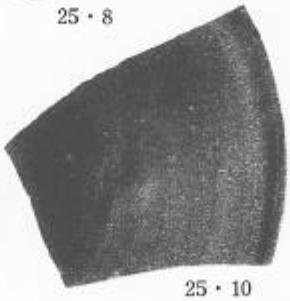
25・5

25・7

25・8

25・8

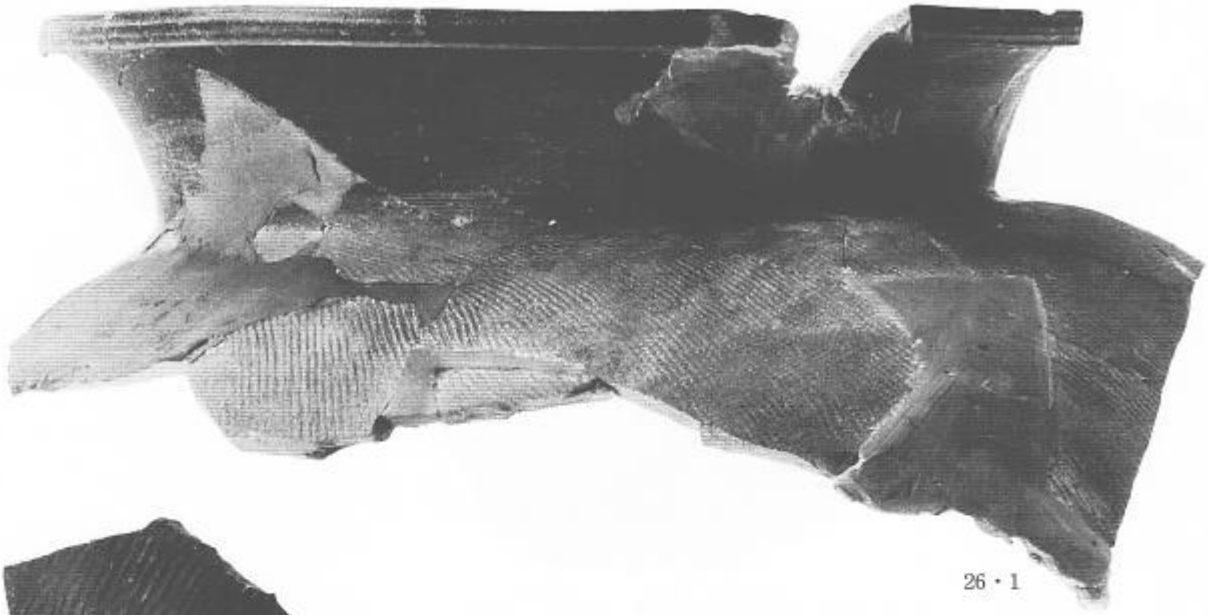
25・9



25・10

25・11

遺構外出土遺物－須恵器〈杯・蓋〉－



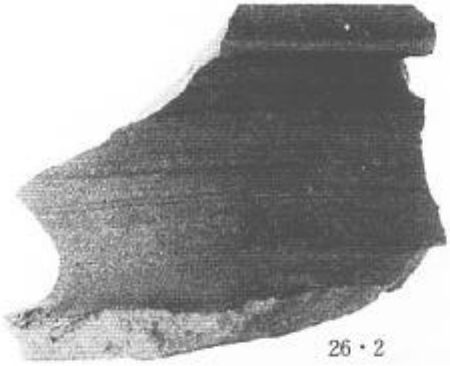
26・1

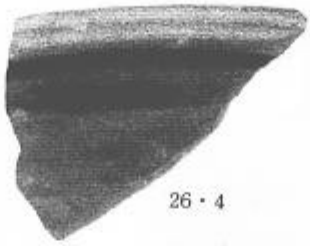
27・1

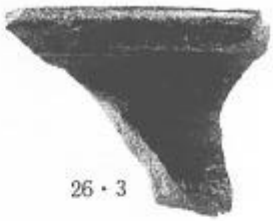
29・6

27・2

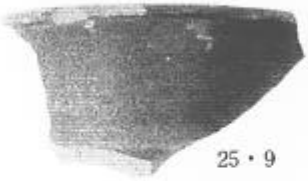
遺構外出土遺物－須恵器〈甕・壺〉－

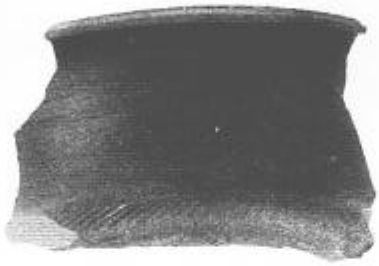

26・2

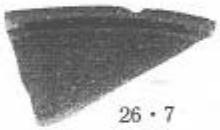

26・4


26・3

26・6


25・9


26・5

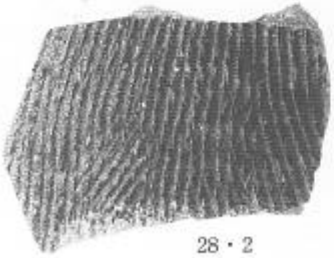

26・7

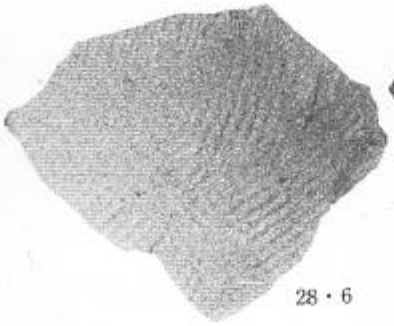
26・8

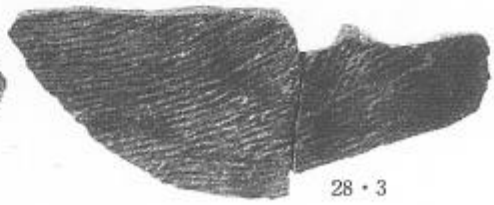
28・1

28・5

28・4


28・2


28・6

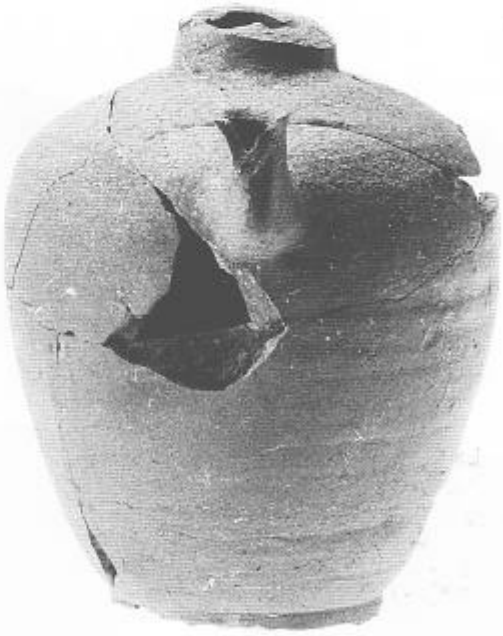

28・3

遺構外出土遺物ー須恵器〈甕〉ー

29・1

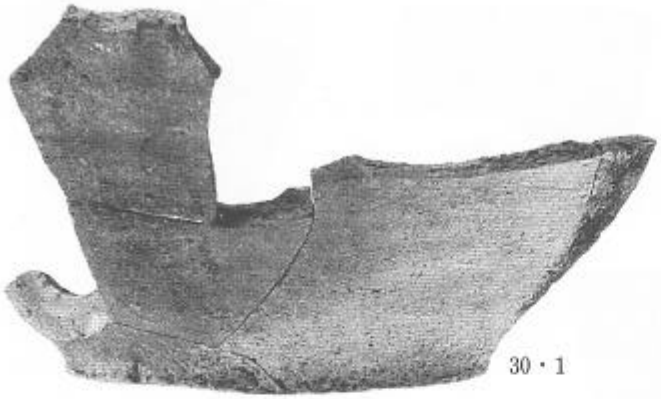
29・3

29・2



29・9

遺構外出土遺物－須恵器〈壺〉・灰釉陶器〈浄瓶〉－



30・1

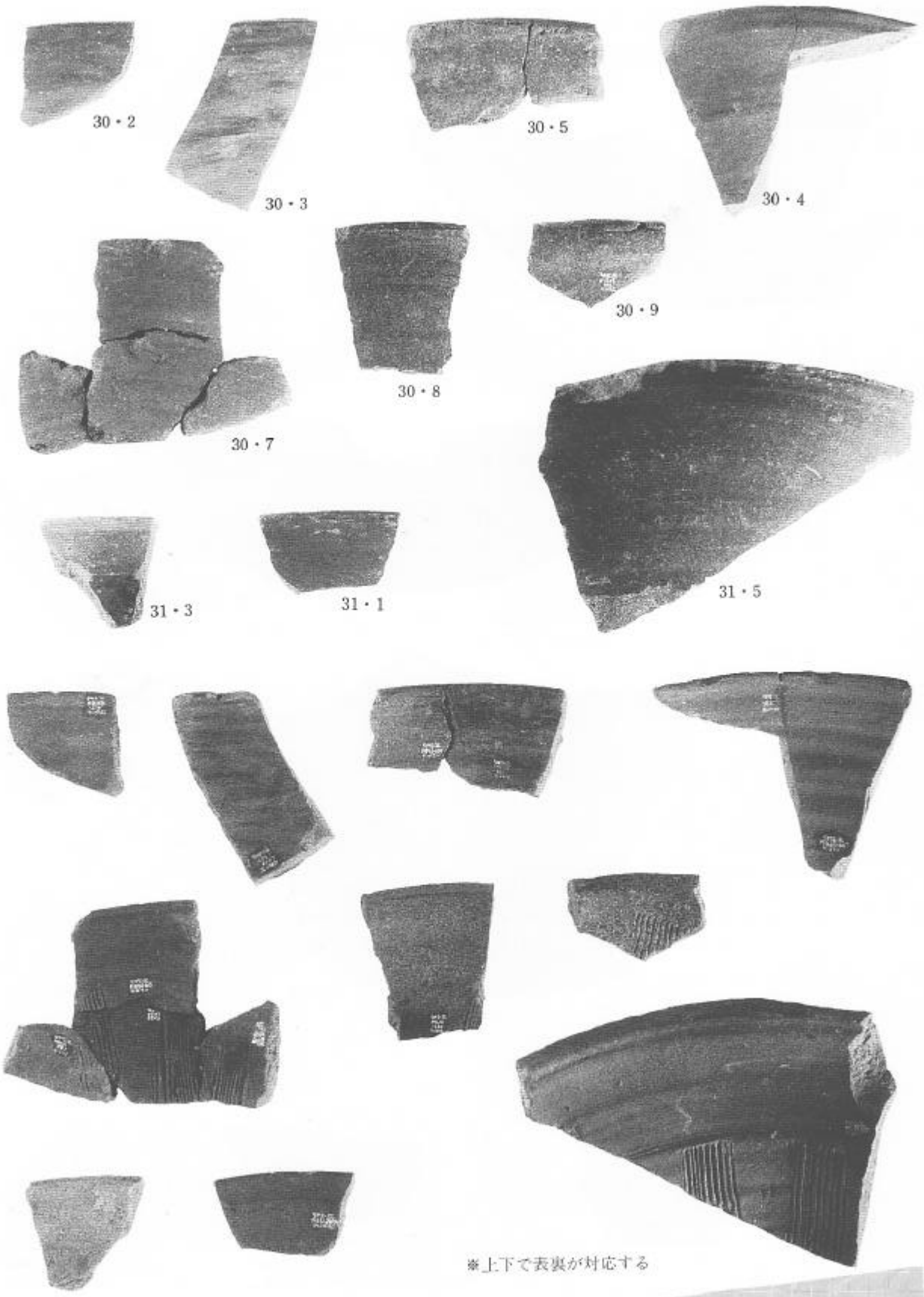
30・6

32・3

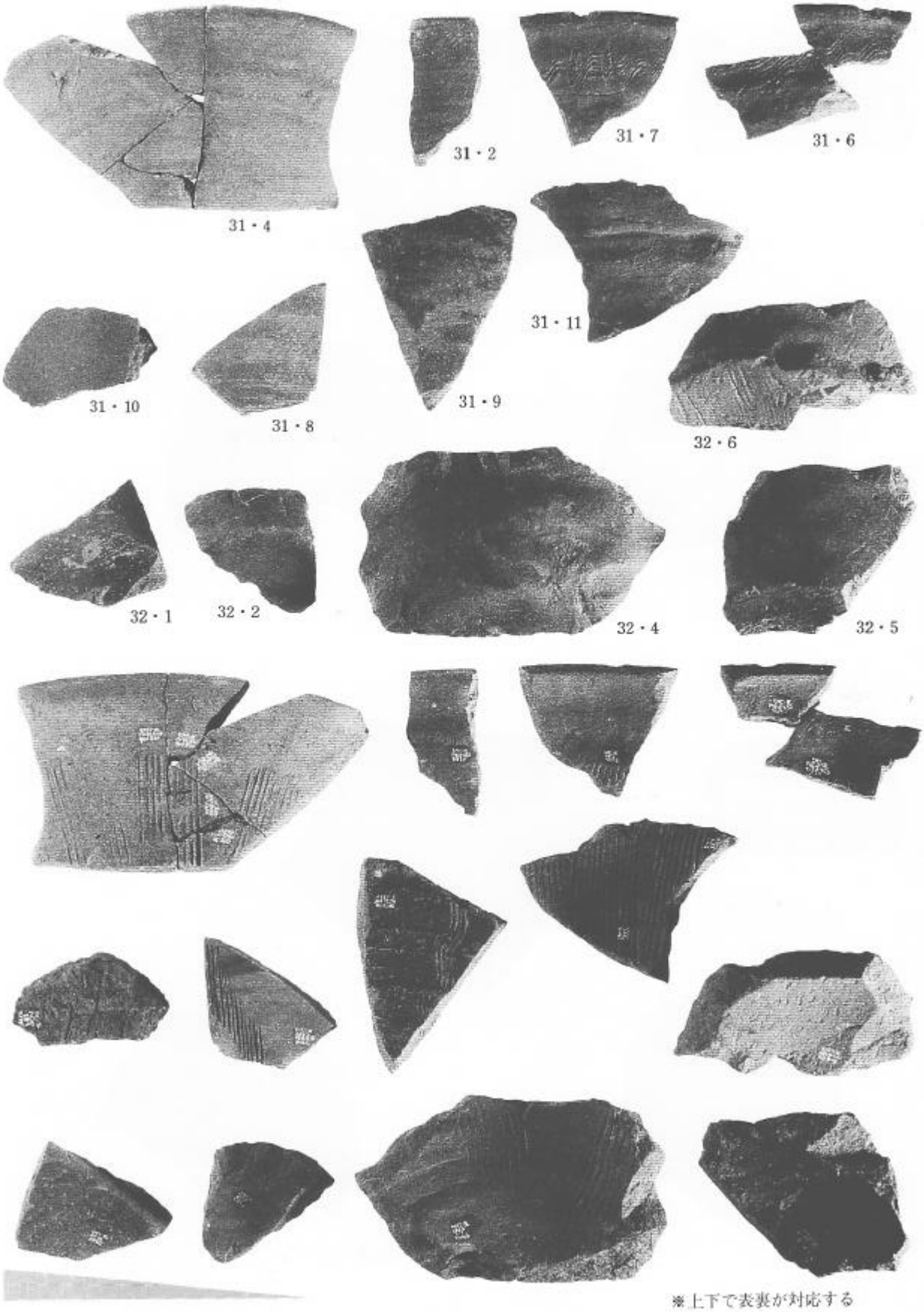
34・7

34・8

遺構外出土遺物－須恵系陶器〈鉢・擂鉢・小壺〉－



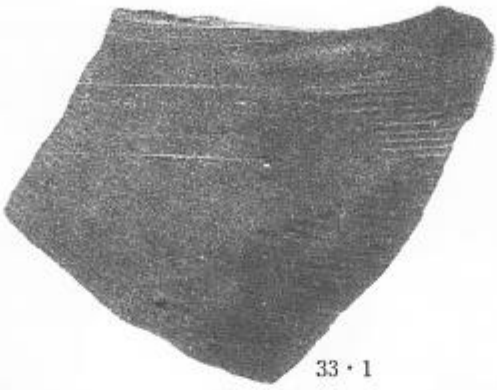

遺構外出土遺物ー須恵系陶器〈擂鉢〉ー




※上下で表裏が対応する

遺構外出土遺物－須恵系陶器〈擂鉢〉－

33・2



33・1

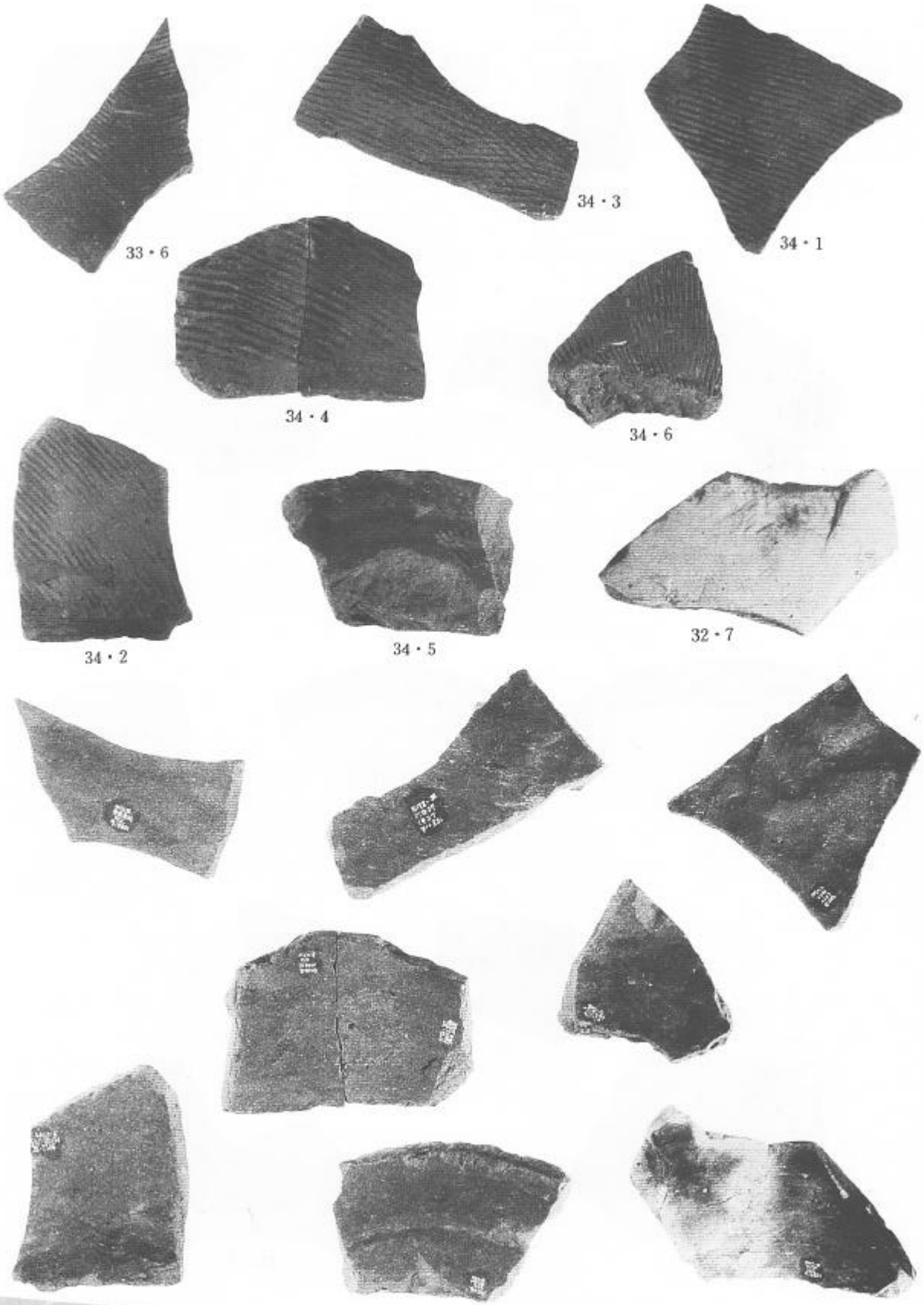
31・3

33・4

33・5

※上下で表裏が対応する

遺構外出土遺物－須恵系陶器〈甕・壺〉－

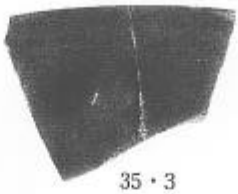


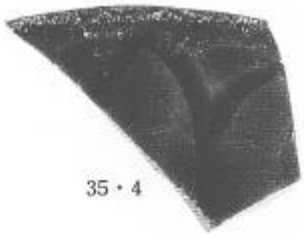

※上下で表裏が対応する

遺構外出土遺物－須恵系陶器〈甕・壺〉、瓦質土製品－

35・1

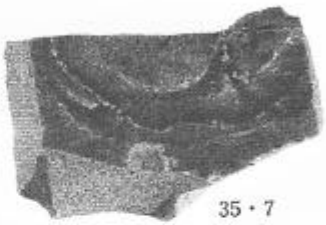
35・2


35・3


35・4

35・5

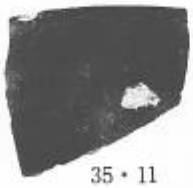
35・6


35・7

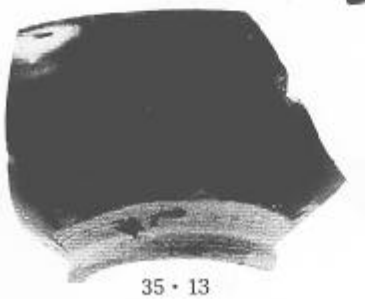
35・8

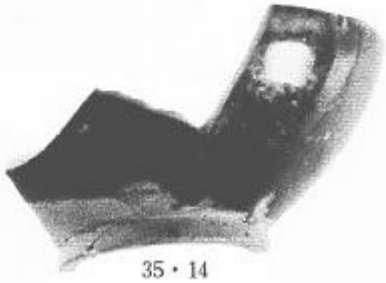
35・9

35・10

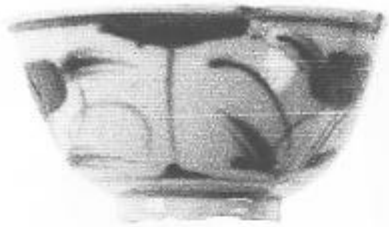

35・11

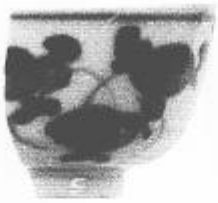
35・12


35・13

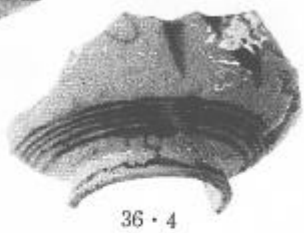

35・14

遺構外出土遺物ー輸入磁器、施釉陶器ー


36・1


36・2

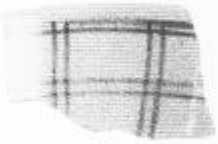
36・3

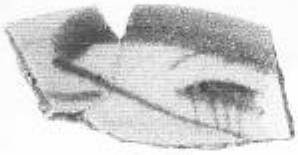

36・4

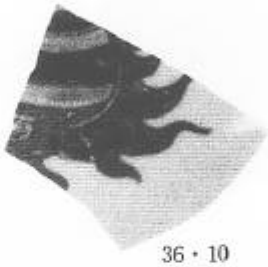
36・5

36・6

36・11

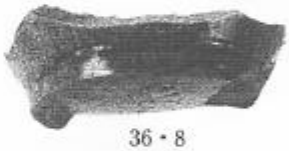

36・7


36・12


36・10

36・13

36・9


36・8

35・15

35・16

35・17

35・18

25・19

36・14

36・15

遺構外出土遺物－染付け陶磁器－

37・1

37・3

37・6

37・4

37・2

37・5

37・7

37・8

37・9

38・1

38・2

38・3

38・4

遺構外出土遺物－土錘・陶錘、磚、ふいご羽口、鉄塊－

39・1

39・2

39・4

39・6

39・5

39・7

39・3

39・8

39・9

39・10

39・11

39・12

40・15

40・14

40・13

40・17

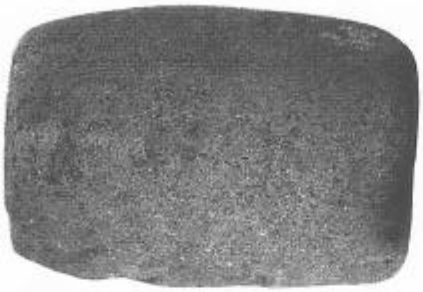
40・16

40・18

40・19

遺構外出土遺物－石器－

40・20

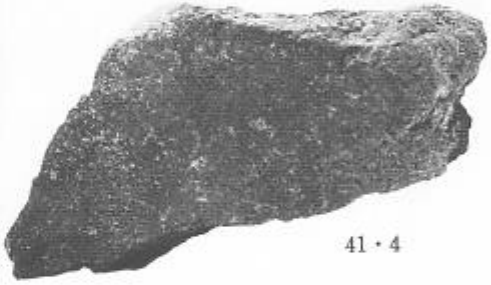


40・21

40・22

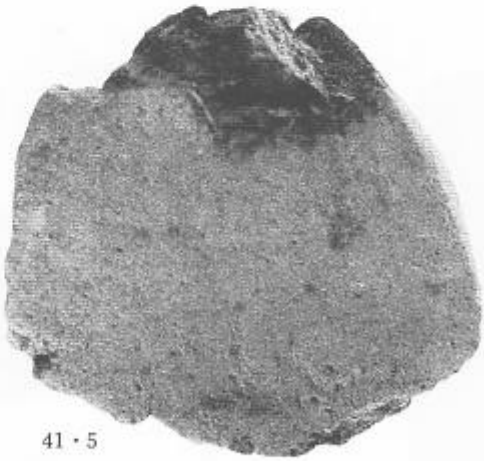
41・1

41・2



41・4

41・3



41・5

41・7

41・8

41・10

41・9

遺構外出土遺物－石器、砥石－